
Students

O K A

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Students

【Nコード】

N3374H

【作者名】

O K A

【あらすじ】

私は小さい時の、記憶を失っているらしい…。

アルバムの中に写るのは、覚えの無い人たちに囲まれた私の存在…。

… 幼き私と同じくらいの男の子。

そして高校の制服を着た黒髪の長い女の人と、優しい笑顔の男の人
…。

既に午前二時を過ぎている。

明日の高校の始業式に遅れることはできない…。

私は忍び足で父親の部屋から退却し、自分の部屋に戻り、…眠りに
ついた。

階段をかけ上る音が廊下に反響する。このペースのまま走ればチャイムの鳴る前に教室に到着できる。私達は、スパートをかける。肺と足が非常に苦しかった。

「ガラガラッ、ドゴォーン」
なんとか教室へ時間内に着くことができた。私達が自分の席へと座ると同時にチャイムが鳴った。どうやら、まだ担任は来ていないようだ。

「キーン、コーン、カーン、コーン…。」

私と麻美の席は、窓側の一番後方の前後の席である。前に座わる息切れした彼女は私に文句を言ってきた。

「ハー、ハア、ハア…。フウ」。

まったく、あんたはいつたいどーゆう神経してるの！メールで今日は8時に一緒に行こうって約束してきたのはあんたでしょ！！いい加減に目覚ましをギリギリにセットするのはやめなさい！！毎回、同じタイミングで鳴ってるからバレバレなのよ！！！」

この高校では3年間、クラス替えをしない。そのため教室の全生徒はほぼ、みんな仲が良い。席替えは気まぐれに行うのだが、なぜであるうか高確率で彼女と近い席になってしまう。ゆえに、私がミスをするると非常に厄介である。結局、私が悪いのだけれど…。

「マアマアあさみサン、それくライにシテアゲナサイよ。」

わざとらしい片言の日本語が、麻美の隣の席から聞こえてくる。このわざとらしさ具合が毎回、私を腹立たせる。

「あら、ミレア。今日は早いじゃないの。」

「ナンデスカ？ソノ棒読み反応ワ。」

この片言日本語を発しているのは、藤林 ミレアである。彼女の父はイギリス人、母は日本人。つまり、ハーフである。彼女一家は父親の仕事の都合でミレアがちょうど高校1年生になったのと同時に日本に引っ越してきたのである。英語は無論、日本語も普通に上手に話せるのだが、人をあざ笑う時に片言になる。

「園歌ちゃん、おはよ〜。」

麻美の前の席からあいさつが聞こえてきた。彼女がこの中で唯一、ありがたい人である。

「おはよ〜。速さん！」

私もあいさつを返した。彼女の名前は飛馬 速という。名前を見たとおり、彼女は足が速い。それもそのはず、本人の話によると中学生の時には陸上部で全国大会の常連であり、名前も陸上界で有名だ

ったそうだ。

窓側の列が私達の声で盛り上がると、廊下側の一番前の席で1人の男子が立ち上がった。その男子は私達4人の方へと向かってきた。そして目の前で立ち止まって言ったのだった。

「この中で誰か担任を呼んできてくれないか。」

彼の名前は塚原 聡なつもと。このクラスで2年間連続でクラス委員長をしている。整った顔つきで真面目な性格とは裏腹に、文化祭の時には覚醒する。彼はバンドを組んでおりボーカルなのだが、校内にとどまらず地元住民のファンが文化祭当日のライブに押し寄せてくる程である。人は見かけによらないとは、このことである。

「飛馬、職員室に行つてきてくれ。」

「えっつ、他に3人いるじゃない。」

「飛馬、足を使え。お前は高速だ。」

塚原くんは腕組みをして立ち続け、速さんは足組みをして座り続けている。両者、一向に動かない。塚原くんは速さんに頼めば本当に速いので助かると思っっているのだろうが、速さんから言わせたら、塚原くんの

「お前は高速だ。」という発言は

「お前はパシリだ。」と聞こえたのかもしれない。私が2人のやりとりを見学していると、前のドアが開く音がした。どうやら、やつとその担任が来たようだ。

「いや、スマンな。遅れてしまった。」

担任は愛想笑いをしつつ、教室全体を見回していた。欠席者はいな

いか確認しているのだろう。担任は全員が出席していることを確認すると教室を一旦、出たのだった。廊下から話し声が聞こえてくる。

「そういえば、あんたの席の隣に前まで机なんてなかったわよね？」麻美に言われてようやく私は気づいたのだった。自分の隣にあるもうひとつの席の存在を…。これは、お約束の展開なのだろうか。再び前のドアが開き、担任と見知らぬ男子が教卓の前に立っていた。「じゃあ、自己紹介ね。」

担任の呼びかけに、見知らぬ男子は応えるのだった。

「初めてまして！時見^{ときみ} 経人^{けいと}です。よろしくお願ひします！！！」

出会いと別れを告げる桜の木が、春風に揺らされ花びらを校門の前に散らしてゆく姿を、私は知らぬ間に教室の窓から見ていたのだった。

影のない場所

「はあ、はあ、はあはあ」

全身の血液が沸騰しそうな勢い。いまは一体何周目であろうか。この体育着の通気性は異常に悪い。おかげで全身がびしょ濡れである。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

それにしても、相変わらず速さんは速い。クラスの先頭を率いり、疾風の如く走っている。私もあれぐらい速ければと羨んでしまう…。

「はあはあはあはあ」

今日は月曜日。今は1時間目。科目は体育。授業内容は持久走。持久走といっても3000m走タイムトライアルという強制的に校庭を15周走らされる。校庭15周とはなんなのだろうか？同じ場所を15周も走る行為は確実に精神が崩壊する。

「ぜえ、はあ、はあ、ゴホッ」

苦しい。心臓が肺がお腹が痛い。めまいまでしてきた。体育がある日にお腹が痛くなるのはいつものことである。バレーボールやバスケットボールなどの球技系スポーツならば、まだ嬉しい。嬉しいという表現が果たして適当なのはおいとして、球技の授業は大抵チームプレイで成立する。よって、私ひとりぐらいフラフラと授業をしなくてもいいのだが、この競技は違う。

スタート兼ゴールラインの白いラインを通過する。みんなが走っているせいで、ラインは元の形をとどめていない。そう、私も同じ。時が経つにつれて体力は確実に削られてゆく。額から流れる汗が、目の中に入る。

「…。はあ、はあ」

空は憎いほどの快晴。鳥がゆったりと飛んでいるのが見える。

自由。解放。広大。

雲ひとつないその青色とは相対的に、私のいる場所は灰色の地面。束縛されたこの時間は、あと何分で終わるのか。

「……。……。」

ああ憂鬱だ。こんな暑苦しい日に容赦なく冬の運動をやらすとは……。絶対に半年間季節を間違えている。

次は数学の授業でたしか微分だったような気がする。まあ多分、必然的に寝てしまうと思うが。

「はあ、早く終わらないかな〜。」

全開にされた窓から勢いよく風が吹き抜ける。さすがに教室のすべでの窓を開けると、その風力はすさまじい。黒板の左右にある掲示板上に貼られている掲示物が風で煽られる。

「ビラビラビラ」

ひとつの掲示物に対して画鋲が2つ使われている。さすがに画鋲を

4つ使ってしまうと効率が悪いのだろう。

「ビラビラビラビラビラビラッ」

とはいっても、4つの画鋏を使ったほうがいいと個人的には思う。このうるさは、結構なものである。

「そろそろ、窓閉めてもいいかな？」

かわいらしい声で数学の教師が教室にいる生徒に問いかける。白いチョークを持ったまま反応をうかがっている。

だがしかし、誰も返事をしない。それもそのはず、教室のほとんどの生徒の顔が机に沈んでいる。

「ビラビラビラビラビラビラビラビラビューン、ガタン」

数学の教師は小さい溜息をしながらも、きちんとすべての窓を閉める。

右手にチョーク、左手に教科書を持ち教室内を歩き回る。微小ながらも教師の靴と床がこすれる音が聞こえる。

「ギギーンッ」

俺は椅子を後ろに動かし、体を伸ばした。一番後ろの席は結構気に入っている。というのも一番後ろなため、俺の後ろには机が存在しない。そのため、他の席と比べて椅子を動かせられる範囲が広い。さっきの体育の授業で周りのみんなはもう数学を受ける気力をなくしている。

時計の秒針の音が静寂な教室に再び音を生み出す。

「よーし。もう終わろう。」

元気のない教師の声により今、授業は終わろうとしている。教師はきつと複雑な心境であるに違いない。

普段、このクラスはとてつもなく賑やかである。特に、俺を除いたこの窓側の連中が…。

そんなクラスでも静かな時間が体育の授業がある今日と木曜日であ

る。静かで授業は平和であるが、授業を受けている生徒が少ないというのは悲しい。

「このクラスは、号令係とかいたっけ？」

「先生、俺です。」

廊下側から落ち着いた声で応答する人物。

さすがに塚原は寝てはいなかった。クラス委員長の肩書だけのことはある。

「起立ー。」

彼の号令でようやくみんなの顔が上がり始めた。

終りのチャイムが鳴ったのは、この号令から数後であった。

さすがに、この人数だと目的地に到着するまで時間がかかりそうだ。前を横に連なりゆっくりと歩く2年生。学年を判別するには上履き

の色を見れば一目瞭然。こんなにゆっくりだと頭にきてしまう。

「キユツキユツツ」

廊下は3時間目が終わるとこの上履きのすれる音で満たされる。これは弁当屋が出張販売をしないこの高校へやって来るからである。その販売開始時間が3時間目終了のチャイムの音なのである。

「しっかし、この人ごみは尋常じゃないな。」

俺の制服と比べると新品同様の制服を着た時見。俺たちはいつもの時間帯に2人で昼飯を確保しに戦場へ出向く。任務は弁当屋ではなくコンビニにある。

この高校は不思議なことに食堂が存在しない。当然、学校の生徒達から苦情が殺到した。そこで、弁当の出張販売とコンビニが設けられたという経緯である。

「俺たちの教室がもうちょい西側だったら、弁当も買いに行きやすいんだけどな……。」

俺も同感である。時見が何を言いたいかというと、弁当が販売されている場所までの道のりが遠すぎることである。俺たちの教室は3階の一番東側の教室。

出張販売するのは西側校門。つまり、1階までわざわざ降りて行かなければならない。

というのも、出張販売をする弁当屋の本店が、西側校門から徒歩数秒。できたてのお弁当をみんなに食べてもらいたいという店主の良心が弁当「西側校門」という公式を作ってしまった。

「まあ、お前は抹茶弁当みたいなのがあったら、わざわざ行くかもな。」

「……。よくそれをご存じで……。」

俺は、内心で笑いつつ真顔で言ってやった。

一応、俺たちも弁当を求めに西側へと赴いたことは何度かある。

だがしかし、この廊下を埋めてしまう程の人ごみでは、俺たちが到着するときにはおこぼれ的なものしか販売されていない。

フライドポテト、から揚げ、メンチカツ……。

小腹を満たす程度なら問題ないだろうが、健全な男子高生の食欲はこの程度では満たすことはできない。

「抹茶が好きな俺でも、そんな怪しげなものは食べないぞ！」
「まずまずのツッコミが隣からとんでくる。」

この時見という人間は、とにかく抹茶が大好きなのである。

転校してきてからもう3ヶ月間、俺たちは仲良く？コンビニに通い続けているがこいつの買う商品は、たいてい抹茶クリームサンドパンと期間限定抹茶ラテである。

たまに、この両方が売り切れてしまっているときがある。その時こいつはなんと、抹茶アイスを購入していた。アイスを昼飯にしても抹茶を摂取しなければ気が済まないらしい…。

階段までもが学生であふれていた。やっと中央階段まで来たというのに、ここからいつもなかなか進まないのである。コンビニはこの中央階段を下りたすぐ正面に設置されている。

「これは、アイスフラグだな。」

「…んっ、いいよ。別に。好きだし。暑いし…。」

階段の踊り場の上部にある窓から、生ぬるい日差しが俺たちを照らす。

この様子だと、あと数分はかかりそうだ。時見は抹茶グッズの心配をする。俺はというと、今日は何も買わなくても困らない。

なぜならば、親が久しぶりに弁当を作ってくれたからである。

結局、家の弁当が一番安定する…。

「そついえば塚原、今日は弁当だろ？何で一緒にきたんだ？」

「おもしろそうだから…ブハッ」

発言途中に時見の右ストレートパンチが俺の鳩尾みぞおちに入った。最近のこいつは恐い。暴力的な意味で…。転校してきた当初はこんなことはしてこなかったのに。慣れというものものは恐ろしいものである。

「ビュイッッ」

店内に入ると冷房の風が非常に快適であった。

俺たちがコンビニに入ることができたのは正午過ぎ。食べる時間はあと数分しか残されていない…。

「な、なんだと…。ア、アイスまでもが…。」

周りを見回すと、アイスを購入する生徒が半分以上だった。

もう夏休みが近い時期であり、アイスや清涼飲料水は完売している。残っている商品はというと、カップ麺と菓子ぐらいである。カップ麺は汁が熱いし、菓子はのど越しが悪いからである。

「あきらめろ。もう2種の選択権しかない。」

俺は慈悲をこめて限られた商品の中からカップ麺を1つ選び、時見に渡した。

激辛キムチ特盛り麺達。

そのパッケージには「冬によく食べられるチゲに匹敵するほど辛い」というキャッチフレーズが書かれていた。

以外にも、時見はあっさりとそれをレジに運んだ。

「オレ、熱くなるよ!」

にこにこ右手の親指を天に突き立て、こっちを向いてくる。

「…。は?」

俺は鳩尾の痛みをこらえ、一人教室に帰還した。

最後の一口を惜しみながら口に運ぶ。

割り箸がおさまっていた袋に店名が記載されていた。

「のりちゃん本舗…?」

このような名前だったことは初めて知った。名前の由来は店主の名前であろうか？それとも、この弁当に大量の海苔が盛られていたことであろうか。

学校の近くにこの弁当屋があると聞いたことがあるが、見覚えがない。なかなかの味だし、値段も300円でお釣りがくる。機会があれば一回ぐらい立ち寄ってもいいと思う。

デスクの足元にある自分専用のごみ箱にプラスチック製の容器を投げ入れる。

割り箸の袋は…。
せつかくなのでとっておくことにした。
左胸のポケットに小さく折りたたんだそれを入れる。

無造作に置かれた書類の山、付箋が貼られている封筒、湯呑に温かさを失った緑茶。

目前に広がる光景は仕事の回転率が低下していることを示す。首元のボタンをひとつ緩め、デスクの整理を開始する。

首元から心地よい冷風が入り込む。職員室内の温度は涼しい適温に保たれている。夏場の仕事を効率化するにはこの冷房と扇子とクーリングが欠かせない。

「ドタ、ドタン。ガサツガサ」

…地道に整理してもなかなか目前の光景は変わらない。

そう、自分は見えて見ぬふりをしているにすぎない。目前を変えるためには仕事そのものを全て終わらせるほかには方法がない。

「シュツ、パサラララパサン」

意地になっていたら肘が書類の山にあたり、その半分が崩れ床にこぼれてしまった。

ああ、やってしまった。この状態を元に戻すのは一苦勞である。順番やら優先順位やらも元通りにしなくてはならない。私は澁々冷房の風で煽られる書類を拾う。

「こうなると、なかなか取りにくいんですよね〜。」

私の腕とは異なる腕が床上の白い範囲を修復してゆく。

隣のデスクに座る細田先生ほそだが助けてくれたおかげで、書類も汚れず元の状態に戻すことができた。

私たち2人は立ち上がり、キャスタ付きの椅子に腰を戻す。

細田先生の担当は数学。こうして昼休みが終わりまだここにいると

いうことは、午後の授業は私と同様に担当授業がないということである。

新しく入れ直した緑茶をすすりながら、私たちは世間話を始めたのであった。

「長原先生も今日はないんですか？長原先生は午後はいつも国語辞書で授業をしているイメージでしたから。」

「本当は電子辞書にしたいんだけどね、生徒に少しでも手を動かせるということに頑張っているのよね。」

温かい湯呑を両手で持ち、お互い向き合いながら同時にすする。渋い香りと後に残る苦味が体を癒す。

喉を通り過ぎる熱さと体を冷やす冷気が調和していく。

私はもう数年間教師生活をしているせいか蝉の鳴き声を聴くことが苦手になってしまった。蝉が嫌いなわけではない。長らくこの職業をしていると身についていまうというか…。

いわゆる職業病のようなものである。

「今日の2時間目は長原先生の生徒たちの授業だったんですけどね、あまり授業らしいことはできませんでしたよ。仕方がないんですけどね。私の授業の前が白川先生しらかわの授業でしたから…。」

すこし思いつめられた表情の細田先生。無理もない。この時期は期末試験のために授業の進め方をうまく調節しなければならぬ。自分の持つ担当クラスの授業内容をすべて合わせなおかつ、テスト問題も作らなくてはならない。

テストをする生徒本人たちも大変であろうが、私たち教師も赤点受賞者に夏休みの補習というプレゼントをしなければならぬ。

よって、少しの授業の遅れも致命傷になりかねない。そう、蝉がくる季節は私たち教師の夏を奪いかねない時期の暗示なのである。

「でも、飛馬ちゃんと塚原くん、時見くんは優秀でしたよ。ちゃんと眠らないで授業を受けてくれていたし…。」

私の授業で寝ていたら、問答無用で辞書で殴るであろう。こういう

ときにも電子辞書のほうが活躍する。紙の辞書より痛そうだし…。飛馬は1年生の時からいい子である。私の言うことも素直に聞き入れるし、成績優秀。運動も論ずる必要がなく、クラスのみんなからも慕われている。申し分のない生徒である。

塚原もなんだかんだでいいやつであろうか。ちょっと無表情で言葉に棘がある時もあるが、3年間連続でクラス委員長をやるくらいだからたいしたものである。

そして時見は…。

うん…。いいと思うぞ。あの騒がしい連中が周りにいながら成績優秀。

クラスのみんなともやっと打ち解けたみたいだし。

まあ、時見には少しうるさめのほうが正解だったかな。

「トルウルルルルルル」

細田先生の言葉で思い巡っていると、電話の音が鳴り響いた。音の振動が緑茶の表面に波紋を描く。

「はい、もしもし。え〜。はい、少々お待ちください。」

頭が見事なまでのバーコードの人物。メガネをかけ、扇子で煽ぎながら電話の対応をする中年のオッサ…。教頭がこつちを見て言ってきた。

「そのこの2人は白川先生がどこにいるか知らないかい？」

目が合ってしまった。教頭と関わるとうるくなことが起きない。

この前なんか、明らかに自分に用事がない状況で私に他の先生に書類を渡すように頼んできた。

まったく、教頭の働きをしてほしいものである。

私は教頭の対応を細田先生に押し付ける。

「えーと…。多分、校庭で授業をなされていると思います。」

渋々、妥当な応答をする細田先生。たしかに、白川先生が外にいることは間違えない。なぜならば、さっき私は昼休みの終りにジャージ姿の白川先生が職員室から出て行くのを見たからである。

こんな外が暑いというのにジャージで授業するとはいろいろな意味で危険であるが心配はないであろう。

「悪いけど、呼んできてくれないかね？」

予想的中。このパターンはもはや典型。このオッサンは少しは自分で動こうとはしないのか？

私がこの学校に来た時からこのオッサンは教頭の座に君臨していた。当初からこんな感じであり、この数年間で性格の改善はなされなかった。変わったのは、髪の毛のポリウムくらいであろうか。

「教頭。提案なのですが、白川先生の携帯に連絡するというのはどうでしょう？」

いい提案である。私が同じ境遇にいたとしたら、これと同等の答えを述べたであろう。

この炎天下では校庭までいくだけで蒸発してしまう。なるべくこの癒しの空間を出たくないという気持ちはみな同じであろう。

「……。ブイーン。ブイーン。」

どこからともなく携帯のバイブレーションの音が鳴り響く。鳴っている位置は白川先生のデスクがある部屋中央からである。

そう、教頭はすでに電話を切り替え、細田先生の策案を実行していたのだった。

「ちよつと最近、腰痛がひどくて。すみませんね。細田先生。」
誰にでもわかる皮肉を込めた愛想笑いで教頭が言う。

しかし、いつまで腰痛なのだろうか。私に用事を押しつけた時も腰痛がどうのこうのであった。

お疲れ様です。細田先生。

透明な風は眩しいほどの青空へと溶け、太陽とともに世界を照らし
続ける。

影のないその場所は、幼き向日葵たちに夢を語る。

夏風のささやき

右側にはきれいな砂浜と限りなく広がる海が。左側には活気にあふれる様々な店が並ぶ。

普段よりも賑やかなこの通りは私たちが毎日のように通う登校道。絶えることなく鳴き続ける蝉の声はこの季節の象徴であり、同時に私たちの聴覚を強引に刺激する。

歩道に直線的に植えられた樹木がつくる日陰をえらびながら、私たちは学校へと歩いていった。

「あ〜っつー。今日はいったい何 まで上がるのよ…。」

「えーと、たしかねえフライパンで目玉焼き焼ける温度までいくつてよ〜。」

「ミレア…、黙りなさい。」

自分の顔を必死に扇いでいる夏バテ気味の麻美ちゃんと、異様にテンションの高いミレアちゃんが私の前を歩く。

私は鞆の中からタオルを取り出し、汗をふきとる。

「…そういうえば、速さんは今日部活がある日だったっけ？」

「ううん。今日は違うんだ。昨日の夜に白川先生から電話がきて呼び出されたんだ。ちよつと話があるって。」

ミレアちゃんの問いかけに私は微笑みながら答えた。

しかし、白川先生が電話をしてくるとはめずらしい。というか、初めての出来事である。いつもなら部活が終わった後に伝える人なの

だが…。急用なのだろうか？

「白川先生って変わった人よね。夏だっというのに、学校では常にジャージだし。絶対、暑いでしょうに。」

「どちらかという天然キャラだよ。さりげなく、ノーブラの生ジャージだからっ。」

くすりと笑いながら麻美ちゃんに真実を伝えるミレアちゃん。私もこのことには気が付いていた。高校1年生の時から私は白川先生と毎回部活で顔をあわせているが、あの危険な服装はいまだに変わっていない。学校では、トレードマークになっている。

「…えっ。つまり、角度によっては見えちゃうじゃない！」

驚愕と啞然が入り混じる反応をする麻美ちゃん。彼女はどうかやら初めて知ったようだ。

白川先生は胸がおおきく天然でかわいい。このスペックに騙され入部した男子生徒も多く存在する。

だがしかし、あの先生をつくる練習メニューは地獄に等しい。入部から数日もたたずにやめていった生徒を私は幾人も目撃している。

一歩また一歩と歩きたびに横からの冷たい風が私たちの体を癒す。

夏休みで客足も多くなり繁盛する店の数々。

ファミレス、ゲーセン、スーパー、喫茶店…。

商店街の中、人の動線が私たちに、これらの店からの冷風を与えてくれる。

潮の香とともに、海風が私たちの髪を揺らす。

「ねえ、アサミンっ。今日は園歌は補習ないの？」

「…な、なによアサミンって…。園歌なら今朝メールがきて、体調

が悪いから出れないらしいわ。」

園歌ちゃん、麻美ちゃん、ミレアちゃんの3人は、夏休みの初は補習を受けに学校へ行っている。これは今年だけのことではなく昨年、一昨年も同様の夏を彼女たちは過ごしている。

「もう、おかげで数学恐怖症だよ。授業内容は難しくないんだけど、授業中に必然的に寝ちゃうのが敗因かな。」

「というか、授業の構成がいけないのよ。毎年のように数学の前に体育があるからダメなのよ。」

2人の気持ちは今ちょうど同じであるに違いない。彼女たちは空を見上げ、入道雲よりも遠く彼方をみつめている。

そう。細田先生の授業は比較的にやさしい問題しか出題されなく、教え方も上手い。だがしかし、白川先生の無情な授業により細田先生の授業は無効化される。

白川先生本人は気が付いていないが、あの授業をすべてこなせば軽々100kmマラソンができる…と思うぐらいに激しい。

体育の授業を放棄するという方法があるが、封じられてしまう。

なぜならば、先生の授業方針を少しでも否定するだけで白川先生は涙目になり生徒たちをせつない顔で見つめてくる。これが授業をやらざるを得ない雰囲気をつくる。

よって、天候が雨などになり体育館になる以外は授業を受けることになってしまふのである。

陽炎な太陽の日差しは白い校舎に反射し、より一層強い光となって広大な海へと差し込む。

話をしながら歩いていると、いつの間にか私たちは高校に着いてい

た。

補習開始前のせいか、校門周辺は大勢の生徒であふれていた。

「あゝあ。着いちゃった。もうちょっと話していたかったな〜。」
口先を無邪気にとがらせながら呟くミレアちゃん。終始、彼女は異様にテンションが高かった。

彼女は、その透通る碧い眼で麻美ちゃんの肩を熱心に見つめ、爆笑していた。

「とりあえず、補習が終わったら一応、速さんに連絡するから一緒に帰れそうだったら返信頼むわね。」

体を燃やす陽気に耐えながら笑顔でいう麻美ちゃん。

私は、やっと気が付いた。まだ爆笑している彼女がなにをしたかということに…。

「…なにをさつきから騒がしい。ほら、さつさといくわよミレア。教室まで結構あるくんだから。」

まだ気がつかない彼女を私は救出することにした。

彼女の耳元で「肩を見て」と、囁く。

自分の肩にのっているカサカサとした茶色い物体をまじまじと見つめ、数秒間硬直したあと絶叫する麻美ちゃん…。

「………………。きゃあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！！！」

頬を真赤に染め、熱を吸収した地面の上につづくまる。このかわい
い叫び声で周りにいたすべての男子生徒を見事に振り向かせた。怒
りと涙が交じるその目はミレアちゃんの両目を眈々と睨みつける。

「ムフウ〜〜ン。アサミン萌え〜っ。」

ミレアちゃんは蝉の抜け殻をのせていたのである…。

後のミレアちゃんの話ではあれから麻美ちゃんの説教を校門前で受け、結局2人は補習に遅刻して出たという。

…今日の患者入居率は群を抜いている。

次々と来る生徒達の症状はすべて軽度の熱射病。夏休みというのに、わざわざ学校まで来て部活で体調を崩すというのも皮肉なことである。

大会に向けての猛練習だとしても、顧問の先生方はもう少しやさしくしてあげればいいのと思う。

「コンコンッ」

保健室特有の消毒液や湿布の匂いに囲まれ、俺は新たな訪問者の対応をするのであった。

今度は野球部かサッカー部か。それとも陸上部か…。

「はい、どうぞ！入ってきていいよ。」

ドアが開いた瞬間、大柄な女がズカズカと突入してきた。

しかし、なんでコイツがこんな時に来るのだろうか？

「よ〜お。島田先生しまだ！ちよつと、空いてますかね？」

職員室にいるはずの長原が何のようだろうか？俺は今、忙しいというのに…。

「なんだよこんな時にー。見たとおり忙しいんだ、帰れ！長原っ！」

「せめて、長原先生帰っていたいただけますか？だろっ！」

長原とはもう高校生の時からの付き合いだ。俺とコイツ、細田と白川は同じこの職場（高校）を卒業した…。

俺がこの高校で保健室のお兄さんをやり、残りの3人はそれぞれ教師をしている…。

「まあ、見たところ本当に忙しそうだから戻るかな。今日も暑いからなあ〜。」

「結局、お前は何をしにきた？いやがらせか？いいなあ！仕事がない奴はー！」

「いや、わたしもちゃんとあるからね。詳しいことは後でメールするから。」

保健室の状況を把握した長原は手で軽く挨拶をし、立ち去っていった。

たまにここへ来たかと思うと、仕事の邪魔だけして立ち去る。

つたく。嫌な性格をしているぜ…。

「コンコンツ。失礼します。」

時間の無駄だ…。保健室のお兄さんを再開することにしよう……………。

この日の夜、長原から一通のメールが送られてきたのだった。

窓のブラインドから外を覗くと、すっかりと暗くなっていた。

いつものことではあるが時間の感覚というものがすっかり狂ってしまっている。

大きなあくびをし、目尻が湿っていることを確認した俺は気分転換にシャワを浴びにくことにした。

白衣をカルテが散乱している机の上に放り投げ部屋を出ようとした瞬間、ブラインドが振動するほどの轟音が聴こえてきた。

「ドンドンガドン、カッカ、ドンドンガドン」

再び窓際に歩み寄り、外の様子を観る。

まず、目に入る景色は白い高校の校舎。それもそのはず、この病院が高校の裏にある丘陵の上に建てられているためである。そのため、海や街を一望することができる。音は海辺の方から聴こえてくる。

「ドンドンガドン、カッカ、ドンドンガドン」

暗闇の中、目を凝らしてみると海辺で提灯ていとうの灯りを確認することができた。

俺はようやく音の正体に気がついた。これは、大太鼓の音である。きつと明日開催される夏祭りのリハーサルをしているのであろう。このあたりの地域では、海と街を共有して祭りを行う。また、近隣の学校も共同で屋台を構える。

なんといっても、海辺から上がる打ち上げ花火の迫力は格別である。毎年この祭りは開催されているが、この花火が俺の仕事中に容赦なく仕事を揺らしてくれる。距離があまり離れていないため、一発また一発と花火が上がるたびに対応をしなければならぬ。

よって、繊細な手術をどうしても緊急にしなければならぬ時以外は、祭りの期間は手術はしないようになっている。

俺自身、ここ何年もこの祭りには行っていない。最後に行ったのは高校生の時である。まあ、仕事が忙しいこともあり、祭りに行ける機会が少なくなってしまうたこともあるのだが…。

俺は外の景色を見納め、シャワを浴びに行った。

シャワを浴び終え再び部屋に戻ると、白衣の中に入れてある携帯のランプが点滅していることに気がついた。

どうやら、誰からかメールがきているようだ。

今日はおもいきって学校を休んでしまった。決して仮病ではない。今朝、いつもどおりに反復的に鳴り響くベル静め、制服に着替えようとしました。

薄い生地のできた夏用のパジャマのズボンを脱いだ瞬間、その症状は起きた。

片足で立ち、片方の足からズボンを脱いだ時、急に景色が黒色に変化した。ジワジワと目を侵食してゆき何も見えなくなる。バランスを崩した私はベッドの上に尻もちをしてしまった。

もう一度立ち上がりズボンを脱ごうとする。ベッドの反発で反動をつけ立ち上がる。立ち上がった瞬間、再び部屋の景色が黒色に侵食される。

私はこの原因を、白川先生のせいにすることにした。

思い返せば、夏休みに入る前の体育では走る動作しかした記憶がない。たぶん、この暑さと疲労で貧血にでもなったのであろう。

というわけで、いま私は光のない部屋のベッドの上で休んでいる。補習に行かなくていいことは嬉しいが、することがなくなってしまう。暇に暇を重ね、退屈を極める。ずっと眠り続ける行為は私には不可能に近い。

天井があるであろう上を向きポーツとする。

「ビーン。ビーン。ビーン。」

枕元にある携帯の振動とともに、メール受信を示すランプの点滅が部屋に色を与える。

「FROM：貴殿院 麻美

あなた、体調大丈夫？みんな心配してたわよ。

あなた、明日のお祭りに行ける？毎年行ってるから一応連絡したんだけど…。

体調が良くないなら無理せずに断っていいのよ

なんでもいいから連絡ちょうだいね。じゃあ」

このメールで私は時が経つのは早いものだと感じた。

麻美と一緒に私は小さな時からこのお祭りに出ている。毎年、この日が来ると夏休みが消えしまつてゆくのを惜しむのと同時に、学校が始まることを共によく嫌がっていた。

「コンコンツ。入るわよ。」

ドアをノックする音とともに、部屋の明かりをつけ、様子を伺いに母親が入ってきた。

浴衣の行方を母親に尋ね、私は携帯を手にとった。

何色もの氷を食べ合い体を震わせ笑い合う。

共に夜風を感じ、夜空を見上げる。

淡く燃える花の色が、一夜の記憶を紡いでゆく。

夏空の居場所

約束した時間の前に私は校門の前に1人立っていた。

見慣れている学校の風景も毎年この日が来ると姿を変える。

校庭には様々な屋台が並んでいる。

わたあめ、かき氷、やきそば、りんごあめ、たこ焼き、射的、金魚すくい…。

小さな子供たちが、その小さな手の中におさまりきれない程の100円玉を大事に握りしめ、無邪気に走る。

人ごみの中に消えてゆくその小さな背中を私は見つめていた。

それにしても、もう約束した時間ちょうどだというのに、誰1人姿をあらわさない。

まさか、私の誘いをことごとく裏切ったのであろうか？昨日のメールでは全員、来ると言っていたはずであるが…。

園歌は病み上がりの状態であり、遅れることは想像がつく。

だが、残りの4人の状況が想像できない。

速さんは几帳面なので1番に来てもいいはずである。

塚原くんも真面目な性格なので、もう来てもいい頃だ。

多分、彼は時見くんと来ているのだろう。あの2人が一緒になると妙に会話が盛り上がる。口数の少ない塚原くんが唯一、多く話している相手が時見くんなのである。

ミリアは…。まさか、また昆虫採集をしているのではっ！

補習のときの借りがある私は、仕返しの計画をしておくことにした。あらかじめ用意してきた手作りのくじ引きに細工を施す…。

約束の時間から数分後、ようやく1人目が到着した。

病み上がりの彼女は、特に変わった様子もなく普段通りに声をかけてきた。

「ご、ごめんね。浴衣がなかなか見つからなくて…。遅れちゃった。」

「いいのよっ！あなたは優秀よ！！体調がすぐれないのに、速さんより早く来たんだから。」

申し訳なさそうに話す彼女を、私は明るく励ました。

まだ、ぬるい風が私たちの浴衣を揺らす。

「園歌、懐かしいわよね…。」

「…、そうだね…。」

私たちは残りの4人が来るまでの間、小さい頃の思い出話をするのだった…。

「…麻美お嬢様、朝食のご用意ができました。」

1人では広すぎるその空間に私は閉じ込められていた。毎日が同じ台詞、同じ動きで組み立てていかれる世界。

その束縛に抗うすべもなく、私は翻弄されていた。家の中だというのに白々しい周りの人々。幾人もの仕様人が私の全てを奪い去る。

34

今日から生まれて初めて「学校」と呼ばれる場所に行く。不安を告げる影が、私の胸を狭窄していく。

「本当はもっと上品な学校が良かったんだけど、この街には1つしかなくて。」

「大丈夫さ。英才教育をさせてきたんだ。どこの学校に行かせても同じさ。むしろ、学校に行かせなくてもいいくらいだよ。」
高々と声をあげ、笑い合う父と母。

この笑い声は今でも覚えてる。

1人の娘を讃える声は、1人の少女を傷つけていく。

家の大きさと同じくらい建物を見たのは、あの時が初めてだった。かわいらしい服を着た私と同じくらいの子たちが、その建物の中に入っていく。

1日でこんなに多くの子と過ごすのも初めて。

「学校」とはいつたいどんな場所なのだろうか？どんな事をするのだろうか？

体を締め付ける堅苦しい服を我慢して私は「教室」という場所に行った。

「みるよあ、あのふく！へんなの〜。」

「あのコってたしか、ざいばつのコなんだって〜。」

「うちのおかあさんが、あんまりはなすなっていったよ。」

「なんで〜？」

「ソレハ、ミンナトチガウカラ…。」

私は望んでもいないのに、みんなから避けられていた。

まだ、何も知らないのに。

まだ、何も話していないのに。

まだ、何もしていないのに…。

甲高い声とその空間を埋めつくす。話し声と笑い声が入り交じり、1人また1人と紹介が終わるたびに拍手の音が鳴り響く。その中で私は1人、机に顔を向けることしかできなかった。自分の順番がくるまでの間、1つの景色しか見れない。今、みんなはどんなものを見ているのか？
今、みんなはどんな風に笑っているのか？
閉ざされた1つの場所は、確実に私を孤独にさせてゆく。同じ場所にいるはずなのに…。

「つぎは、貴殿院さんです。…貴殿院さん？貴殿院 麻美さん！」
暗闇の世界の中、私の順番がきたことを知らせる先生の声。
硬直していく体に耐えながら私は黒板の前に向かう。
あまり離れていないのに、なぜか遠く感じる。
私の歩く姿は、みんなの視線を冷たくさせていく。
…ある1人を、除いて…。

やっと見れたみんなの姿はとても残酷なものだった。
誰1人私に目を合わせてくれない。

私が前に来た瞬間、その空間は沈黙した。私は机の上と同じ世界を望まざるを得なかった。

「。。。。。。き、きでんいん あさみです。

よ、よろしく おねがいします。。。」「

そう。私には何もできない。私には何も変えられない。
目の前に広がるのは同じ空間。沈黙だけが私の居場所だった。
…ある1人を、知るまでは…。

家の中も、学校という場所も、教室という空間も私には同じ世界。
私の何がいけないのか。何が悪いのか。何を直せばいいのか。
自分の考えることは所詮、無意味。

涙を堪え席に戻ろうとした時、私の居る世界に微かな光が差した。

「はああい!!!」

元気に手を天井に突きあげ、にっこり笑いながら目を合わせてくれた1人の女の子。

周りにいた他の子たちが不思議そうに彼女を見つめる。

彼女は恥ずかしそうに手をおろし、目をそらした。

よくみると、その子が座るのは私の隣の席だった。

あの時が初めてだった。私が涙を堪えることができたのは…。

小学校に入学してからの毎日、彼女は私の家まで来てくれた。
学校でのみんなの視線は変わらなかった。私の全てが否定化されて
ゆく。私の存在が影そのものだと思えるぐらいだった。

「おまえ！なんできゆうしよくたべてるんだよ！」

「おじょうさまは、こんなものたべられないんじゃないかねーのかよ！」

「おまえには、これでじゆうぶんだろお！」

給食の時間、私の机に置かれるのは何も食べ物がついていない空の皿とスプーンだった。

この時も、彼女が支えてくれた。

罵声を浴びながらもただ1人、私を信じてくれていた…。

「しらとり！なんでおまえがでてるんだよ！」

「おまえもそいつのなかまなのか？きもいわりい。」

「おまえには、かんけないだろ！」

彼女は無言で、私の給食を運んでくれた。

季節の流れは早く、いつの間にか夏がきていた。

長らくの家での生活は、この日差しに耐えられる体をも奪っていた。

「きょうもあついね〜！そういえば、きょうここでおまつりがあるのしってる？」

お祭りという単語は知っていたが、それが何なのかは知らなかった。境界はあるが、家の中も外の世界もどうせ同じ。

私の住む場所は、外の世界を教えてくださいなかつた。

「あさみちゃん、いったことないの？いっしょにいつてみようよ！いろいろおしえてあげるから！」

そこには黄色い帽子をかぶり海辺を指さす彼女と、胸を高ぶらせる

私が出た。

いったん家に荷物を置いてから私たちはお祭りに向かうことにした。私は、玄関の前で鼓動する胸を抑えながら彼女がくるのを待っていた。

「おまたせ〜！いこうあさみちゃん！」

私の手をしっかりと握り、目的の場所に向かおうとする彼女の浴衣姿は、今でも鮮明に覚えている。

夕暮れの夏空、心地よい風が私たちの小さな背中を押していた。

人々が賑わうその場所は見たことのないもので満ち溢れていた。様々な食べ物の香りがし、夜空を突き抜ける轟音が鳴り響く。これだけの人々が笑い合う姿を、楽しそうにする姿を見るのは初めてだった。

「おまつりはね、みんなでたべて、みんなであらって、みんなですごくところなんだよ！」

あさみちゃんは、なにがしたい？」

何がしたいと言われても何をしたらいいかわからなかった私は首をかしげ、彼女に頼ってしまっていた。

彼女は残念そうな顔をして、どこかに走って行ってしまった。

1人になってしまった私は、その場にたたずんだままだった。目尻に涙を溜め堪えていると彼女の走る姿が見えた。両手に私たちの背丈ぐらいあるだろう大きな袋を持ち、こっちに向かって来た。

「ふう。はいっ！これは、わたあめっていうんだよ。」

渡された片方の袋の中を開けてみると、ふわふわとした白い塊とが入っていた。彼女の食べる姿を見て、私も真似して食べてみた。

口の中に入れ、舌でなめてみる。優しいその塊は意外にも、すばやく溶けていつてしまった。

1つの店だけ異様な人の数であふれていた。私たちは人々のあふれるその中をかき分けながら進んでいた。

そこには、きれいに輝く装飾細工が売られていた。

その光景は、私が今まで見た景色の中で1番美しかった。私は魅了され微笑んでいた。

「あさみちゃん、どれがほしいの？」

彼女の問いかけに私は首を横に振る。これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。幼い自分は、あらゆるものから逃げていた。

「…あさみちゃんは、いつもそうだよね。」

いつも笑っていた彼女はその時、真剣に私と話をしてくれた。

「もっと、あさみちゃんはじぶんをみんなにつたえなきゃ。」

がっこうでも、ほかのことちゃんとはなした？…はなしてないよね。あさみちゃんはひとりにならなくていいんじゃない。」

ひとりに、なりたがっているんだよ…。

私は勝手に自分が憎まれているのだと勘違いをしてきていた。

自分の身分がいけない。自分の格好がいけない。

周りの人間は私を別の世界の人間にさせようとしている。

ならば私はみんなが望む世界で生きよう。

何を言われても何をされても知らないフリをする。

仮面を被りひたすら本当の自分を隠す。

それが私の正義だと思ってきた。

だけど、もうその必要はないことを知った。

そう、私は。

わたしなのだから…。

彼女は私に1つ選んで買ってくれた。

何の変哲のないただの髪留め。

値段も1番安く、たくさん売れ残っていた商品。

「……………あ、ありがとう。」

私は嬉しかった。初めて心の底から見えた感情。

それは、本当の自分の気持ちを初めて、伝えられたことだから…。

「麻美？麻美っ。麻美！」

「あゝ。ごめんゴメン。で、どこまで話したっけ？」

「麻美ったら急に遠くを見つめて、ありがとっつて言ったからビツクリしちゃったよ。」

…しまった。おもわず声に出してしまっていたようだ。

私はあわてて白しろを切る。園歌の追求に必死に対抗していると、残りの4人がようやく来た。

「ごめんね。途中で白川先生に会っちゃって…。」

「悪い。遅れた。時見のせいだ。」

「半分はお前だろ！塚原っ。」

「愛しの麻美におみやげだ〜。」

私たちの脚先は、賑わう光の中へと導かれていく。

「〜ッ！ミレアはしつこいっ！…！…！」

お揃いの青い髪留めが、2人に今日も時を刻んでゆく…。

私たちは今なにを感じ、なにを見つめているのか。
私たちには理解できなかった。
この夜空に満ちる花に出会うまでは。

夏潮

昼間の日差しのせいか、足下あしもとから砂けむりがしつこく身体を包む。歩きたびに涼しい風と混ざり私たちの鼻をくすぐる。順番待ちをする人や、走り回る子供を追いかける人で溢れるその場所に、私たちは立ち止っていた。

「あ、あれっ。…どうしたんだ？」

校庭の真ん中で急に歩くのをやめたことを不思議そうにする時見くん。そうか、彼はこのくじ引きをするのは初めてだった。

「はーいつ！今年も恒例のドキドキくじ引きをするわよっ！！！」
大声でみんなに伝える私に、彼は質問してきた。

「あ、あの〜。なんですか？それ。」
「ようはペア組みだな。」

何も知らない時見くんに簡潔に答える塚原くん。時見くんが知らないのも無理はない。この企画は高校1年生の時から始まった。

私と園歌は幼馴染みだが、残りの3人とは高校1年生の時に知り合った。

まだ、いまのように仲良くできていなかったその当時、親睦を深めるために発案されたのがこのお祭りにみんなで行くことであった。その際に誕生したのがこのくじ引き。そう、これは海辺に上がる花火を観に行く時間まで誰と一緒に周るかを決めるものである。

このお祭りは近隣の学校や商店街、海辺など、とても広い範囲で行われている。

そのため、全員が一緒に行動してしまうと他の場所に行けなくなってしまう。

つまり、この企画は一人ひとりがお祭りを楽しめるようにするためのものなのである。

「ホント、麻美はネーミングセンスが謎デスネッ！」
嬉しそうに私のことを馬鹿にするミレア。

「あんたは、黙りなさい……。」
本当に、ミレアはいちいち絡んでくるから疲れる。他の4人は文句を言わずに取ってくれているというのに。

「ほらっ。最後のはミレアのよ！」
ようやく、全員が茶色の紙袋から1ずつ小さく折り畳まれた紙をとり終えた。

「じゃあ、みんな開いて〜！」
私たちの手元には3種類の図形が描かれた紙が広げられていた。
…ミレアは、まんまと罠にかかってくれた。

「は〜い！花火が上がる数分前にまたここに集合ね！」
これで蝉の抜け殻の借りを返すことができる。
私はみんなの見えないところでガッツポーズをするのであった。

白い校舎を立ち去る彼らを、提灯の明かりが寂しく見つめる…。

彼らは何も会話を交わさず、どこに向かうかも決めていなかった。

「……」
「……」
「……」
「……」

彼らは校門から出ると、無言で歩き続けた。

「……」
「……」
「……」
「……」

彼らが引いたくじには「三角形」が描かれていた。

「……」

「……」

「……つ、塚原くん……」

「……なんだ。飛馬。」

「……これって……。どこに向ってるの？」

「……いや、俺は飛馬に合わせて歩いてるのだが。」

彼らの間には、団結力というものは存在していなかった。

「……じ、時間がまだたくさん……。ど、うする……？」

「……どうするか。俺は飛馬に任せる。」

腕時計に目を預ける彼女と、前方水平に目を預ける彼。

2人とも気まずい雰囲気であることはわかってはいるが、どうしたらいいかわからない。目を合わせる事ができず、話もかみ合う保証がない。

時計の鈍足な秒針が、時の流れを拒んでいる……。

「……」

「……」

「……な、なにか食べない……？」

「……ああ、なにか食べるか。」

彼女は必死に言葉を紡ぎだした。この状況を打破するには、とにかく何かをしなければならぬ。彼らは、すぐ隣にあった屋台に足を運んだ。

その屋台の暖簾には「のりちゃん本舗」と書かれていた。

これを見た瞬間、彼らの意思はやっと一つになり、目を合わせるこ

とができていた。

「…。あつ…。」

2人の声は低く和合し、呆然の感情をあらわしていた。

「!!!っ!あつ~~~~あ!!!」

2人の学生の耳には、どこかで聞いたことがある声が聴こえてきていた。

その声は非常にやかましく、周りにいたお客さんの視線を呼び寄せていた。

段々とその激しさを増し、ついには声の主が屋台まで全速力で突進してきていた。

「ほ〜ら、長原先生〜っ。そんなに走ると危ないですよ。」

「速、また会ったわね。」

やさしい口調で暴走する人間に声をかける女性と、異常に胸が大きい女性が彼らの真横に立っていた。

「…。ほ、細田先生と、白川先生…!」

「…。ほ、細田先生と、白川先生…!」

お祭りに来ているというのに、彼らは学校の教師と対面するのであった。

「おじさ〜ん!!!スペシャルのりちゃん弁当3つください!!!」

「はいよ〜!」

約1名、自分の生徒がいるというのに声もかけない大柄の女性が彼らの前にいた。

「え、そうなんですか?私、初めて知りましたよ。」

「俺も、この話は初耳です。」

彼らは予想もしない話を3人の教師から聞かされるのだった。

「長原先生はね、飛び級で教職課程を終えて、高校を卒業してすぐに国語教師になったのよ。」

「長原先生と細田先生と私は、君たちと同じ高校を卒業したのよ。あ、あと保健室の島田先生も。」

「で、久々にみんなでこのお祭りに行こうって私が誘ったわけ。お祭り以外にも、ちょっと用事があるんだけど……。」

「お前たちも、いつもの6人で来ているんだろ？ 私たちはもう、ここを下って海辺に向かうけど、お前らはどうするんだ？」

急勾配の下り坂で国語教師は、1人では食べるのが困難であろう弁当の入った袋を覗き、満面の笑みをうかべながら話した。

「……、私たちは、学校に集合してから海辺に行きます。」

「……、俺たちはここで折り返します。」

こうして、生徒と教師は別れるのであった。

「……。」

「……。」

「……速。いま何時だ？」

「……あと、もうすぐ……で、打ち上げ時刻……。」

そう。彼らがいまいる場所は海辺付近にある坂道。ここから高校まで戻るには上り坂を超え、商店街を通り抜けなければならない。

「私は、大丈夫！」
走る気満々の彼女の横には、ため息をつき肩を落とす委員長。
彼らは特に何の屋台に触れることもなく、3000km走トライアルに匹敵する運動をする事態になってしまった。

私たちが引いたくじには「四角形」が描かれていた。

「シャリッ、シャリッ、シャリッ……ぱくっ。」
前後には煉瓦レンガの舗道が広がる。薄紅色の造りでできているそれは、
私たちの足下を艶やかに彩るいろど。

「すみませ〜ん。ケチャップってありませんか？」

左右には屋台がいくつも並ぶ。屋台といっても普段は個人営業の店が多い。今日ばかりは、どこの店も特別に売る物を絞っているようだ。

屋台を構えず、普段の商品を格安で販売している店も見つけられる。

「グサツ、あ〜ん。」

耳を澄ませてみると、頭上から涼しい音が聴こえてくる。数え切れないほどの風鈴が、やわらかな風にかすめられ合唱する。

「あんた…。よくそんなに食べられるわね。かき氷、フランクフルトにたこ焼き。いま食べてるのは…焼きそばね。」

「もぐつ、麻美はたしか…チョコバナナしか食べていないような。」

さつきから腕組みして歩いてるけど大丈夫？もしかして体調が悪い…とか？」

仕返し大作戦は現在、停滞前線である。何の策案もなく、私は困っていた。最初のくじ引きでこの組み合わせを必然的にするまでは良かった。

だがしかし、私は浅はかであった。そう、ミレアに対して何でいやらせをするか全く考えていなかったのである。

そもそも、ミレアが一体どんな事を嫌がるのか私にはわからない。とゆうか、いつも一方的にこちらがやられる立場なので…。

「そーいえば、さつきのくじ引きの紙。なんか妙にベトベトしたな〜。ま、いいか。」

不思議そうに巾着袋からその紙をとりだすミレア。目を細め、まじまじと見つめたが、再び袋に戻した。普通に考えればやはり、この現象はおかしい。

…そう。このベトベトは彼女のくじにしか付着していない。

私とミレアが同じ図形の描かれた紙を引くには、それ相当の計算を

しなければならぬ。

それこそ確率や統計学の世界であり、くじを引かせる順番やくじの枚数を制御しなければこの匠な技はできない。残念ながら私にはそんな頭脳はなく、不可能であった。よく考えてみると、この方法を私が採用した場合、失敗する確率の方が高いと思えた。

そこで考えたのが細工を施し、この組み合わせを強引につくるという方法である。これを成功させるには、私とミレアのくじに細工をする必要性があった。

まず、私のくじには私にしかわからない目印をつけておく。これは、自分がわかればいいのでシャープペンで小さい印をつけたり、紙に少しの折り目をつけたりとなんでもよい。

そして、ミレアのくじの紙にはスティックのりを薄く塗り、茶色の紙袋の底にゆるく貼り付けておく。

あとは、私が1番最初に引いて、ミレアが最後に引けばあら不思議！この2枚だけは必ず同じ図形が描かれているという仕組みである。くじ引きをする順番の操作は難しく思えたが意外と簡単にできた。というのも、私が毎回くじを作ってきており、くじ引きさせる主導権を掌握しているのでみんな疑問をもたずに引いてくれた。まあ影響するのは…ミレアだけであるが。

「ねえ麻美。なんかやろうよ。」

「やるって何を…？」

「なんかお祭りらしいことをさあ。」

「あんた、さつき食べたでしょ。まさか、まだ食べるつもりなわけ？」

「そういうことじゃなくて。」

このまま、ぶらぶらと商店街をうろついても埒があかない。

周りを見てみると、浴衣を着た人が少なくなつたような気がする。

花火が上がるまではまだ時間があるのだが…。きつと場所取りをするためにもう海辺に向かっているのだろう。この商店街を抜けると

大きな坂道がある。これを下ると海辺に到達する。この道のりは高校の通学路であり、海辺に到着するまでの所要時間は熟知している。私たち2人が海辺に行き花火を見るのならば、時間はまだ早すぎる。しかし、学校に集合して海辺に向かうとなるともう危あやしい時間であることは確か。

そろそろ、いい加減に何かを思いつかないと仕返しができなくなってしまう。

私は爪を噛む思いで考えるのであった。

「カシャツ、パーン」

前方に子供が嬉しそうに小さな景品を持つ姿が見える。

銃口にコルクを詰め、狙いを定めるその姿。

そうだ、これをやればいいのだ。これなら昔のクレイ射撃の腕を活かすことができる。

私はミレアに勝負を持ちかけるのであった。

射的。

それは一瞬の勝負。

持ち弾は3発。

負ければ何をされるかわからない。

だが、その心配は私にはない。

そう。

私には、勝利という道しか…選べないのだから。

私の美しすぎる射あや的捌きにより、周りには大勢の観衆が集まってい

た。老若男女が私たちの勝負に釘付け。まあ、勝負と呼べるか否かは問うまでもない。

ミレアは見たところ初心者である。

一般的には体を前に乗り出し、腕のリーチを使い零距离で倒しやすい軽い景品を狙う。

この方法は非常に有効であり、倒れる確率も高い。ミレアもこの方法で狙っているのだが、景品にかすりもしない。

それもそうだろう。

いくら零距离で狙えるといっても所詮、初心者。初めて射的をする者が体を前に倒し、腕を伸ばし続け、焦点を景品に集中させ続けるのは困難を極める。

この3つは経験を重ねたうえで体に染み込んでゆくものであり、いきなりのこの体勢は絶対にキツイ。すでに腕が震えているのがわかる。

このミレアに対し私は昔、クレー射撃をしていた。クレー射撃にもトラップやスキートといった種類がある。詳しい話はさておき、私にはクレー射撃で培われてきた構えがある。

これこそ零距离には程遠く、周りから見ればなんだアイツ？と言われてしまうだろう。

「カシャッ、パーン」

肩と頬で支えられるこの撃ち方は最高峰の安定性を誇る。手ブレがなく、狙った景品に一直線の弾が軌跡を描く。私は軽々2発目を景品に必中させた。

この様子だとミレアは良くても1回景品にかすれるかどうかぐらいだろう。

「…せいぜい頑張つて、ミレア。」

冷たなセリフに冷たな風が射的場を揺らす。

…その時、私はまだ知らなかった。

まさか、あんな展開になろうものとは…。

俺たちが引いたくじには「円形」が描かれていた。

調子に乗ってこんなに食べなければよかった。これではデザート
の宇治金時を食べれるかどうか。今日の目的はこの宇治金時だとい
うのに…。

俺は白鳥とペアになり適当に商店街の方向に向かって歩いていた。
校門から出てまだそんなに歩いていないのだが、周りには普段見た

ことのない店が並ぶ。

「ふふ〜ふ〜ふ〜ん！」

街灯と街路樹が交互にならぶこの空間を、人が縫うように歩く。

「ふふ〜ふ〜ふ〜ん！」

淡い月に照らされるこの浴衣も、来年の夏まで見納め。

「ふふ〜ふ〜ふ〜ん！」

俺の横から聴こえてくるこの鼻歌も、どこか切ない気がした。夏も、もう終わりに近い。

片手で残りの休みを数えながら、俺たちは歩いていった。

「パキツ」

整頓された黄色い粒が並び、表面には食欲をそそうこげめがついている。1本の長すぎるその棒を半分に割り、一気にかぶりつく。

「ヤベっ、歯にはさまった。」

「プチプチしておいしいね。」

俺たちは屋台の近くにあった花壇の縁に腰をかけ、焼きもちこしを食べていた。

手には甘い汁がこぼれおち、指先までをも虜にする。

「もぐっ、そういうえば白鳥の鼻歌って歌詞はあるの？」

「えーと…。あるんだけど、途中までしかわからないんだ…。」

見事に黄色い粒がなくなつたその棒を俺は近くにあったごみ袋に投げ入れる。

「ガサン」

まだ、黄色の割合が半分以上ある棒を手に握つたまま、彼女はどこかを見つめていた。

「この歌はね、知らないうちに口ずさんでた歌なんだ。どこで覚えたか、なんで知っているのかはわからない…。」

「白鳥は授業中、眠っているかこの鼻歌をしてるかだもんな〜。」

俺のこの言葉に彼女は恥ずかしそうに反応する。

「き、聴こえてたんだ…。」

俺と白鳥の席は隣同士…。彼女は照れ隠しをするが如く、急いで黄色い粒を口に含む。

「ぷつ、そんなに急がなくても大丈夫だぞ。」

俺は微笑ましいその光景を笑いをこらえ見つめるのだった。

浴衣を着た人たちは私たちが進む方向と逆に歩く。私たちは学校に向かうので商店街を上る。周りのほとんどの人が花火の場所取りをするのであろう海辺に向かい商店街を下る。

その鮮やかな浴衣が彩るこの空間の中、1人だけ全身が白い格好の人がこちらに向かい歩いてくる。よく見てみると、それは白衣だった。

「……………！！！」

「…時見くんの知り合い？」

「…いや……………、もっと大切な人だよ…。」

白衣を纏うその男の人は、時見くんだけでなく私にも微笑んでいるように見えた。しかし、私にはまったく覚えがない。

だが、偽りのないその優しい微笑みは、どこか懐かしい気がした。その人もやがて、海辺の方向へ消えていった。風鈴の音がその人の白衣と私たちの浴衣をやさしくかすめる。

「さあ、行くか。」

再び時が流れだしたかのように私に声をかける彼。

私たちは、時間通りに集合場所に到着できたのだった。

「ヒューーーーーーッ、ドッカーン」

夜空に高く上がるその光は一瞬、闇の中に消える。

何もかもが消え去り、沈黙が空を制す。

やがてその光は、私たちに眩しすぎる程の花を見せてくれる。

私たちが今、見ているものは私たちそのものかもしれない。

暗すぎる水面には、眩しすぎる花が映る。

「いや〜。久々に射的なんかやったな。ガキの頃に割り箸鉄砲を創ったのが懐かしかったぜ。」

「そうなんですか。そういえば私…、射的をしたことがないですよ。」

私の両脇には島田先生と細田先生が立っている。この2人の会話によると、どうやら島田先生は貴殿院たちと射的をしてきたらしい。

「俺がここに来る途中、妙に盛り上がってる屋台があったから覗いてみたんだ。」

そうしたら、貴殿院と藤林が居てなんか対決だとか言いながらパンパン勝負してたんだ。そこで、俺は劣勢の藤林に加勢したというわけだ。」

波音と花火の音が2人の会話に入り込む。

「貴殿院ちゃんたちも今日はみんなどこに来ていますからね。楽しそうにあそんでいてなによりです。」

「いや、なんか貴殿院の様子が変わったな。俺がまぐれで逆転勝利したのが悪いのだろうか…。」

次々と夜空に花火が上がる。

きらきらと光が残り続ける花火、四方八方に飛び散る花火、二重に広がる花火…。

私は、この美しい花火もおかずにしながら2個目のお弁当を食べていた。

「長原先生、やっと来たわよ。彼が…。」

背後から砂浜を勢いよくけり上げる足音。あまりの速さに風圧が弾

丸のように私の背中にあたる。
2個目を完食したあと、私は後ろを振り向いた。
そこには、白川先生と白衣の男性が立っていた。

「久しぶりだな、長原。」
「ふふっ、そうね。君主。」

彼と会うのは何年ぶりであろうか。彼は私たちの職場である高校の裏の丘陵にある病院で医院長をしている。
名前は君主 尋。

「ここで花火を見るのも、高校生以来だな。」
なつかしむように。彼は寂しくこの空を見つめていた。
「さっきな、時見くんと園歌ちゃんに会ったよ。」
「…君主は、2人のことを昔から知っているからな…。大きくなっ

ただろ。」

そう。。

本当に大きく、なった……。

「ヒューーーーーーッ、ドッカ〜ン」

最後の花火が上がる。

それは、どの花火よりも高く、大きく、強く、この世界を包みこむ。

「今日、彼らとまた会えたのも、…偶然という名の必然……なん
だよな……。」

「……………、ええ……………」

花火を観終えた観衆が海辺から離れて行き、やがて私たち5人だけがここに残されていた。

目の前には残酷な海。

水平線など存在しないその眼前からは細波さいなみしか聴こえない。

「い。い。ざー。い。い。ざー。」

私たちは海に水平に並び、右手を胸に合わせる…。

本当はここに居るはずのもう1人のため………に。

空の花は朽ちゆき、やがてそれは訪れるだろう

私たちには逃れることは出来ない

…絶対に。

1：今という日常

「…。グゴォ〜。ゲー。グゴォ〜。…。」
私の腕に妙に鋭い感触がする。その鋭さ具合は段々と威力を増していく。

せつかく人が眠っている最中だというのに。ただでさえ昨日の夏休みの宿題を片付けたのが影響している。私はこの感触を無視して眠る。

「おーいい、白鳥ーい。来るぞーお。」

あくびが止まらない。隣から聞こえてくる時見くんの声も、もう何回目であろうか？

担任の話を聞き流し、窓を見つめブーツとしていたらいつの間にか寝落ち。

誰もが1回は経験しているだろうこの現象は私にとっては日常茶飯事である。

「……………」

この間隔、この気配。紙一重で私はこの妖気を察知するのであった。

私が顔をあげたその眼前には、いつもの道具といつもの人物が立っていた。その人物は分厚い辞書の角を私の頭上かどに構え止まっていた。

「…ちつ、お前はいつもいいところで反応するからな。」

さすがに私でも顔を殴ることはできない。女は顔が命だからな。」

「それは、どーも。」

話が長くなりそうなので、適当に会話を成立させ再び机に顔を伏せる。

まぶたが勝手に落ちてくる。これは相当きている。家に帰ったらシヤワを浴びてベッドに直行しよう。

お風呂でもいいが、そのまま湯船で寝てしまいそうなのでよしてお

こう。

「ベゴンッ！」

鈍い音と痛みが私の眠気を覚ましていく。ああ、良かった。今日は紙の方で…。

前に同じようなことがあったが、その時は電子辞書だった。あれは本当に痛かった。

長原先生は明らかに辞書の使い方を間違っている。電子辞書を発明した人がその光景を見たら泣いてしまうだろう。暴力兵器のために教育用品を使用するのは絶対にダメです。

まだ余力を残すほどのまぶしい日差しが教室につくる影を見つめ、私は先生の話頑張って聞くことにした。

静かに人の話を聞くという行為は私には耐えがたい。教室を見回してみても殆どの生徒が今にも眠りそうな状態。長い休み明けの学校

というものは、学校に行く気力と意欲を奪い去る。よって、この光景もおなじみの展開。

「今日は授業がなく、このあと体育館に移動して校長先生のお話や、生活指導を受けるわけだが…」

隣の席の麻美もきわどい表情をしながら頬を手で支えこの話を聞いている。まぶたが閉じたり開いたり…。長原先生がいなかったら、ちよっかいを出していじることが出来るのだが。

「冬にかけて色々と行事もあるから体調には十分気をつけるんだぞ。文化祭に体育祭、なんといっても受験があるからな。今、自分が何をしたいかをよく考えろよ。」

担任の大きな声が、今日の日付が書かれた黒板を振動させる。微かなチヨークの粉が零れ落ちる。

一通りの事を言い終えたであろう担任は教室全体を見回し、薄汚れた黒い出席簿を開きボールペンを鳴らす。

「カチツ。……なんか質問はないか？ないならトイレ行ってこいよ。いつもどおり教頭先生で長くなると思うからな…。」

「先生っ！修学旅行はないんですか？」

勢いよく声を上げる1人の男子。その声は長原先生の声量に負けず劣らずのものであり、教室の眠りに落ちそうな生徒たちの目を無理やり起こさせたのだった。

「ああ、ないよ。」

短く即答する国語教師。

「先生っ、まさか…。この学校は2年生の時に修学旅行をするシステムですか…？」

無言で首を縦に振る大柄な教師。

この動作が終わった瞬間、後ろから椅子の引きずる音が勢いよく鳴り響く。その席に座るのはそう、時見くん。

このうるさな音が先ほど眠りに落ちそうだった生徒たちの感情をさらに刺激した。冷たな視線が彼の席に集中する。

時見くん本人はというと、すでに残念な顔をしていた。

…そういえば、この前の夏祭りにみんなで打ち上げ花火を観た際に、彼がこんな発言をしていた。

「俺、またこのメンバで思い出つくりたいな。修学旅行もこの6人で行けたら楽しいだろうな。」

しみじみと花火を観ながら結構、友情的な発言をした時見くんなのだが誰1人と反応していなかった。いや、わざと何も反応しなかったのである。

私も含め、時見くんが転校する前の学校では修学旅行が3年生に行うものだと察知した。

私たち5人は、すでに修学旅行をしまっている。

気まずい私たちは何も言えずに、顔を合わせず花火を観ていたのだった。

下駄箱から自分の革靴を取り出す。金属製のその空間からは埃ほこりっぽい匂いが漂う。学校で指定され購入したこの革靴と上履じゆんぎきも、もう

ポロポロ。

革靴は足の親指の付け根の部分が肌色に剥げている。上履きも廊下の表面と摩耗し合い灰色に汚れている。

2つとも穴を開けずに使えてきたことを褒める自分。

あと何回、この靴を履くのだろうか。それは数えられるが、誰も数えてはいないだろう。

自分の小さな足をその黒い革靴に収める。少し窮屈な具合が私の記憶を振りかえさせる。

高校1年生の頃はまだ、この靴は大きすぎた。

「ほら、園歌！みんな待ってるわよ！」

あの頃と同じ音を鳴らし、今日も私はみんなと同じ道を歩く。

「あゝあつ、やっと終わったわ。」

中身が軽いであろう手さげ鞆を前後に大きく振りながら歩く麻美。

前後に振られるたびに、取り付けてあるマスコットも一緒につられ

て宙を舞う。

ようやく、おさまり始めた太陽の光を彼女は見つめていた。

「今日は早く帰れると思ったのに結局こんな時間かー。」
「いつも陽気に私や麻美をいじってくるミレアも今日ばかりはさすがに体力が残っていなかった。」

「さすがに、教頭先生がちよつとね…。」

人の悪口を滅多に言わない速さんでさえ動揺を隠しきれない。

私たち4人が前衛をつくり、男子2人が後衛をつくり歩く。

この男子2人は何も会話をせずのため息ばかりしている。相当疲れているのである。いつもなら騒がしいくらいに大はやぎで話題提供をしてくるのだが。

生ぬるい風が地面に落ちていている緑色の若い葉を細かに揺らす。

「ね、ねえ。どっかに寄っていきようよ！カラオケとかさっ！」

この空気を変えるべく私は勇気をもって1人、切り込んだ。

だが、その結果は数秒も経たずに決着がついた。

麻美は首を左右に振り、ミレアは手で拒否の合図、速さんは苦笑い。時見くんには聞こえていない様子であり、塚原くんは無言。

私の振り絞った勇気はあっけなく撃沈したのであった。

みんながこうなってしまうたのも教頭が原因である。

全校生徒が集結するその空間。学年を問わず教頭の無差別な指導？が生徒たちを苛立たせる。

「校長先生ありがとうございます。次は教頭先生から生活指導についてです。」

窮屈に詰められてからもう既に30分は立ちっぱなし。まだ暑さの余韻が体育館に響く。夏用の制服である程度はしのげるが、この校長と教頭が毎回、休み明けの日常を見事に崩してくれる。

「え〜。私からはその〜。まあ〜。え〜。まあ〜。え〜。まあ〜。」

自分の危ない頭から出る汗をハンカチで拭きとるその姿。見ている

だけでも腹が立つが、グダグダと主旨のまとまらない話で1時間削つてくれる。

「ではー。担当の先生方、お願いします。」

散々話したあと、自分が生活指導委員長であるはずなのに、他の先生に生活指導を任せて1人、職員室方面へ帰っていく。

あの人はいったい何しにこの学校にいるのであろうか。

もう、どうしようもないただのオッサン。

私たちが逆にあの人を指導してやりたいものである。

蝉の鳴く声も弱まりつつあるこの景色

足を止めてしまうと、その坂道に足を奪われる

ここから見えるもの。これはいつも見慣れているもの
だけど、よく見つめてみると何か違って見える

海、空、森、店、家、人…

風が私たちの制服を揺らす

この風はどこまでを見ているのだろうか
海を超え、空を突き抜け、そして…

帰り道の通学路

みんなと過ごせる時間

それが、あとどれくらいなのかは

私には…わからない。

「ねえ、ミレアは何て書いた？」

「私はね、通訳って書いたけど。」

6人はいつも通り帰り道を歩いていた。

「速さんは当然、陸上選手でしょっ！」

「うん。それが希望かな。」

海からの潮風もすっかり慣れてしまった。

「塚原は歌手にでもなるのか？」

「俺は歌えることができれば何でもいい。」

この下り坂で最初はよく転んだっけ。

「麻美は美容師で、時見くんは……。」

「ああ、俺は漫画家って書いといた。」

足元には蝉の死骸が転がる。

「園歌は何て書いた？」

「……私は、ヒミツかな。」

この中でただ1人、私は鞆を強く握りしめていた。

「え、園歌オシエテヨ。」

鞆の隙間からは何も書かれていない「進路希望調査」の紙が私を見つめていた。

2：白い校舎の中で

床に散らばる工作道具の数々。木工用ボンドが若干、制服についでしまった。ねずみ色のズボンの右ひざについた白いベトベトを人差し指でやさしくふきとる。

次は何をすればいいだろうか？土台の板が少なくなってきたので美術室から新しく材料を調達してやることにしよう。

「ちょ……と、時見くん。」

俺が教室から出ようと腰をあげた瞬間、両肩を強く握られ拘束される。

いかにも何か言いたそうな声の調子。今度はなんであろうか？

「これ、ボンドで貼ったでしょ？」

どうやら彼女はボンドで木製の板と画用紙を貼り合わせた事に憤りを感じたらしい。

「ボンドは木製どうしの物をくっつける時に使ってよ！貴重なんだから。」

あと、紙を木に貼る時は両面テープを使うものよ！こっちの方が汎用性が高いのよ！！ちぎって使う量を最小限にできるし………」

ああ、始まってしまった。貴殿院の隣で作業をすると色々疲れる。

できれば一緒に作業をしたくないのだが、既に列ごとで仕事は分担されてしまった。

「時見くんさつきなんて私に向ってくしゃみを飛ばしてくれたもんですね。」

なにかな？私になにか恨みでもあるのかな？私、そんなに嫌われているのかな！」

彼女の顔が段々と恐ろしくなっていく。拳を力強く握りしめ俺の目を睨みつけてくる。

あれは事故である。俺はわざと貴殿院にくしゃみを飛ばしたわけではない。

その時、俺はちょうど看板に店名を書く作業をしていた。

右手に極太のマジックを持ち、左手でずれないように看板を押える。全神経を集中させ自分の顔を文字が書かれていくその板に近づける。この状態になるとマジック特有の匂いが鼻を襲う。ツーンとしたその匂いを俺は必死に耐えながら作業をする。

だが、それにはやはり限界があった。

せつかく文字を書いた看板。当然、汚してしまうのはいけない。両手がふさがり手で口を覆う事が出来ない俺は、顔を左に向け我慢していたものを勢いよく噴射したのだった。

「ハックシュンツ!!!」

よく左横を見てみるとそこには静止した貴殿院が座っていた。

あれ？さっきまで他の連中と材料の買い出しに行っていたはず。

俺は誰もいないであろう場所に事を済ませたはずなのだが結果的にいつの間にかあらわれた彼女の横顔に事を済ませていたのであった。

「時見く〜ん。職員室で長原先生が呼んでたよ。」

貴殿院の延々と続く愚痴を聞き流していると教室のドアが開き、俺の名前が呼ばれた。

ドアの前に立ち教室中を見回し俺を探す彼女。やがて、俺と彼女は視線が合った。

「飛馬は速いね〜。もう帰ってきたんだ。」

「うん。園歌ちゃんとミレアちゃんも、もうすぐ来ると思うよ。」

飛馬の両手にはスープの袋が抱えられていた。その中身を見てみると人参、じゃがいも、玉ねぎ、ピーマン、キャベツ、トマト、ブロッコリ、肉、卵など

様々な食品が入っていた。

「私は家庭科室でいろいろ料理を作っているから、もし2人が来たら私が家庭科室にいることを教えてくれるかな？」

やさしい口調で俺に頼む飛馬。貴殿院とは大違いである。

飛馬は勉強も運動もでき、見た目もかなり良い。ショートヘアの黒髪はサラサラとしていて彼女が動いたたびに乱舞する。

貴殿院も黙っていればかわいい。と思う。普通にしていれば清楚であり、モテるのではないか？だが彼女の場合、愚痴をしゃべりだすと騒がしい。

次々に出てくる単語の一つひとつが鋭く、対話者の心を突き刺す。よって、男子からの評価は黙っていれば…。

おっと危ない。デレデレと女の子の評価をしてしまっていた。俺は白鳥と藤林に伝言を伝えなければならぬ…い？

俺はようやく飛馬の発言のミスに気がつくことができた。彼女もどうやら気がついたようだ。

「あつ、ごめんね。時見くんはこれから職員室に行くんだもんね。麻美ちゃん。悪いけれど2人に伝言頼めるかな？」

これでやっと貴殿院のそばから離脱することができる。といっても、先生はいつたい俺に何の用だろうか。窓側の列は妙に全般の仕事をやらされている気がする。買い出しでもさせるつもりなのか？

しゃがんでいた飛馬は立ち上がり、俺も再び腰を上げる。周りを見渡すと、みんな黙々と作業に励んでいる。塚原はなんだかんだいってクラスをまとめる人物である。本人はここにはいないのだが…。

「えっ、速さん？私はここでどうしてればいいの？」

「2人が来るまで作業を続けてて。ねっ？」

両手を合わせ頼む飛馬。貴殿院はというと急に焦り始めた。俺たちがいなくなること話せる相手がいなくなってしまうからであろうか。彼女は1人にさせるともろいようだ。

俺たちは拳動不審の彼女を残し、教室を後にするのであった。

俺が進む方向にはところ狭しく他のクラスの生徒が陣を取っていた。四つん這いになり道具をつくる人や、両手に顔が見えなくなるほどの荷物を抱えた人、何やら意見のゆき違いでもめ合う人など職員室に通ずる廊下では、あさつての本番に向けて大急ぎで準備が進められている。

学校の生活というものはボーツと過ごしているといつの間にかテストの期間になつていた、という体験を飽きれるぐらいする。

なにか楽しいことは起きないだろうか？なにかおもしろい噂はないのだろうか？

そんなことを思っているうちにも刻一刻と時間が過ぎていく。

認めたくはないが現に俺が今、見ている光景もそんな流れゆく高校生活の1ページを刻むものであり、あつという間に本番当日がきてしまうのも事実。

そう。気がつくとも9月も終わりに近づいており、あさつては文化祭。俺自身、うちのクラスが何の出し物をするのか知らない。いいや、聞いていなかったといった方が正しいのであろう。

あれはこの前の始業式の時、ちょうど教頭の指導から解放された直

後だった。

「お前ら〜！そういえばだな今月の下旬に文化祭があるんだが、今から何をやるか考えてもらいたいと思う。」

進路希望調査を書き終えやっと帰れると鞆を握り、椅子を片付けた瞬間のこの追い撃ち。体育館で数時間にも及ぶどうでもいい話に打ち勝った直後の出来事。当然、他のみんなも精神と体力が放出されている状態。そんな疲れ切った空気の中、担任は塚原を前に立たせ文化祭の出し物を決めさせた。

俺の記憶では喫茶店やお化け屋敷など無難なものが提案されたところまでは覚えている。だが、そこから先は眠ってしまい記憶が飛んでしまっている。

なんか異常に長原先生が騒いでいたような…。

「きゃあっ」

「あっ、す、すみません。」

おっと、よそ見をして考えていたら女の子の手を踏んでしまった。

しかしここ連日、文化祭に向けての準備をみんな頑張っている。昨日から今日にかけて泊まり込みで準備をしている人もいると聞いた俺にはそんな熱心になることができない。決して、文化祭が楽しみではないという事ではない。

なんなのだろうか、この気持ちは。

よく、文化祭は当日よりも準備をしているときの方が楽しいという人がいる。

それはたぶん、当たっていると思う。

みんなで作業をして、助け合ったり、真剣に言い合ったりして完成へとつながるもの。

それは、どんなものでもいいと思う。それは、みんなで出した答えだから。

けれど、俺がいま感じている気持はこういうものではない。
なんというか、何か足りないような。寂しいような…。
…なんなのだろうか、この気持ちは。

「コンコンツ、失礼しまーす。」

やっと俺は職員室まで来ることができた。ここは3階の中央階段に
対面した位置であり、下の階にはコンビニが設けられている。

「ギツ、ギツグ、グ、ガ、ガラガラ」

滑りが悪く、なかなか開かないドアをやつとの思いで開けた俺。担
任が座るデスクを探し歩きまわる。長原先生は大抵、デスクの上が
散らかっている。本人いわく、週に一度整理しているというがそう
は見えない。

案の定、ひとつの場所だけ書類や本が山積みになったところがある。

「おっ、来たか。」

その山積みになっているかげから若干、担任の顔が見える。よく見
てみると、

たばこを口にくわえていた。

「…先生、吸うんですね…。」

俺がこう言った瞬間、突然、担任は暴れだした。

椅子に座ったまま腹を押さえ両足をバタバタとさせ爆笑。

その巨体は激しく揺れ、デスクの上が連動して揺れる。この衝撃で
山積みの書類が崩れる。が、とっさにこれに反応し山崩れは止まっ
た。

「おっと、危ないー。」

よく担任の口元を見てみると何か食べているように見える。足元
には駄菓子詰まった袋。この二つの情報から俺はようやく答えを導

きだしたのだった。

「お前を呼んだのはそこにある駄菓子をうちのクラスに届けて欲しいからだ。

みんなの頑張っている姿を見て、私が商店街で差し入れを買ってきたというわけ。

みんなで分けて食べるんだぞ。」

ほう。気がきいたことをしてくれるものである。袋の中を見てみると、ジュースも何本か入っていた。

俺はお菓子の詰まったビニール袋をしっかりと握りしめ退散する。

「ありがとうございます。」

一応、お礼のあいさつをし軽くおじぎをする。担任はというと、まだ無邪気にシガレットを口にくわえたままだった。

「!？」

表面のガラスで光が反射するのがわかる。俺は意外なものを発見した。まだそんなに離れていなかったため、はっきりとそれを見ることができた。

散らかるデスクの上に浴衣姿の男女6人が写る写真を見つけたのだ。

そこには、今の俺と同じくらいであろう歳の長原先生、細田先生、白川先生、島田先生、それに君主先生とあと1人、見知らぬ女の人

が写っていた。

「私たちは昔からの親友どうしでな、今に至るまでの長い付き合いだ。

そこに写っているのは…高校生の時にお祭りで撮ったやつだな。」

コロコロとキヤスタ付きの椅子を動かした上の空の表情の担任。シガレットをくわえたまま天井のちらつく蛍光灯を見つめている。

それにしてもまさか君主先生と長原先生が知り合いだというのは驚いた。というか親友。意外な事実である。

君主先生には俺がまだ本当に小さな時にお世話になった。ずいぶん昔だが元々、俺はこの街に住んでいた。そんなある日突然、大地震が起きた。街を壊滅状態に陥れ、犠牲者も多くでた。

俺が住んでいた家は消滅し、両親も亡くなった。数年間、被災者用施設所に入り、そのあと母方の田舎に預けられた。この施設所で初めて俺は君主先生と出会った。粉々になった俺の心をあの人が治してくれた…。

「先生、この青い浴衣を着てる人は誰なんですか？」
写真に写る6人の中で5人の人物は把握している。だが、どうしても残りの1人がわからない。その人はやさしくほほ笑み、中央で他の5人に囲まれている。

俺の声が再び長原先生の耳をかすめたその時、空気が一瞬変わった。担任の湯呑を持つ手が悲しく震えているのがわかる。

「……………早く教室にもどりな。みんな…そろそろお腹がすくころだから。」

いつも騒がしいくらい大きな声の担任はその時、弱く、とても小さな声だった。

結局、その人が誰なのか聞ける雰囲気もなく俺は滑りの悪いドアを再び開けるのだった。

自分の声は何重にも重なり反響する。ここから見える景色はいつも見ている角度とは違って見える。檀上の上に立っていればあたりまえの事なのだが。

ずっと立っているせいか気がつくとも脚全体が悲鳴をあげていた。額には無数の汗が浮かび、視界を遮ろうとする。手とマイクの間も湿り始めている。

目線を斜め上に向けると照明の明かりがまぶしく、機具をも溶かそうとする。

「あと少して休憩入れるから、みんな頑張ってくれ！」
さすがに連続で練習をしているため、みんなの体も疲れてきている。だが、この体育館を使える時間もあと少し。休憩を入れるといっても数分が限界か。他の団体と共同でこの場所を使わなくてはならない。

よって、本番と同じ雰囲気での練習は今しかできない。
大勢の人を前にして歌うのは緊張する。同じ場所で、同じ時期にやるはずなのにこの重圧には慣れることができない。

「ベースドラムがちょっと遅れてるから気をつけてくれ。よし、最初から通そう。」

自分の声と楽器の音色が調和する。共鳴しあうその音は俺たち以外に誰もいないこの静寂な空間に旋律を与える。

この音は果たしてみんなにどう響くのだろうか？みんなにどう伝わるのだろうか？

もうろうとした意識の中、毎回このような事を考えてしまう。

腕まくりをしている制服の長袖からも汗が流れる。それが床の木目と触れ合う瞬間を見つめる。やがて小さな円があらわれ水滴へと変わる。

「よし、ラストにもう一度最初から通そう！今の感覚で大丈夫だから。」

呼吸を整え再びマイクに口元を近づける。腹式呼吸と胸式呼吸を使い分ける。

ただ感情的に歌っていても喉を傷めるだけであり、常に意識をして歌うことが重要である。言葉の滑舌や低音から高音への変換点、声の強弱の長さなど様々な要素から構成されている。たとえば疲れている状態だとしても、これらのことができていなければ楽器との調和も崩れてしまう。

声と音が天秤でつり合った時、初めて曲は成り立つものだと思う。

あくまで俺個人の意見なのだが…。

「よし！みんなお疲れ。今から休憩とるからリラックスしといてくれ。」

熱気が漂う空間にみんなの笑い声こたまが反響する。俺はこの一段落ついた後でこういう風に会話するのが好きだったりする。なにかホツとした気持ちになるといっか…。

みんなが休んでいるうちに飲み物でも買ってくることにしよう。

俺はタオルを首にかけ体育館の重たいドアを開く。

「ギギーンツ、ガツシャーン」

ドアの向こうの世界は既に薄暗く、夜をむかえようとしていたのだ。った。

フエンスに両手をかけそこを見つめる。かろうじて青色だと認識することはできるが、もはやその広大な水面は暗闇に溶けようとしていた。

潮風が俺の頬を冷たくなでる。

自分の足は気がつくとも屋上へと運ばれていたのだった。2階のコンビニで飲み物を買い、3階の自分のクラスに少し顔を出したまでは覚えている。

…俺は意識してここに来たわけではなかった。自分でもわからないなにかが勝手に体を屋上に導かせていたのだった。

「ピキピキッ」

コンクリートでできた地面の上に置いてあった飲み物の封を開ける。飲み物といっても水なのだが…。清涼飲料水を飲んでしまうと歌う時に変な感じになる。

妙に歌いづらくなり喉の奥が気持ち悪くなる。

「ゴク、ゴクッ、…、ふう。」

ペットボトルを垂直に傾けると同時に空を見る。そこには星が一つも存在しなく雲のかけらすらなかった。

再び顔を戻し景色を眺める。

正面には海。右側には大きな病院が見え、左側には店や住宅街が見える。

この学校は、どの教室からでも海を見える構造になっている。そのため別にここに来て海を眺める必要はない。

「ヒューン…、…………、ザワーツ」

全身が潮風とともに海の方へ引き込まれる。いきなりの突風で長袖のまくりが解けてしまった。乱れた制服を整え直す。

まだ夏の余韻があるはずだというのに、夜をむかえると急激に寒くなる。冬なんかもう最悪である。体育の授業などまさに生き地獄。冬の寒さに加えてこの海風が俺たち学生の体を容赦なく襲う。

「ー。ー。ザー。ー。ー。ザー。」

海があるであろうその正面からは細波の音が聴こえてくる。とはいっても、俺は個人的には海は好きである。こうして対面しているだけでもなぜか安心できる……。

ここに来るのは夏休みにバンドの練習で学校に来た以来。あの時は日差しがかんかん照りで、この水面もとてもきれいに見えていた。そうである。こうして俺が今、歌い続けることができるのもあの日、あいつと会えたから。

暗闇に溶けたその水面が、1人の少年の無垢な瞳に映る。

「ミーンミンミンミンミンミンミンミンミンミン」。頭上には熱さの原因である太陽が俺の全身に濁流を与える。眼前には白い砂浜といたずらに溶けあう海が広がる。透明に反射する水面は、うみねこの鳴き声とともに入道雲の挟間へと消えてゆく。

熱を吸収した金網に顔を近づけ下界を見下ろす。花壇に植えられた向日葵の隣を俺と同じ制服の人間が通り校門へと向かう。爽やかな青い風が背中を通りぬける。もう補習授業は終わったようだ。

「……………」
沈黙したまま照りつけるオレンジ色の光を浴びる。

なぜ俺はいまここにいるのだろうか？ いったい何を期待しているのだろうか…？

あたり前のように訪れる夏の季節の中、あたり前のように俺は歌っている。

それが本当に正しいことかどうかわからぬまま…。

俺が歌い始めたのは幼稚園の時。砂浜で1人で遊んでいた時だった。歌と呼べるほどのものではなく小さな声で音程もバラバラ。それは今考えてみると孤独な自分をこまかすために、なぐさめるためにしていたものだと思う。

そう。その頃の俺には1人も友達がいなかった。

自分の伝えたいことは違う感情を人にぶつける最低な人間だった。

…でも、そんな人間の歌を聴いてくれた人が1人だけいた。

海風になびくその長い黒髪は今でも覚えている。透明な肌が砂浜と同調し、とてもきれいな人だった。

その人は俺と一緒に歌を歌ってくれた。2人で目の前に広がる海を見つめながら時を忘れたかのように。

その人には、その日にしか会うことができなかった…。

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺めろ。」
「!!!!」

回想をしていると背後から歌が聴こえてきた。その声は空高く澄み渡り屋上の世界が青色に染まるようだった。そこには白鳥がほほ笑みながら空に手をかざし、歌っているのだ。た。

「何でお前がここに。」

「…ちよつとのびのび歌ってみたくなくて。」

彼女は夏休みの補習で学校に来ている。だが、さっきのチャイムで授業は終わったはず。意外な人物の登場で俺は若干、動揺した。

「塚原くんはこんなところで黄昏てどうしちゃったの？元氣ないよー。最近。」

図星である。もう活動して3年経つが、いまだあの人の歌声に近づけない。あの歌は俺に勇氣と夢を与えてくれた。

俺は普通の会話で相手に気持ちを伝えられない。どこか自分を隠してしまう。本当はちゃんと話したいのに言葉が見つからない。

だから俺はあの時に決めた。

歌でみんなに気持ちを伝えていこう。初めは下手かもしれない。でも、たくさん練習してたくさん努力して本当の自分を伝える。

あの人が俺に勇氣をくれたように…。

でも、ここまで歌っても何かが違う。あの人がくれた歌声とは何かが違う。

声質や音程の問題ではない。

俺は果たして、みんなの心に何かを伝えることができるのか？今まで何かを伝えてこれたのか？

全部、ただの自己満足だったのかもしれない。勝手に自分が殻にこもって逃げてきた結果がこれ。都合のいいように自分を肯定化させる。

俺はなんて最低な存在なのだろうか…。

「今年の塚原くんの歌はどんなのかなあ。」
灰色だった俺の瞳に再び色が戻る。海と空が体中を包み込む。
彼女のこの一言がいままでの俺を確かな存在にさせた。
こんな近くにいた。感じてくれる人が。

…俺はもう迷わない。1人でも俺の声を聴いてくれる人がいる限り
…。

「あつ、麻美とミレアが待ってるんだった。私、もう行くねっ！」
あわてて走る白鳥。無邪気に笑いながら手をあげ、あいさつをして
くる。

空には淡く飛行機雲が姿を映す。

「いい曲だよな。」

「だよねっ！」

ゆっくりと閉ざされていく鉄の扉の隙間から階段を降りる音が聴こ
えてくる。

急ぎ足のその音は、いつまでも扉の中で反響こだましている。

「俺も行くか。」

そこには1人で呟いたことを笑う自分がいた。

夏の日差しはいつまでも俺の背中を照らすのだった。

…白鳥の歌は、あの人とまったく同じ旋律だった。

3：紡がれていくその行方

「それでは、ご注文の確認です。

クリームシチュが一つ、カレーライスが一つ、アイステイが二つ…。

用紙に注文を書いていく。用紙自体が小さいせいかもう書ける余白が少ない。手の中に収まるその空間に文字を小さくさせ収納させる。なんとか全て書くことができた。こうして見ると初めの注文と後の注文では文字の大きさが違う。

この現象はノート以外に文字を書くときによく発生する。代表的なのは授業で黒板に書く時である。慣れていないためか自分が思い描いた大きさは全く違う文字を書いてしまう。

「は〜い！少々お待ちください！」

教室の景色は普段とは違い上品な雰囲気を出している。掲示物などは全てはがし、私の背丈ほどある観葉植物でアクセントをつけている。この植物はたしか保健室にあったものではないか…？

机には黒いテーブルクロスを敷き、椅子は白い布で覆われている。上品さを重視した配色なので教室内の装飾は黒と白を基調としている。

余計な色や装飾を使わずシンプルにまとめられている。

「空いたお皿をお下げします。」

教室の装飾だけでなくこの料理の数々もすごい。

なんといっても料理総括をしているのが速さんなのでレベルが高い。彼女は勉強と運動に加えさらに料理までも上手である。この前、速さんのお弁当を少し食べさせてもらったが無論、最高だった。その時はオムライスだったのだが味はもちろんのこと玉子の半熟具合が絶妙だった。お箸でその中身を割ると見事にとろけだしケチャップの酸味とからみ合うプロ並みの技だった。

「どうもありがとございました〜！」

こうした数々のサービスの中でも私たちウェイトレスの格好が一番の魅力だと思う。自分で魅力だと言うのも抵抗あるのだが…。

黒い制服に黒のニーソックス。白いカチューシャに白のエプロン。いったいどこから調達してきたのか疑問である。私たちのクラスがこのような事をする原因となった人が担任である。

そう。あの人は私たちが提案した喫茶店に反応した。

時代に便乗するべく担任は激しく悟った。

これなら行ける。

これなら勝てる。

これなら儲かる。

もう私たちの文化祭は担任によって壊されてしまった。

このクラスの出し物の名前は…。

「禁断のメイド喫茶」

このいかがわしい店名の効果なのかうちのクラスの集客率は群を抜いていた。他のクラスも似たようなことはしている。が、こんな危ない名前をつけたのはうちのクラスぐらいであろう。担任いわく、第一印象が大事であるとか。

通りかかった風紀員に見つかったらなんと言われることやら…。

「…パシャ、…パシャ、パシャ」

大きなカメラで私たちの奉仕姿を撮る人がいる。この人は決して盗撮をしているわけではない。卒業アルバムに私たちの思い出を載せるために撮影する正統なカメラマンである。妙にアングルが下向きであるが…。

教室の時計はちょうど正午を差している。この時間は一番お客が来る時間帯。昨日のこの時間もやはり大勢の人がこのクラスに足を運んだ。

そんな文化祭も今日でもう最終日である。

行列する人が並ぶ廊下から食べ物匂いが充満し教室に押し寄せた。ダメだ。そろそろ私のお腹も限界である。誰かいい加減に交代してほしい。気のせいかもしれないが私1人だけ他のウェイトレスと比べ、働いている時間が多いように思う。

「麻美い〜〜！」

お腹がすいてただでさえ気が立っているというのに騒がしい声の彼女が私に近づいてくる。にこにこ笑顔で両手をひろげて抱きついてくる。

「か・わ・い・い〜っ！」

「…んうっ、やめなさいっ！…！」

私は即座にその両手から逃れ、ミリアから離れた。

悲しそうに下を向いて落ち込む彼女。いかにもわざとらしい演技であり腹が立つ。毎回、私に絡んではこの行動をして気をひこうとする。いったい何をしに来たのか？ミリアは速さんと一緒に家庭科室で注文された料理を調理する担当。注文用紙はさっき渡したので特に用はないはずである。

「これくださいなっ！」

いつの間にか彼女はテーブルの椅子に腰をおろしていた。メニュー表を開き一番下にあるメニューを指さす。

なるほど。ミリアが何を企んでいるのかようやく把握できた。これを頼まれてしまうと私は彼女から屈辱を受けることになる。

「ていうか、あんた並んだ？」

「すーんごい並んだね！」

彼女はどうしても私にアレをやらせたいようだ。教室の入り口にはまだ行列が絶えない。これは早く彼女に退散してもらおうほかないよっだ。

ミリアが頼んだメニューは「禁断のメイド料理」というものであり、怪しい名前からこれを注文する人は値段が一番高いながらも全体の半分を占めている。

「お…、お嬢様…に私の全てをご奉仕します…。」
「ガンバレ！わたしのアサミンっ！！！」

この制度を考えたのも担任であり、このメニューは注文を受けたウエー
ートレス自身がお客に自分で料理を作り食べさせなければならぬ。
料理といっても、おにぎりだけの限定であるが…。

お皿に乗っている三つの食材。それはごはん、のり、塩。

私は両手にベトつくごはんを必死に丸める。だが、いっこうに丸ま
る気配がない。なぜであろうか…。

次に丸めた…ごはんに塩を適当にふりかける。

最後にのりで包んでいく。

「…お嬢様、…どうぞ私をお召し上がり下さい…。」
「ふむ。」

口を大きく開き私の初料理を食べる彼女。しばらく無言のまま静か
に噛み続けるその姿はミレアにしてはめずらしい光景である。

ようやく噛み終えたのと同時にコップに入った満杯の水を一気に飲
む。豪快に喉を鳴らす音が私の耳にまで聴こえてくる。

「ありがとうメイドさん！」

とつて〜も、おいしかったよ！

水が一番おいしかったかなっ！！！！」

恥ずかしい発言をして頑張って初めて作った料理。

それはおにぎり。

私の苦労は文字どおり水に流された。

そこには両手についたごはん粒を口に運び、空腹を満たす私がいた。

文化祭が終わった後、私は速さんにおにぎりの作り方を聞いてみた。
その時に初めて、私はごはんをも持つ前に手を水で濡らすことを知
ったのだった。

細長いパンフレットを広げ行く場所を決める。目を細めて慎重に選ぶ。私に与えられた休憩時間はもう残り少ない。教室に戻ったら麻美と交代しウエートレスをしなければならぬ。

あの格好は相当恥ずかしい。まだ制服を着てやれるだけましなのだろうか。

人生で体験するかどうかさえわからないその姿をさつき、私はお父さんに撮られてしまった。学校で何かしらイベントがあると三脚と高そうなカメラを持ってきて撮り始める。

お父さんの仕事はカメラマンであり契約している学校の卒業アルバムの制作に携わっている。

よって、私の見られたくない格好が確実にアルバムの一枚へと刻まれていく。

昨日の夜にお父さんは満足そうな顔をして、いいのが撮れたと言いかメラのレンズを磨いていた。果たして、いいのが撮れたとはどういう意味のことやら……。

直線の空間には大勢の人が溢れている。必死にお客を呼び込む学生の姿は普段は見られない光景である。

廊下は行き違いができないほどの人が溢れ、前に進むだけで一苦勞。だだをこねて泣く子供の声、それをやさしくあやす大人の声、それを見て心配そうに声をかける学生の声……。狭い空間には様々な声が混ざっていた。

延々と続く廊下の窓からはわずかな日差しが覗き、小さな影をつくる。

中央階段を降りて一階へと向かう。学校のあらゆる壁という壁に広告が貼られている。こうして階段を降りている時でさえ叫び声が聞こえてくる。

「是非とも2ーCのミステリアス・ツアにお越し下さい！」

「いまなら1ーEは全品を通常の半額で販売しておりま〜す！」

「3ーAはクリエイイト工房で〜す！無料で特製ストラップをお配りしてま〜す！」

どのクラスも知恵をしばり集客している。一歩ずつ階段の段差を降りるたびに勧誘を受ける。

子供と手を繋ぐ人や恋人と手を繋ぐ人。

私と行き違う人たちの楽しそうな顔を横目で知らないうちに眺める自分がある。

急にどうしたのか……。意識したわけでもないのに勝手に視線が奪われてしまう。

気がつくと、私の周りにいる人たちすべてが手を繋いでいる。

階段の踊り場で私は一人足を止める。頭上にある窓からの光が淡く、私の場所のみをかすめていく。

なんだろう、この感覚は。

なんだろう、この気持ちは。

なんだろう、この…。

心の底で何か私に問いかけてくる。薄汚れた上履きから反射される光までもが私を孤独にさせていく。

「…おい。白鳥？」

私の小さな肩に誰かの声が降りかかる。それに気づくことができたのは、だいぶ時間が経ってからだった。

「炭酸、大丈夫だっけ…？」

透明な水滴がついた冷たい缶を手渡される。ゆっくりと下に落ちていくそれは、やがて私の肌を刺激した。

「きやつ」

あまりの冷たさに声を出してしまった。よく缶の表面を見てみると氷のかけらがついている。ほのかに痛いそのかけらを我慢しながら封を開けていく。

外の空間もやはり大勢の人で溢れていた。正門からパンフレットを渡された人が次々と歩いてくる。一人ひとりの足取りを見つめながら私は炭酸を飲む。

「みんな体育館の方向に向かっているな。」

体を前かがみにして不思議そうにつぶやく時見くん。ストロを鳴らしながら抹茶ラテを飲みほしていく。

体育館では演劇や大型アトラクションなど時間帯によって様々な催しが行われる。

だが、いくら人気があるものでもこんなに人は集まらない。

「ところでさつきはどうしてたんだ？」

あんなところで止まったりして。」

空の容器に刺さるストロを口にくわえたまま質問する彼。

私はこれに答えることはできなかった。

「ちよつとね。」

偽りの笑顔で彼の声を流していく。

…自分でもわからない。なんであんな風になってしまったのか…。

「う~~~~んつ、と。」

急に立ち上がり体を伸ばす時見くん。両腕を伸ばし、つま先立ちになる。制服の上着が上がるのと同時に中の白いシャツが見える。

快晴の空が彼を大きく包み込む。

「んで、これから白鳥はどうするんだ？」

俺はまだ、この看板をぶら下げて歩かないとなんだが…。」

眠そつな声で目をこすりながら地面に置いてあった大きな板を首にぶら下げる彼。

時見くんは宣伝担当であり、うちのクラスの広告をしている。これをぶら下げて歩くのは相当な勇気があるだろう。なにせ、名前が恥ずかしすぎる…。

私も立ち上がり体を伸ばす。立ちくらみが激しく、ふらついてしまった。肩越しに後ろを見てみるとスカートが若干よごれている。花壇の淵に座っていたので仕方がない。

「私も体育館に行こうかなっ。」

私の発言を不思議そうな顔で聞く時見くん。しばらく体育館へとつながる行列を見つめる。並んでいる人全員がチケットを持っているのを見て彼はようやく理解できたらしい。

「…これってまさか、塚原のヤツ？」

彼は私の頷きを見た瞬間、驚愕した。

「時見くんも行こうよっ！」

止まった彼の体に私は動きを与える。無意識に彼の腕をとり、この長く続く列に並ぶ。

腕を急に引かれた勢いで転びそうになる彼。首にかかる大きな看板の一部は彼の体だけでなく、私の体とも密着する。

「そろそろ白鳥は交代の時間じゃないのか？」

「ちよっぴりサボりますっ！」

いつもと変わらない突き抜けた青色の海を見つめながら私たちは時を過ごしていく。

2人の姿を向日葵が花壇から見つめる。
既にその黄色い花びらは脆く、地面に無残な色を遺す。

今日も白い校舎は静かにこの学校を見守る。
はしご

転落防止用の鉄柵に腕を絡めて下を眺める。きれいに並べられた椅子に大勢の人が順番に着席していく。天井の照明も段々と暗くなり準備が着々と進んでいく。ずっと立っているせいか気がつくくと脚が痺れていた。ゆっくりと重心をずらす。

私がいる場所は体育館の二階であり、ここには椅子が設けられていない。一階は来場客、二階は教師や生徒など学校関係者が占めている。

「長原。ここにいたのか。」
くたびれた声。やる気のない声。私の背後から聞こえてきたその声

はやがて私の真横にきた。

「島田：先生。ずいぶんとお疲れのようで。」

「なんだ〜？その微妙な反応は。」

今日で文化祭も最終日。生徒たちには後夜祭があるが、私たち教師には関係ない。

彼のつまらない話を私は少しだけ聞いてやった。

視線を壇上の閉ざされた幕に向ける。

「本当にこういう文化祭とか体育祭の時は疲れるんだよね。」

保健室から出て、少しは生徒たちと触れ合いたいのにそうもいかない。

さつきなんか迷子が侵入してきて大変だったよ。」

揺らめく幕の向こうの世界を思い描く。視界は段々と薄れていき、音も聴こえなくなっていく。

「そんな超忙しい俺でも、なんとか時間を作ってさつき校内を探検してきたんだよ。

てか、お前のクラスの子たちはやばいな…。過激だぞあの格好は…。お前らしい荒技だよ。」

私の前に広がるのは夢のような懐かしい世界。繰り返されるその映像は決して今でも忘れることはできない。

「そういえば、細田と白川は少し遅れるとか言ってたな。」

さつき廊下で会ったんだが、大変だな。自分のクラスを持つといろいろ苦労するからな。

…長原？…おーい！」

蘇る色、蘇る声、蘇る姿。

もう会うことができない彼女の幻影が私を包み込む。

虚ろな時間が私の身体からだをゆっくりと溶かしていく。

「おーいつ！俺の話を聞けい！」

瞬時に解かれていくその世界。私が見ていた幻影は跡形もなく消えていく。

「どうしたんだ急に？ポーツと笑いもせず。お前らしくないな…。」

再び私の目に映る揺らめく幕。止まることなく揺れ続けるそれは私の心をも揺らしていたのだった。

一階のざわめきも段々と静かになっていく。放送が入り体育館の観衆全員に同じ音が与えられる。

「間もなく、開演致します。しばらくお待ちください。」

照明は完全に消されていき何も見えない。音と声だけが私たちの世界。

私は絡めていた腕を解き、体を天井いつぱいに伸ばす。重心を変えたおかげで脚の痺れはもう治っていた。

携帯の画面でこっそり今の時間を見る。私は数時間前からここに立っているため時間の感覚が狂ってしまっている。人氣が非常に高く、早い時間からここに来なければいい場所が確保できないためである。

「長原、島田。」

誰かの小声が聞こえてくる。視界がないため声だけで判別するのは難しい。だが、彼の声はもう何年も聞いているため認識することができた。

「き、君主！いたのか！」

「あたりまえだろ。…てか、声でかいっ。」

私の声は彼の声の何倍のも大きさであり、暗闇の体育館に激しく反響した。

暗闇の中で島田が君主に愚痴をこぼす。

「さっき長原が俺の話を聞かずに黄昏たそがれてたんだよ。どう思うっ？」

君主は微笑みながら島田の愚痴を聞き入れる。

「仕方ないよ。この場所は、俺たちにも思い出があるから。」
姿のない君主のその声は、切ない調子だった。

「…それに塚原くんの歌は、どこかアイツに似ているからな。」
この言葉の意味を静かに、深く理解した島田。

「……………なるほどな。だからさっきはあんな風になっていたのか…。」

「……………三人の気持ちは今、おそらく同じであろう……………。」

私たちの心には今もなお、あの旋律が残り続けている。

「……………確かに、アイツの歌に似ているな……………」

島田の震えた声は静かに、暗闇の体育館に消えていく。

俺の眼前は既に暗闇の中。閉ざされたこの幕の向こうには数えきれないほどの人がいる。心臓の鼓動は激しく自分の胸を打ちつける。この緊張は何とも言えない。

俺だけでなく、この幕の中にいる他のメンバーも同じ気持ちだろう。沈黙の中、静かに深呼吸をする自分がいる。

目を開いても閉じても俺たちを包みこむのは暗闇の世界。この脚の震えは自分しかわからないだろう。

頭の中で時計の秒針が動いていくのを想像する。

「…カチツ、…カチツ、…カチツ、…。」

一秒また一秒とこの暗闇の世界の時も流れていく。ゆっくりだが確実に俺の身体からだを縛りあげていく。

惑い、恐れ、不安。

短い時の流れの中で襲うのは、どれも陰鬱な感情。

込み上げてくる負の塊だけが俺の背中を誘惑し、引き込もうとする。

今までの自分だったらこの渦に全てを委ねていただろう。目まぐるしく続くその螺旋の果てには強い恐怖しか存在しない。

たくさんたくさんの練習も努力もしてきたのに逃げようとする。

みんなに自分を伝えるためにしてきたことを自分で否定する。

そう。だから俺は見失おうとしてしまっていた。

うわべだけでどこか、満足させようとしていた。

結局、今までの俺は自分を隠していたに過ぎない。

暗闇の幕の向こうから始まりの合図が聴こえてくる…。

「お待たせいたしました。これから開演致します。」

ゆっくりと静かに幕が左右に開かれていく。

俺はもう逃げない。

あの日、あの人が俺に勇気をくれたように。

あの時、白鳥の言葉で自分を見つけられたように。

俺は、みんなに伝えなければならぬ。この光のない世界で自分を示すように。

そして、自分が光となりこの世界をまぶしく照らすために。

マイクを力強く握りしめ、口元に静かに近づける…。

伝えてやる。俺の心を。

4：私の好きな色

特に行く場所を決めずに歩く私たち。限りなく青く広がる空はやがて夕暮れへと変わり、私たち2人を包んでいく。地平線に沈んでいく夕陽の光は私たちの身体からだより遥かに大きい影を映しだしていく。

これは、ある休日の話…。

「……………」
無言で私の前を歩く彼女。歩幅は小さく、いつもより歩くのが遅い。私はその交差する彼女の脚を見つめながら無言で後ろを歩く。一歩また一歩と重なり続けていくその光景はどこか、彼女の感情が寂しいことを示している。

いつもと違うこの姿に私は戸惑っていた。

「……………」
私の瞳にその弱々しい彼女の脚と薄紅色のレンガの舗道が映る。視界には彼女の脚だけでなく、他の人の脚も映りこむ。

サンダルを履いた人、スニーカーを履いた人、パンプスを履いた人。休日の商店街の中を颯爽さっそうと人波が歩く中で、彼女の足下あしもとだけが私の眼前にとり残されていく。

「……………」
彼女の姿を見失わないように気をつけながら私は腕時計に目を預ける。

もう既に数分以上この調子で歩き続けている。

昨日の夜に彼女からメールが届き現在に至るのだが、まったく今日なにをするか伝えられていない。

メールには「明日、つき合って」としか書かれていなかった。

「……………」
急に彼女は立ち止り視線を横に向けたまま静止した。彼女の視線の先を私もつられて視線を運ぶ。

そこには、まだ真新しい西洋風のお店があった。この商店街はもう何年も歩いているが、このお店を見たのは初めてだった。見た目は洋服が売られていそうな雰囲気であるが違うようだ。

店の中をガラス越しに望む彼女。

沈黙したまま熱心に見つめ続けるその姿はどこか懐かしく、微笑ましいものだった。

「……………園歌、ちよつと寄つていい？」
後ろを振り向き私に尋ねてくる彼女。その声はとても小さく、勢いが
ない。
しかし、瞳には隠しきれないほどの輝きがあり、私はその無垢で透
明な瞳に快く頷くのだった。

「ガラガラガラッ、……………ガラガラガラッ、ボタン！」
故障のためかドアの前に立つてもまったく反応がない。仕方ないの
で私たちは手動でその自動ドアを開き、中へ入る。
ガラス越しで店内を見たときは違い意外と広い空間であり、左右
を見渡してみると様々な装飾細工が置かれていた。
木でできた棚の上に紙でできた手作りの値札とともに陳列されてい
る。

緑色の石が埋込まれている指輪、赤色と桃色のビーズでつくられた
腕輪、金色でできた長い首飾り。

奥に進むにつれて何色もの装飾が広がり続けていく。

「……………園歌、覚えてる？」

彼女は髪に留めてある青色の髪留めをはずし、私に問いかけるように見せてくる。

親指ほどの大きさのそれは小さいが、とても深くきれいな青色。

「……………ふつつ、もちろん。」

私も自分の髪に留めてある髪留めをはずし、彼女の手にあるもう一つのそれと照らし合わせる。

「きれいよね…。」

「そうだね…。」

外から漏れる光が私たちの手のひらを照らす。

その小さな光は小さな青色に出会い、やがて大きな光となって辺り一面を麗しく満たしていく。

「あら。かわいいお客さんね。」

薄暗い店の奥から姿をあらわした人は、若い女の人だった。その人は段々とこちらに歩いてくると私たちの正面で立ち止まり、私たちの手のひらにあるものを注視するのだった。

「……………！！！」

そのやさしい瞳は私たちの髪留めを見た瞬間、大きく開かれていき、驚きを示していた…。

「ガサガサツ、バリツ！」

私の横には勢いよくお菓子を食べる彼女。まあ、朝から何も食べていなかったのでこの食欲の激しさは当たり前だろうか…。

私の正面にはお茶をすする女の人。湯呑越しに私たちを見つめ、に

ここにこと微笑んでいる。

私たちはこの人に連れられてお店の奥にある茶の間に来ていた。襖で仕切られたこの部屋からは先ほどの装飾細工が売られている場所は見えない。

「…店番、やらなくていいんですか？」

明らかに私たち2人は営業妨害をしていると判断した私は、お茶を飲んでほんわかしているその人に声をかけるのだった。

「……………。ええ、もういいのよ。」

私の声を聞いたその人の表情が一瞬だけ止まる。

誰かに同意するかのように、何かを確信したかのように彼女の声は自信に溢れ力強い答えだった。

私は最初、冗談だと思った。見た感じではこのお店は最近できたばかりの様子。

よほどのことがない限り店閉いをするとは考えられない。

だが、その人の声を聞いた限りでは嘘をついているようには思えなかった。

「ところであなたたち、その高校の子でしょ？」

興味津々に尋ねてくるその人は卓袱台ちやぶたいに身を乗り出し、至近距離で私に視線を合わせてくる。

「…は、はい…。そうですね。」

先ほどの雰囲気とは違って変わって急に明るくなるその人。

「やっぱりね。地元の子はみんなあの高校だもんね。」

私もあの高校だったんだよ。」

両腕を組みながら何度も頷き、同調を求めてくるその人。空からになった湯呑に新たなお茶を注いでいく。急須の注ぎ口を限りなく真下に傾け、一滴も残さないように注ぐ。

「ズズズズスーッ。ふう。」

熱いであろうそのお茶を少し飲み、緑色の表面を見つめている。よく見てみると、茶柱が浮いているのがわかった。

「…ちょっと聞いてくれるかな。私の昔話を…。」
おもむろに口を開くその人の声はどこか切ない調子だった。
再び、緑色の表面を見てみると、茶柱が沈んでいた。

小さな波紋が生まれやがて大きな波へと変わり、消えていく…。

「コンコンッ！入るわよ。」
中にいる彼に確認して私はそのドアを開く。中に入った瞬間、薬品の匂いが私の嗅覚を襲う。アルコールランプとピンセットを匠に使

う少年が1人、誰もいない科学室で何やら作業をしている。
私の声に全く反応しないその少年の近くに歩み寄り、彼の座る試験
台に散乱する作品の数々に顔を近づける。動物を形どった物、抽象
的な形のものなどあらゆる形があり、その表面からの熱気が私を包
んでいく。

「さわるなよー。火傷するからな。」

両手に持つピンセットで掴み、針金の一点を集中的に熱していく。
若干、その一点が赤みがかつた時、素早くアルコールランプから離
し、加工していく。その細い棒を丁寧に慎重に扱う姿に私は息を呑
む。黙々と作業をする少年の瞳には真剣さしか存在しなかった。

「今日もつくってるの?」

またた瞬きをしないで作業をする彼に問いかける私。ここ最近、彼は何か
に憑かれたかのように急にこの作業を始めた。

「まだ続けるの?」

汗を流し作業をする彼に問いかける私。私と彼は幼なじみであり、
住んでいる家も隣同士。よって、小さい時から一緒に帰るのは当た
り前だった。

「ここに座って待ってるね。」

息を殺して作業をする彼に声をかける私。彼の正面に位置する椅子
に座り、両手で顔をついたままじっと見つめる。

「……………あ~~~~っ、どっかに行ってくれ!気が散る!」

顔をしかめ、目を合わさないまま怒鳴り散らす彼。その声は2人だ
けの科学室に反響する。

しばらくした後、私が涙目になっていることに気がついた彼は試験
台にあった一つの作品を私にくれた。

「……………あ~~~~っ、悪かったな。ほら、これやるからさ。」

お前の好きな色だぞ。」

彼の手のひらにあるそれを受け取る私。

「……………くれるの?」

髪留めのようなそれを私は恐る恐る受け取った。試験台の上にある作品の中で唯一、それは何の変哲のないものだった。

「……………あ、ありがとう。」
そんなものでも私は嬉しかった。私の幸せを表すその言葉は彼の瞳を揺らしていく。

「バーカっ。」
恥ずかしそうに。だけど、嬉しそうな顔をする彼を最後に見つめ私は1人、帰路についた。

「ふわ〜はあ。」
空を見上げてみるとそこには当然のように雲が広がる。

昨日、見つめた雲と同じものはあるのだろうか？流れていく白い塊を見つめながら私はそんなありえない事実を探していた。

複雑に絡む電線の向こうの世界の色はどこまでも青く、私はそんな限りない色が好きだった。

「ふわ〜はあ。」
「ね、眠そうね…。」

私の隣にはあくびが止まらない彼が1人。連日、学校の科学室に閉じこもっては納得するまで作業をしている様子。昨日も家に帰ったのは部活動の活動が終わり、最終下校の放送が入り、見回りの先生が科学室に来てからだという。

「ねえ、提案があるんだけど…。」
今にも瞼が閉じてしまいそうな彼に、私は一つの提案をした。
それは、アルコールランプとピンセットを借りて自宅で作業をするというものである。

先生が科学室の利用を認めているのならば道具を貸し出すことも容

易なはず。むしろ、こちらの方が彼も学校も困らない。

「ふわ〜はあ。」

「ああ、お前頭いいな〜。」

曖昧な反応をする彼。あくびをしながら頭がいいと言われても腹立たしく、流されているような気がした。歩きながら体を伸ばす彼に私は質問してみた。

「なんで、あんなことをやり始めたの？」

前までなら学校に来て終わるまでの間、すべての授業を寝通していた彼。

そんな人間が急に工作に目覚めはじめては気にもなる。

「…きっかけは本当に、単純なんだ。」

この前、祭りのアルバイトに行つてそこがたまたま装飾細工を売るところだった。

「そこでちよつとな…。初めてだったよ、あんな気持ちは…。」

何かを思い返すようにしながら私に伝える彼。私たちの制服に遙か空からの風が通り抜ける。

「えっ、たつたそれだけ？」

「ああ、たつたそれだけ…。」

その風はあの空のむこう側へと消えていく。

空、雲、風。

そして、それを見つめる私たちが歩いていく。

「じゃあね〜。」

次々と教室を出ていく友達。もう受験期間も間近であるため当たり前だろうか。

少しだけ開かれたカーテンのむこう側から夕暮れの赤い光が私たちの影をつくりだす。

その光の中で今日も作業をする彼を私は見つめていた。

「ほら、私たちも帰ろう？みんな帰っちゃったよ。」

「……………」

肩幅ほどの机の上にも赤い光が灯る。彼は無言のままその赤の中に瞳を潜めていた。黒板の上にある時計の秒針だけが音をつくりだしていく。

「…なあ、お前は進路どうするんだ？」

赤い光に瞳を集中させたまま藪から棒に質問してくる彼。体がぶれないように椅子に深く腰をかける彼に、私は何も隠さずに答えていた。

「…えーとね、大学に進学して…」

その先は何も浮かばないんだよね……………」

行く末の見えない自分を伝える私。他の人に質問されたら嘘をついてしまうだろう。

でも、彼にだけは今の自分を伝えることができていた。

情けない真実を伝えてしまった私は、仕返しに彼に同じ質問をする。

「…俺か？俺はな…。会いたい人がいるんだよ。」

その人に会うためには高校を卒業した後、店をもたないといけない。

……………もう、俺には時間がないからな…」

初めその言葉を聞いた時、まったく理解できなかった。

好きな人に会いたいのだろうか？

そんな私の最低な思考にすぐさま現実の波が押し寄せる。

「よし、帰るぞ、そろそろ見回りの先生が来る時間だ……………か。
……………くっ、う！……………」

「

机の上の道具を片付け鞆の中に収めた後、椅子から腰を上げたその瞬間、彼は苦しそうに床に倒れこむ。

両手で左胸を押さえ、痛みを堪えるその姿。

両足を暴れさせ、周りにある机と椅子が蹴り飛ばされていく。

「…ね、え…。どうしたのよ…。」

どうしちゃったのよ……………」

……………ねえ……………」

恐怖と焦りを押さえつけ、急いで職員室に助けを呼びに行く私。

延々と続く暗闇の廊下を走り続け、光のない世界を彷徨い続ける。

もう、夕暮れの光は沈んでいた。

「…ねえ、聞いていい……………?」

彼の座る車椅子をひきながら病院の屋上を踏みしめていく。白い柵と灰色の地面、そして風になびくシーツの風景だけが私たちの居場所になっていた。

私は高校を中退した。

「お前に俺の持病を伝えても、何も変わらない。

…お前が悲しんでも、この空は変わらない。

…それなら、俺は隠し通そうと思った。

…卑怯かもしれない。でも、俺が望んだことなんだ…。」

彼は今日も憎く、青い空を見つめながら私に伝える。

「なにが何も変わらないよ。

…なにが望んだことよ。

…。。。なんでよ…！なんで、こんな…。。。なんで…。。。。」

彼の心臓には生まれつき、穴が開いていた。手術には莫大なお金が必要であり彼の家計では到底、不可能だった。彼自身の体力も手術に耐えられる状態でなく、何もかも術を失くしていた。

「…なあ、覚えてるか？

俺がお前に、あげた時のこと…。」

止まらなく流れ続ける涙。私の悲しみに溺れた瞳に、彼の瞳が重なり合う。私の震える手をやさしく解き、彼は自らの腕で車椅子の車輪を動かし私の体と対面させる。

「…正直、あの時は嬉しかったんだ。

周りのみんなはガラクタって言うけど、お前の言葉と笑顔が俺に勇気をくれた。

お前ので二度目だったな…。あんな気持ちになれたのは…。」

悲しみに溺れる瞳に彼の残酷なほどにやさしく、暖かく微笑む姿が映る。

「…なあ、俺も聞いていいか…。。。？」

震える声が微かに私の耳をかすめる。いつの間にか、彼の瞳にも涙が浮かんでいた。それは悲しみに溺れたものではなく、力強い決意を表していた。

「…もう、遅いかもしれない。」

…でも……………。
俺は、あなたを…。」

…愛しています。

彼の右手から銀色の指輪が私の左手の薬指にはめられていく。彼の両腕はゆっくりと私の体を抱き寄せていく。

「……………っ。ばーか。」

私の大好きな青色の髪留めは、空から降りそそぐ永遠の雨に流されていく。

「……………っ、う！…。」

「…もう無理よ……………。病院に戻りましょう。」
私たち2人は結婚した後、彼の望みを叶えるために店を開いた。だが、開店当日にお客が来ただけでそれ以来、この場所を訪れる人

はいなかった。

「……………たとえば、神様が俺の存在を奪おうとしても俺は、ここで待ち続ける。」

…俺は会いたい…。お前と同じように勇気をくれた…。

…あの子たちに……………」

この後、彼は発作を起こし病院へ運ばれた。医師から、もう彼に明日はないと伝えられる。

逃げられない現実。それは常に大切なものを奪い続けていく。

「…ピッ、…ピッ、…ピッ、…ピッ、…ピッ、…ピッ……………」

心電図の音だけが私の耳を満たしていく。確実に死へと向かうその音は、私に絶望を与えるものでしかなかった。

「…お前……………に、…伝え…ること…とが、…最…後に……………ある…。」

酸素マスクを曇らせ一つひとつ言葉を紡ぎだしていく。その声を聞くたびに、私の胸に傷跡が残されていく。

「……………一つめ…は…、店…を続けて…欲しい…。」

俺の…会いたい…人は…お前…と同じ髪留め…をつけている…。

「……………心電図の間隔が段々、広くなっていく。」

「……………二つめ…は…、お前が…つけて…いる…その髪留めと…指輪を…」

俺と一緒に…に焼いて…欲しい…。……………」

呼吸が段々と小さくなり、瞳が閉ざされていく。
彼の手を握り締める私の手に、自分の涙が零れていく。
私は何も出来なかった。

彼に幸せを……もらうことしか……。

「泣……………くな……………。」

また……………つく……………てや……………るから……………ね……………

「ピ……………」

病室の窓越しから今日も青い空が世界を包んでいる。
その色はどこまでも広がりそして、限りない色。

「ねえ…園歌…」

私たちはお店を出た後、何も考えずにただ歩いてきた。商店街を抜けて、大きな坂道を下^{くだ}っていく。右には限りなく青い海が広がり、左には私たちの住む家並が広がる。

「実はね…、今日、本当はみんなで集まるつもりだったんだ。

でも、みんな都合が合わなくなっちゃってね…」

顔を下に向け、両手を後ろで組んだまま歩き続ける彼女。その視線は夕陽がつくる自分の影を見つめるものだった。

「時見くんが転校してきてからもう半年。最近ね、みんなで居られる時間も少なくなってきたでしょ…」

「だから、なんか切なくなってきたよ…」

にこやかに笑うものの目には若干、涙が浮かんでいた。

今日、彼女が元気がなかったのはみんなが集まらなかったからだと私は悟った。

「…いつか、園歌とも…。離れちゃうんだよね…。」
小声で紡がれていくその言葉は、私の心までを切ないものに変えていく。

「…そう。いまこうして彼女と…、みんなと当たり前のように過ごしている。けれど、いつか必ず離れてしまう。認めたくない。でも、確実にその瞬間は私たちの背中に迫り続けている。」

「…でもね、今日あのお店に行って話を聞いたら、感じたんだ。」
水平線へ沈む夕陽を見つめながら彼女は水面に溶けていく茜色を目を逸らさずに望む。

「たとえば、この世界から自分が消えたとしても何かが繋がっている。それを証明できるものはないかもしれない。
だけど、そんな見えない力が私たちを会わせてくれるんだよね…。」

「
後ろで組まれた両手を強く握りしめ、確信するその姿。
夕陽が完全に水面の中へと消えていく。
もう存在しないはずなのに、空にはまだ輝きが絶えていない。」

「………ぶっ、ごめん！今日はらしくなかったね。
なにか、美味しいものでも食べに行こうかつ！」
彼女の腹部から空腹を告げる音が鳴り響く。その音を聞かれた本人の顔は恥ずかしそうであり、赤みがかっていた。

「ほっら、いくわよっ！」
「ちよ、引っぱらないでよ。麻美っ！…！」

海風は彼女たちの髪をやさしく揺らす。

そこには青色の髪留めと、語り継がれていく思いが詰められている。

この空は今日も、彼女たちを見つめていた。

バーナで鋼を溶かし接合していく。手際よく作業するその姿は到底、俺に真似できるものではなかった。

夏の暑さに加えてこの炎の熱さ。親方の肩越しから俺はそのきれいな細工を眺めていた。

「おい新入り！ちよつと俺はメシを食ってくるからよ。

そんなに時間はかからんから、俺が作ったものを売っとけよっ！」
軍手はずし、首にかかったタオルで顔の汗を拭く親方。

「あと、練習するんだつたらそこにあるのは触るなよ！お前にはまだ早いから。」

なんか作るんだつたら、お前の足下あしもとにある色つきの針金でやりな！売る時は値札をつけるよ！」

俺の足下あしもとにあるのは様々な色の針金。

赤、青、黄、緑、紫、黒、銀……。数えだしたらきりが無い。見た目は細いが意外にも鉄並みの硬さ。指で折り曲げようと試してみたら無理であった。

「……………くっ、うー！。」

熱さのせいで胸の痛みが激しい。俺は我慢し作業を続ける。

こつという工作のようなことをしたことがなかった俺は失敗を重ねていき、なんとか商品になるようなものを作っていた。

練習を終えて、本番に取り掛かる。数ある色の中から俺は一色だけを集中的に加工していく。

「どうもありがとございま〜す！！」

元気に挨拶をするものの、ここまで売れないと結構へこむものである。

売れていくのは、やはり親方の細工ばかり。俺が作った細工は未だに一つも売れない。

…仕方ないか。一色だけで同じ形を並べても芸術のカケラすらない。親方の細工と比べたらガラクタ同然。当然の結果であろう。

あきらめかけたいたその時、俺の前に小さい女の子2人があらわれる。

「キミ…、こつちの方がきれいだよ。」

自分の作品をけなす発言であるが事実なのでどうしようもない。俺は親方の細工をその子たちに勧めていた。

「こつちくださーい！」

俺の細工を2人分握りしめ、その子は大きく叫ぶ。何度、問いかけてもその返事は変わらなかった。

その子たちの瞳は純粹で、無垢で、透明だった。

「うわあゝ。きれいゝ！」

すぐさまお互いにその髪留めをつけ合い、はしゃぎ回る。

この声と姿を見た瞬間、俺の心の中で何かが生まれた。

嬉しそうに走り去っていくその子たちに俺は無意識に尋ねていたのであった。

「…キミたち、お名前は？」

どこまでも澄み渡るその笑顔はとても美しく、あいつの笑顔に似ていた。

「わたしは、しらとり そのか！」

「…き、きでんいん あさみです。」

私たちは出会うだろう。

…そう。

偶然という名の必然で。

5：黄金色の住む道で

いけない、勉強中だというのに寝落ちしてしまった。

俺は4人掛けの円形テーブルに1人で座り、数学の教科書の上に顔を伏せて寝てしまっていた。

蛍光ペンで囲まれた数字や文字が通常の視界で見る何倍もの大きさで見える。顔を伏せていたせいでページが若干、クシャクシャになつてしまった。おぼろけな目で下のカーペットを見ると、消しゴムのカスが散乱していた。

教科書の下に敷かれているノート。見開かれているそのページの上側に公式が書かれている。その下には問題が書かれてあり、何度も書いては消した跡が残っていた。

俺が今、居る場所は学校の図書室。

周りを見渡してみるとまだ、俺以外にも勉強をしている人が確認できる。

だが、先ほどよりは明らかに人数が少なくなっている。腰の高さほどの本棚の上に位置する窓の景色はすでに真っ暗。

これらの情報が示すことはただ一つ。そろそろこの場所に生活指導の教頭が来ることを表している。

あの人に捕まるとろくなことが起きない。捕まるといつか、絡まれるといつか…。

テストの日までもう残りが少ない。といつか、明後日。

バイトの予定とうまく調整しなければならぬ。バイトを休んでしまつと収入がなくなり家賃が払えなくなってしまう。1人暮らしは大変である。

かと言って、勉強を怠ると赤点になり、合格するまで居残り勉強になる。

受験シーズンが近づくにつれてテストの問題が手強くなってきている。まったく、ありがた迷惑の特典であり、返品を希望したいものである。

「カチャカチャ、シユルルル」
シャーペン、消しゴム、蛍光ペンを筆箱にしまい、教科書とノートを閉じる。

勉強する保証はないが、ここで教頭に絡まれるくらいなら家に帰った方が妥当だと判断した自分。
椅子から腰を上げ、カーペットに散乱する消しカスを丁寧につまみとる。

背骨と骨盤の境目が痛むことをしゃがんだことで気づく。この木製の背もたれでは痛めてしまっても仕方がない。
あくびを連発してしまう程の眠気を堪え、鞆を握る。

「……………」

この空間を立ち去ろうと出口の方にあるテーブルを見た瞬間、俺はめずらしい光景を見るのだった。

そこには、必死に勉強をする彼女の姿があった。

私たちが座るテーブルの背後にあるドアから次々と生徒が帰宅していく。

みんな私たちと同じく、テスト勉強のためにここへ来ていたのである。帰宅していく彼らの手にはカウンタで借りた本が抱えられている。

私たちがここにいるのも、もう限界に近い。最終下校時刻を告げる放送が流れるまであと数分。

私の勉強に対する意欲と集中力もすでに限界値。周りを見渡し、この空間にとどまり続けているのが私たちだけであることに気づき、真向かいに顔を伏せて座る彼に声をかける。

「……………んっ、うゝゝゝ。」

両腕を枕代わりにして顔を伏せたまま寝ぼけ声で唸る時見くん。しばらくすると上体を起こし、大きなあくびをしながら体を伸ばすのだった。

暗闇の正面玄関から望む外の世界。

淡い月明かりがつくる下駄箱の影をただ1人見つめる。

手に握るビニール傘。

その透明な衣は、この空間の色にかき消されていく。

秋の訪れを告げる満月が与えるものは、定まらない光と冷たい景色。たたずむ自分に出ることはこの世界を見つめることだけ。

この光までもさえがやがて、厚い雲に閉ざされていく。

「遅くなって……ごめん。」

ちよつと職員室で細田先生から数学を教えてもらって…。

………帰るか…。」

帰る時間を遅くしてしまったことを謝る彼の声。

何も見えないこの黒い世界でも、その声色はしっかりと伝わってくる。

「…っふ、そうだね。」

静かに微笑みながら答える自分。

再び外の世界を望んでみると、そこには黄金色の丸い月があった。

街灯が照らしだすのは少し湿った地面と俺たちの足先。
等間隔に広がるその光は、雨上がりの帰り道を冷たく包んでいく。
空には厚い雲が広がり、その狭間から少し黄金色が姿を覗かせる。

「白鳥が勉強なんて、めずらしいな。」
水たまりを避けながら坂を下っていく。

じとじとした空気。それは肌に不快な感触を残していく。

「……………そ、そうかな……………」
隠すように、ためらうようにして答える彼女。その小さく、弱い声
は何かに怯えているようだった。

耳を澄ましてみると虫の鳴き声が至る所から聴こえてくる。
何重にも響き続けるその音は、意識して聴いていると非常にうるさ
い。

過ぎ去っていく季節は、夏に聴こえた蝉の声を鈴虫の声に変えてい
るのだった。

「……………ねえ、時見くん……………」
しばらく何も会話をせずに歩いていると彼女から質問された。
それは、俺がなぜ漫画家になりたいのかを尋ねるものだった。

「…また、急な質問だな。てか、よく知ってるな…。」

「この前、みんなで帰った時に言ってたもんね…。」
寂しく笑いながら手に持つ傘の先端で水たまりの表面を揺らして
く彼女。

その小さな水面みなもに描かれていく波紋を見つめる俺はこの時、教室に
自分の傘を忘れたことに気づいたのだった。

「…なんて言うんだろうな……………」

なんか気づいたら自分が漫画を読んでいて、それが楽しいとい
うか、面白いというか…。」

改めて自分の夢を語るというのはちょっと困ってしまう。人に伝え
ることは難しく、説明しているうちに段々と恥ずかしくなる。

曖昧な俺の言葉を真剣に聞く彼女。その表情は思いつめた様子であ
り、唇を噛みしめていた。

「…どうしたら…、夢ってできるのかな……………」

突然、彼女の声が震えだす。歩く歩幅は段々と小さくなり、やがて
坂の途中で止まってしまふ。

「…ど、どうした突然？」

彼女の手首を持ち、体を引こうとするが、一向に動こうとしない。
ただ沈黙を守り、何度も首を左右に振る。

今日の彼女は何か、違っていた…。

黒い空からの土砂降りの雨が俺たちの体を打ちつける。
地面に膝をついたまま傘を握り締める彼女。開く様子はなく、容赦なく降り続ける雨に彼女の全身が簡単に侵されていく。
「……………私、どうしたらいいのかな…?」
「……………私、どうしたいのかな…?」
「……………私、どうなりたいのかな…?」
繰り返し言葉を紡ぎだすその姿を俺はただ無言で聞くことしかできなかった。

「恐いんだ…。
みんなは進む方向が見えている…。
でも、私には見えない……………。
ずっと見つめていても変わらない……………。
……………私に見えるのは、暗闇だけなんだ……………。」
雨の音に彼女の行き場を失くした声が交る。俺は制服の上着で彼女の体が濡れないように雨除けをつくり、静かに声を受け止めていく。

「みんなと離れる……………。
私だけ、みんなと……………。
……………時見くん…、私どう…したら……………?」
文化祭で俺の手を元気に引いた彼女の溢れる瞳はどこにいったしまったのだろうか。
その行方を求めるかのように1人、俺は空を見上げていく。
だが、黄金色を望むことはできず、激しい雨が額を打ちつけるだけだった。

「…ハツ、ハツクシユンッ。」
傘を差していても大粒の雨が顔面に激突してくる。風の強さも相当なものであり、その衝撃は今この瞬間も私の体を凍てつかしていく。本当は園歌ちゃんと麻美ちゃんとミレアちゃんの4人で一緒に帰ろうと思っていたのだが、校内放送で白川先生に呼ばれ、今の時間までかかり不可能になってしまった。

「……………」
排水溝に流れていく雨の行方をじっと見つめる。
道端にあるそれはただ静かに大量の水を飲み込んでいく。
激しく打ちつけられても何も語らず、ひたすら耐えていく。

子供の頃の自分はテレビドラマを見て、いつもこんなことを思っていた。

雨の日の景色はどこか切なくて、きれい。
登場する場面の数々はどれも憧れの^{あこが}世界。

雨の中、捨てられた仔犬に哀愁を寄せる不良少年。
主人公が雨の中を彷徨い、追いかけたさきで恋人と抱き合う。
突然の雨で傘がなく、学校から家まで走って帰ろうとしたその時、
後ろからやさしく傘を差し出す幼なじみ…。

いつかこんな雨の日が来るのではないかと期待していた。だが、いつまで経ってもそんな世界は現れはしない。服や靴はびしょびしょに濡れ、独特な臭いが充満して、やけに体が動きにくくて…。

どれもこれも私の感情に負の要素しか与えてくれない。どんどん気分が沈んでいき、何も考えたくなくなる。

「ザーーーーーッ……」

聞こえてくるのは地面と水がぶつかる音。

何の変化もなく絶え間なく続くその中を、昔の自分の思考が馬鹿ばかしいと嘆き、1人歩いて行く。

切ない、きれいなんてありなんかしない。

日常で繰り返される雨の存在は、どれも同じ。期待していた望みを空虚の塊で埋めていく。

私が黄昏に身を任せたその時、誰かの声が聞こえてきた。

「……………よお。」

足下にあった視線を声のする方向へと向けていく。

私の横にはいつの間にか塚原くんが歩いていた。

彼の吐息が冷たい雨と同化し、おもむろに消えていく。

「…すごい…雨だな。」

「……………うん。」

傘から流れ落ちていく雫。

その一粒を見つめる瞳の先には、数えきれない雨が行く手を阻む。

そんな今日の雨も、いつもと同じものだ…思っていた。

「塚原くん、今日は帰るの遅いね…。」

勉強してたの？」

頬に雨が打ちつける中、私は彼に聞いていた。

明後日からテスト週間に入る。三年生になってからテスト内容が一层濃くなったような気がする。

二年生までなら普通に授業を受け、復習を少ししておけば大丈夫であつたのだが。

受験が近づくにつれて教室や図書室で勉強をして帰る生徒たちも徐々に増えてきている。

「…いや、バンド仲間と話しててな。」

何かをためらった後、静かに口を開く彼。

私はこのバンドという単語を聞いて、文化祭の時の事を思い出す。

調理室で料理総括の一通りの仕事を終えた後、麻美ちゃんとミレアちゃんと一緒に体育館へ向かった。

その目的は当然、塚原くんのライブである。

今年の曲は、音楽はどんなだろう？

大勢の観衆が見守る中、その旋律は確実に時間を止めていく。聴こえてくるのは今までに感じたことのないもの。

初めて聴いたはずなのに、いつの間にか口ずさんでいた。

…なぜか、懐かしい…………。

あんな感覚は生まれて初めて。

彼の何かが私たちに伝わってきた瞬間だった。

「…飛馬は、放送で呼ばれてた…な。」

冷風が前髪を揺らす中、そんな不思議な体験を思い返していると、彼が質問してきた。

しばらく黙りこんだ後、私は視線を合わせぬまま口を開く。

「…進路の…ことだね。」

私の発言に対し、彼が顔を曇らせる。

「…お前、成績いいだろ。どついう意味だ…………。」

雨の中でも彼の声ははっきり聞こえ、私の心の内さえも見透かそうとする。

「…………。」

「…………。」

やがて、沈黙が生まれ声が消えていく。

「…………。」

水たまりに映る、繰り返される波紋。

「…………。」

「…………。」

止まらない余韻はいつまでも、その水面を揺らみなもしていく…。

「……………」

「……………」

なかなか辿り着かない。

「……………」

「……………」

こんなに遠いはずはない。

「……………」

「……………」

耐えきれない私は彼に質問していた。

「走り続けて行き着いた先にあるのは一つに分かれ道。

片方は目指す場所に続く栄光の道。片方は永遠に続く奈落の迷路。どちらの道が、どちらに続いているかはわからない。

走り続けてきた道を引き返すことはできない。

もし、こんな道があるとするとするなら塚原くん……どうする。」
私が出立ち止まるのと同時に彼の足も止まる。

「……………絶対に、迷うだろうな。」
彼の答えは私とまったく同じものだった。

誰でも迷うのは当然。
選択を間違えた瞬間、目指す場所には永遠に行けなくなる。
道を引き返してしまうと、永遠に前に進むことはできない。
恐怖と不安を避けて道を進むことは絶対に出来ない。

「でも、これだけは言える……………」
私の淀んだ表情を見た彼は再び歩き出す。その瞳の奥には深い希望の欠片がしっかりと輝いている。

空を見つめながら傘についた水滴を振り払う彼。
それを見て、私は先ほどまでの雨が嘘のように止んでいることに気がつくのだった。
月を見つめ、彼は私の瞳を見つめ、強く言い切る。

「……………走り続ける。たとえ、どちらの道に選ばれようともな。」
この言葉に導かれたかのように私の足は再び目覚め始めた。

この揺るぎない気持ち……………。

雨上がりの空の果て。そこには切なく、きれいな黄金色があった。

6：夢の記憶

「ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ」

脇に挟んである体温計から機械音が鳴り響く。

その先端に指先で触れてみる。自分の体温が異常なせいか、それほど熱い感覚には思えない。

頭の下に敷かれている氷枕。冷たいはずのそれも自らの体の熱さのせいで本来の役割を果たしていない。

「園歌、入るわよ。」

部屋の片隅にあるドアから母親が私の様子を覗く。そのエプロン姿の人は両手に小振りの鍋を持ち、私に近づいてくる。

「お粥、食べれる？」

使われていない勉強机の上にその鍋を置き、私の手から計測済みの体温計をとる。

「下がらないわね。」

我慢しないで病院に行った方がいいわよ。」

「大丈夫。ちよつと寝てれば、ゴホッ。」

…ッ。ゴホッ、ッ。ゴホッ…」

咳が止まらない。繰り返されるその共鳴を心配する母親が声をかける。

何を言われても首を横に振り、肯定を促す。

私の意見をようやく聞き入れた母親は、私の頭の下に敷かれていた氷枕を新しいものに交換する。

その表面に指先を触れてみると今度は冷たさが認識できた。

「明日、熱が下がらなかつたら何を言おうとも病院に連れていくからね。」

お粥を食べたらそこに置いた市販の薬でいいから飲んでおくのよ。わかった？」

声を荒げて言うものの、母親の目は最後まで私を心配するまなざしだった。

ドアが開き、私の部屋から母親が出ていく。

「カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、カチツ……」

聞こえてくるのは目覚まし時計の秒針の音。変化なく、一定の間隔で刻まれていく。

そんな聴き飽きた音を聴きながら、私は白い天井を見つめるのだった。

あの雨の夜の日、私はどうしてしまったのだろうか。

図書室にテスト勉強をしに行つて、時見くと会つて、一緒に帰つて……。

あんな土砂降りの中で傘も差さずに彼に変な事を聞いてしまった。

……、
気がつくと、自分の体を制服の上着で覆う時見くんが立っていて……。

「……ゴホッ。ツ……ホ、ゴホッ……」

時見くんに会つたら謝らなければ……。

雨の中、ちゃんと傘を差していれば私が熱を出すことはなかったし、彼が濡れることも避けられた。

テスト期間を終えてから数回しか私は学校に行っていない。本当はテスト期間中すでに調子が悪かったのだが、休むわけにもいかず強

引に行つたのである。
その副作用とも言えるべき代償がこのありさまであることは云わずと知れたこと。

週末には体育祭がある。

この体の状態ではまず、学校に行くことすらできない…。

「…ゴツ、ゴツホ、…ゴホツゴホ…」

このまま起きていても、この体の熱さは私を襲い続けるだろう。
寒気がして、鼻が詰まり、体が重い…。

眠りにつくのは限りなく難しく、眠ろうとすればするほど眠れなくなっていく。

「カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、カチツ…」

目を閉じて時計の音に耳を澄ましていく。

何回聴いても、何十回数えても、何百回待ち続けても、
その音は変わらない。

「……………」

意識が薄れていく。

体がやわらかく、解き放れていく。

視界が消え、どこかの世界に引き込まれていく。

ゆっくりと、静かに…。

眠りに落ちた私の体に今もなお、秒針の音が鳴り響き続けていく。

青空の中を自由に飛び廻る、うみねこたち。

その白い翼に真夏の太陽の日差しが差し込み、影をつくりだす。

その黒い模様は限りなく広がる青い海面みなもに映り、入道雲とともに幻想に溶けた景色をつくりあげていく。

「…スサーー」

あしもと

幼い私は自分の足下に広がる砂浜の一部を両手で抄すくっていた。

温かいその砂はキラキラと光り、貝殻の欠片が混ざっている。

爪に砂が入り込んでも私は気にせず夢中で戯れていた。

…波の音以外に、何かが聴こえる。

何度も同じ旋律が流れ続ける。

幼い私は音がする方向へと走っていく。

砂浜に残されていく小さな足跡を、すぐさま小波が消していく。

「……………」

幼い私が辿り着いた場所には1人の女の人が立っていた。

その手には首飾りが握られている。

聴こえてきた旋律の正体は、この首飾りの中に埋め込まれているオ
ルゴールの音だった。

それを静かに見つめ続ける女の人。

その黒く、長い髪が海風に揺らされていく。

私の頭をやさしく撫でるその人。

深く微笑み、どこまでも続く海と空を見つめている。

その瞳には、美しく、儂い青色の世界しか映っていなかった。

「また、会えたね…。」

…これも、偶然という名の必然…ね。」

夏の景色がゆっくりと崩れ落ちる。

夢が終わりを迎える合図。

幼い私の前から女の人の姿が消えていく。

すべての映像が、跡形もなく閉ざされていく。

…世界が、沈んでいく。

「カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、カチツ…」

何も変わらない時計の音。

何も変わらない天井の景色。

再び現実の世界に目を覚ました私が感じるとるものは、そんな不変の空間。

夢の中にいることをあそこまではっきりと認識した上で見る夢は初めて。

普通なら夢と現実の境界は目が覚めるまで分からないはず…。

「ピピピピッ、ピピピピッ、ピピピピッ」

体温計の音が鳴り響く。再度、自分の体温の具合を確かめる。

「…よし。」

体温が平常に戻ったことを確認する。これで、明日から学校に行くことができる。

とは言っても安静第一。私は完全に体調を回復させるために二度寝をすることにした。

再び部屋の明かりを消し、布団を顔まで覆いかぶせていく…。

「はーい、ちょっと早いけど終わりにしようか。」

まだ書いてる人がいるから号令はなしでいいです。」

細田先生の声とともに、今日の数学の授業も終わりを迎える。時計を見てみると、チャイムが鳴るまで数分ある。

周りを見渡すといつもの光景が広がる。

ほとんどの生徒が机に顔を伏せて眠っている。

案の定、私の隣の席に座る麻美も眠っている。

まあ、私が意識を取り戻したのも、つい数分前なわけであるのだが…。

「スーーーーーー、グゴ~~~~オ。」

気持よさそうな顔をして眠る彼女を起こさないように私は席を離れ

る。

もうすぐお昼の時間を告げるチャイムが鳴る。

いつものように私はご飯と一緒に食べる仲間を集めるのだった。

「速さん！今日も一緒にお昼、食べようねっ。」

麻美の前の席に座る彼女に私はいつも通り声をかける。しかし、返された言葉はいつもと違うものだった。

「ミレアちゃん、ごめんね。今から用事があるから…。」

申し訳なさそうに頭を下げる速さん。丁寧な対応に私は動揺する。

しばらくすると、彼女は教室を走り去り、どこかへ消えて行ってしまった。

「園歌〜！一緒にお昼食べ…。」

私は後ろを振り返り、園歌の声を求めていた。

しかし、そこにあるのは誰もいない机と椅子。

その隣の席には、黒板を必死に見つめながら2人分のノートを書き写す時見くん。

「…白鳥の…ノートも書いておこうかなって…な。」

私の視線に気づいた彼は、やさしく笑う。だが、その瞳は曇りがかっていた。

「キーーン、コーーン、カーーン、コーーン…」

窓越しに見える紅葉を終えた灰色の樹木。

そんな殺風景を望む私にチャイムの音が反響する。

その薄汚れた窓ガラスには、虚ろな自分の顔が映るのだった。

「うはあくくあつ、と。今日も疲れたわね。」
両腕を組上げ、眠り足りなさそうな顔をしながら体を伸ばす麻美。

「…今日は絡んでこないわねミレア…。お弁当もあまり食べてないわね…。」

私は目の前にあるお弁当箱の中身を見る。彼女が言うとおりの光景がそこには広がっていた。

たこさんウインナ、たまご焼き、から揚げ…。

数々の定番のおかずを手をつけず、私はごはんしか食べていなかった。

「…べつ、別にいく。」

麻美の悟り深い瞳が私の瞳に映りこむ。

白を切るごとく、メインディッシュのハンバーグを一気に口に運ぶ私が出た。

しかし、それは到底一口では食べきれぬ大きさではなかった。

「…た、体育祭って今週末だったけ？」

いつもなら速さんと園歌がいる。しかし、今日は2人がいないため私と麻美の2人きり。考えてみると、こうして4人でお昼を食べないのは初めてのことでないだろうか。

話題は無いのに等しく、いつもと違う雰囲気になんか耐えきれなかった私は無理やり話題をつくるのだった。

「あゝ。考えただけでダルいわ。まだ木曜日があるのよね…。」

苦虫を噛み潰したような反応をする麻美。両手で支えられていた彼女の頬は段々と下へ滑り落ちていく。

彼女がこの反応をするのも無理はない。

今日と木曜日は体育の授業がある日。当然のように授業の内容は体育祭の種目練習に染色されていく。

「いい加減にクラス対抗のリレの練習はやめてほしいわよ。」

おかげさまで筋肉痛のまま本番当日をむかえそうだわ…。」

顔を両腕で塞ぎ、机上に叫びこむ麻美。

彼女のだだをこねる様子を微笑ましく私は見つめるのだった。

中間テストが終わり体育祭が近づく。今週末でこの体育祭も終わり、本格的な大学受験期間が近づく。

あつという間に時間は流れ、気がつくとも目の前にあるのは将来を決める季節…。

私は積み重なり続けていく日々の中で、何が幸せなのかわからぬままに過ごしているのではないか。そう思うことが最近多い。

幸せとは何か。なぜ、それを求めようとするのか。

私の頭ではそんな哲学的な問題を解こうとしたところで、何もわか

らない。
考えても。
悩んでも。
思いつめて苦しんでも…。
何もわからない。
そう。何も…。

結局、わからないままでも時間は過ぎていく。
答えのない問題に正統な理由を求めてきた結果、得られたものは何もない…。

……。

…懐かしい声が聴こえる。
可憐に笑う女の人私が私と手を繋いでくれている。
傷ついた私の手のひらをやさしく包み込む自分以外の手。
理由もなく笑うその人は、私には輝いて見えていた。
純粹で。
無垢で。
透明で…。

そうだ。
思い出した。

私は何を躊躇ちゆうちゆうしていたのか。
幸せとは何か。なぜ、それを求めようとするのか。
そんなことはどうでもいい。
大切なのは、それを考えることではなく、生みだすこと。

私はあの時に教えられていたんだ。
笑顔で過ごすことの大切さを。
そこには何も理由がないと決めつける人がいるかもしれない。
でも、少なくとも私は違う。

夢の記憶が、あの人と過ごした幸せな一日を、こうして蘇らせているのだから…。

「…ちよっ、…ちよっと…ちよっとミレアっ！」

私の話を聞いてんのっ！
私の両肩を激しく揺らす麻美。

三時間目の体育の疲れのせいかな、私は彼女の話の話を聞いている途中で眠ってしまったらしい。

「数学の授業中に眠らないから、お昼の時間帯に眠くなるのよ！
ちゃんと眠らないとお昼ご飯が食べ終わらないわよっ！」

私の耳元に彼女の騒がしい声が聞こえてくる。この理不尽な説教に
対し、私は嫌味を言う。

「まあ、どこかのダレカさんとは勉強に対するハートがちがいま

すからね〜。」

私の発言を聞いた麻美は異様な笑い声をあげる。

「ふふっ、ふはははははははははは。」

それに対抗するべく私も真似をして笑う。

「フフツ、フハハハハハハハハハ。」

私のたまご焼きを素手でつまみ食べる麻美。

負けずと私も彼女のお弁当のポテトを強奪する。

「マア、所詮、冷凍デスネっ！」

「悪かったわねっ！！！」

こうしてふざけ合うのが私には合っているのだから。

深く考えたところで幸せが何かはわからない。

でもこうして…。

純粹に笑うことが。

無垢に笑い合えることが。

透明に笑い誇ることのほうが…。

私は好きだ。

「失礼します。」
開きにくいドアをノックし、中へと進む。

「…速、来たわね。
悪いわね、お昼時に呼んで。
でも、もう時間がないから…。」

白川先生はの手には書類が握られている。

「…速、あなたがこの書類にサインをしたら、もう日本こゝで走れない
かもしれない。」

先生の瞳は私を確かめるものだった。

「大丈夫です。私、決めましたから。」

自信にあふれた声で私は伝える。
決めた…道を。

「私、学校をやめます。」

「……………そう、行ってきなさい。」

高^{たか}
み
へ

7：片隅に置かれたもの

目を閉じ、両手を合わせる。

線香の煙が顔に当たる。

その深い沈静な香りは体をゆっくり、包み込む。

静かに目を開き、目の前にある小さな赤い炎を見つめる。

細い棒の先端についたそれは次第に、灰色へ変わり崩れていく。

仏前で手を合わせたまま、一つの写真を見つめる。

位牌の横にあるその写真には、男の人が写っている。

にこやかに笑うその顔を、私は無表情で見つめる。

「速^{はやみ}、そろそろ時間よ。」

襖が開き、母親の声が聞こえてくる。

「…体育祭、…行けなくてごめんね…。」

母親のいるリビングには食器や小物が散乱し、ダンボールがいくつも置かれている。

「ううん…。全然…。」

私は、その小さな声を^{いた}勞わるように言葉を返す。

自分の部屋で学校のジャージに着替え、玄関に向かう。

いつもなら制服を着るが、今日は違う。

洗っておいたシューズに足を入れていく。

「……………、」

玄関の片隅。そこには磨かれたこの靴とは対照的なものが置かれている。

小さくて、傷ついでいて、ボロボロで。

それは何年も、この場所に潜み続けている。

「…ガチャ、……………、ガチャン」

片隅に置かれた幼児用の靴。

玄関の前で、それを久しぶりに見たような気がした私は。

ゆっくりと扉を開き、学校へ向かう。

家を早く出たせいか、誰も歩いていない。

いつもなら、この道は多くの学生で溢れている。

「…ヒューンッ」

風が冷たい。

この通学路は海と隣接しているため、海風が吹いてくる。

普段は気にならない風なのだが、今日は一段と寒い。

うみねこの鳴き声も、今日はどこか寒そうだ。

この道は、あらゆる季節を私に見せてくれた。

春には、学校に咲く桜が見え。

夏には、蝉の鳴き声が聴こえ。

秋には、鈴虫と丸い月が訪れ。

そして冬には、冷たい海風が、こうして私の肌を凍てつかせる。

繰り返される日常の中、ふと、その瞬間を見てみると、そこには広がっている。

いつも、景色が同じに思えても、何かが変わるうとしている。

いつも、過ごしている時間が同じに思えても、何かが変わってきている。

いつも、自分が同じに思えても、何かが変わっていく。

「…ヒューンッ」

海風は勢いを増し、私の体を一瞬で包む。

首に巻いてあるマフラがほどけていく。

反応に遅れたせいで、それは後方に流されていく。

「…っ！」

マフラを追いかけようと後ろを振り向くと、そこには誰かが歩いていた…。

「…んっ、と。」

その男子は私のマフラをしっかりと受け止めていた。

「…今日も、寒いな。」

静かに笑うと、彼はマフラを私に渡す。

「…あ、ありがとう。」

彼と歩くのは雨の夜、一緒に帰った時以来。

首にきつくそれを巻いた私は、彼と通学路を歩いて行く。

私は、この街を離れる。

正直、みんなに伝えようかどうか迷った。

でも、ちゃんと伝えないといけなと思った私は…。

「…お前がここを離れるって言ったときは、…驚いたよ。」
白い砂浜と青い海を望みながら、私たちは、まっすぐな道を歩いて行く。

苦笑いをしながら、彼は言葉を紡いでいく。

私は、両手をポケットに入れたまま静かに答える。

「…うん。」

空から海へと風が通り抜ける。

それは水面を揺らし、そこに映るこの街を揺らしていく。

「…荷物の準備はもう…、できたのか…？」

まっすぐな道を進んでいくと、大きな坂道がある。

何かを心配するように、彼は声を紡いでいく。

私は、吐き出した白い息を見つめ、ゆっくりと答える。

「……うん。」

吐息は白さを失いながら、どこかへと消えていく。

行方を知らせないその軌跡は、ただ上へと昇り続ける。

「…体育祭が終わったなら、もう…行くんだな…。」

坂道を越えた先に、静かな商店街が広がる。

寂しげな表情で、彼は声を紡いでいく。

私は、道の傍らかたわに咲く小さな露草を見つめ、強く答える。

「……………うん。」
表面に雫を溜めたその露草はしっかりと。
冬の訪れを受けとめている。

まっすぐな道。大きな坂道。静かな商店街。
この先にあるのが…。
私の…、私たちの学校…。

「…俺は委員会に用があるから…ここで。」
私たちは校門の前で立ち止まる。
私は、彼に何も言えずにただ、黙り込んでいた。
「……………。」

最終競技のリレで私は、彼からバトンを受け取る。
彼に何か声をかけたいと思いつつも、声が出ない。

「…ふっ。また、…後でな。」

くすりと彼は笑うと、白い校舎の中へと姿を消していく。
手を上げ、あいさつをするその姿。

その彼の仕草は、いつもと変わらなかった。

「……………うん。」

私は、しっかりと頷く。

「…ちよつと体、温めようか…な。」

まだ本番まで時間がある。

心臓の音が加速していく。

胸の鼓動を抑えるために私は一人、誰もいない校庭を走ることにした。

「……………?」

歩き出そうとしたその時、足下^{あしもと}に違和感があった。

見てみると、靴の紐がほどけてしまっていた。

私は、しゃがんでしっかりと紐を結び直す。

「……………。…？」

紐を結ぶ瞬間、何かが頭の中をよぎる。

私の手に重なる暖かい何か…。

それは、どこかで見たような、どこかで体験したような…。

そんな、感覚…だった。

これは秋雨の夜、塚原くと帰る直前のこと…。

「…カコン、…カコン、…カコン、…カコン、…カコン、…カコン…」

階段を上がる。

勉強のために残っていた生徒たちが帰宅していく。

私は、その暗闇の道を歩いて行く姿を階段の踊り場から見つめる。微かな月明かり。

頭上にある窓からはもう昼間の暖かな光は差し込まない。

雲に姿を隠す黄金色が見える。

「……………」

私は白川先生を探している。

放送で呼び出され職員室に行ったが、そこに先生の姿はなかった。

夏休みの時も一度、私は先生に呼び出されたことがある。

あの時は家に連絡がきた。

学校で話したいと言われ私は夏休みのある日、学校へと向かった。

あれは補習通いの麻美ちゃんとミレアちゃんに会った日……。

「……………」

あの時も今と同じように職員室に向かったが、やはり先生の姿はなかった。

……………」

結局あの日、先生がいた場所は学校の屋上。

なぜ、そこで私を待っていたのかわからない。

先生はその時、何も話さなかった。……いや、話すのをためらっていたように見えた。

「……………」

そして今、私はあの時と同じように屋上へ向かっている。

階段と上履きが擦れ合う音を聴きながら、その場所へと向かう。

甲高いその音は、こうして一人で歩くと大きく聴こえる。

一步、また一步と段差を上がる音。

それは私の存在を証明するもの。

……やがて、屋上の扉の前に到達する。

「…、ギツギーン…」

その鉄の扉は力をいれないと開けられない。
油が注されていないためか開くと鈍い音がした。
扉の隙間からの冷たな夜風が私の体を揺らす。

「…。」

フェンスの前に誰がいる。

その人は大きな傘を差したまま、じっと立っている。
冷たい風の中。

どこかを見つめ。

無言のまま。

何かを待つように。

「…白川…先生…？…。」

私は意味がわからなかった。
なぜ、傘を差しているのか。

私に気づいていないのか、先生は無言のまま。
扉の前にいる私は先生に近づいていく。
冷たい地面の感触が上履きを通り抜ける。
その感触は私の身体を染めていく。

「…？」

先生の隣に近づいたその時。

何かの音が聴こえた。

耳を澄まさなければわからない些細な音。

それは次第に強くなる。

そして…。

「ザーーーーー…」

最初、それはただの通り雨だと思った。

だが、いつまで経ってもやまない。

突然の雨。

先生は雨がくることを知っていたかのように平然と立っている。

…大きな傘を差して。

私は暗闇の屋上から街を望む、先生の瞳を見つめる。

「…濡れるわよ…」

先生は優しく私の身体の上に傘を差し出す。

ようやく先生の声を聞くことができた。

私たち2人は黄金色が消えた世界で一つの輝きを見つめる。

校門の前を通り過ぎる父親と子供。
父親に傘を届けにきたその子供は大きな傘の下、父親と手をつなぐ。
雨の中に続く帰る場所を求め、その2人は歩いて行く…。

私の父親はもう、この世界にいない。
私が幼い時に父親は、…、……………。

最後に見た姿はリビングで包丁を胸に刺して横たわる死体。
私と母親の2人は。

…見捨てられた。

父親は仕事ができ、生活には困らなかった。
真面目で、無口なその人。

毎晩、会社に泊まり込み、家に帰ってくることは滅多になかった。
私と遊んでくれたことなんて一度もない。
自分が他人扱いされているようで私は父親が嫌いだった。

…ある日突然、父親の人格が変わった。
会社に行かず、煙草たばこをふかし、酒を呑み荒らす。
母親に暴力を振り、私を怒鳴りつけ、あらゆる全てを破壊していく。
物を、家族を、絆を…。
父親は、少しの失敗で会社を解雇された。

新しい職に就きたくても何も見つからない。
職が見つかったても採用されない。
失敗した人間。

その人間を批判する噂が流れていく。
それは、私までを侮蔑するものへと変わっていく。

私は料理を覚え、必死に勉強した。
私が陸上選手になりたいと思った理由。それは…。
変えたかったから。
見返してやりたい。
母親を、私を…隔てていくその視線を。

…悔しい。
母親は何も悪くない。
私は何もしていない。
なぜ、こんな思いをしなければいけないのか。

父親なんて…、…いなければ…、…。

.....。

「...カッコ悪いですね。...夢の理由が、こんなんじゃない.....。」
降り続く雨。

私は未熟な自分の心を嘆く。

こんな理由が今までの私を動かしてきた。

最近、私は記録が更新できない。

どう、自分を追い込んでも。

壁を、越えられない。

「...一本の道を進んだ先にある希望の道と、奈落の道...。」
先生は私に視線を合わせず語りかける。
その小さな囁きは雨の音に消されてしまいそうだった。

大きな傘に数えきれない雨が降りそそぐ。
湿った空気が風に混じる。
黄金色が見えない空の下。
私の瞳には何も映っていない。

「夢に理由なんて関係ない。大切なのは、揺るぎない…気持ち…。」
先生の強く言い切る声。

その声はやさしく、一途で、真剣だった。
私に伝えようとする何か。

右手に大きな傘、左手に大きな封筒。
濡れないようにして左手にあるその封筒を先生は。
私に渡す。

「先生は、希望の道に進んでいるかと思った…。でも、私はもう一
つの道を進んでしまっていた…。…」
唇を噛みしめ、傘を握る手が震えている。

…悔しそうに。
その顔は初めて見るものだった。いつもの表情は消えている。
封筒の中を見てみるとそこには。
大量の書類が入っていた。

…。
「速…、あなたには…そう、なって欲しく…ない…。」
雨の中に、その声は消えていく。
先生の崩れた声…。
空は、完全な黒色。

…。
…。
…。

書類に書かれていた内容。それは、海外遠征についてだった。
これは、海外に長期で滞在し、技術と実力を向上させることを目的
にしている。

日本だけでなく、あらゆる国から未来の選手を目指す人が集結する。
これに参加できるのは、ほんの一握り。

…世界で自分が通用するか確かめられる…。

…でも私は、これを断る。

今の自分の実力では到底、通じるわけがない。
記録を出せずに参加しても無意味。

何も、得られない。

弱い、自分…。

なぜ私は走るのか？
その理由は、変えたいから。
その理由は、見返したいから。
その理由は、悔しいから。
どれも、憎しみからできたもの。

私は、走らないほうが…いいんだ。
憎しみからできたものなど、夢でも何でもない。
今までなぜ、走ってきたのか？
何を期待してたのか？
…、…ただの自己満足か…。

勝手に箱庭をつくり、その中に夢のようなものを描いていた。
自分には何も無いのに、誇らしげに。
馬鹿ばかしい。
今まで全てが幻。

…私。

どうしようも…ない奴だ…。

……。

……。

……。

…一人、雨の帰り道の記憶。

あの時、私は気づいていなかった。

もしかしたら…、…奈落の道を進もうとしていたのかもしれない。

…、白川先生が私に伝えてくれた。

…、塚原くんが私に教えてくれた。

本当の、…走るという意味…を。

そして、今、私は…。

バトンを強く握りしめる。
風を越えて、一つの場所を目指す。
みんなが繋^{つな}げてきたもの。
そう、だから…。
私は今、走っている。

「速^{はや}さ〜〜ん!!! ファイトオ〜〜!!!」
ミレアちゃんの声が聴こえる。
私は間違っていた。
憎しみが今までの私を走らせてきたのか?
…いや、違う。
純粹に走ることが好きだから。
だから、走れてこれたんだ。

「がんばれ〜〜ッ、!!!」
麻美ちゃんの声が聴こえる。
走れることは、こんなに楽しい。
なんでこんなに楽しいのかと思うぐらいに。
それは、なぜかって?
そんなの。
理由なんてない。

「飛馬あ〜〜!!! もうすこしだ〜〜あ!!!」
時見くんの声が聴こえる。

夢に理由なんて関係ない。

先生は私に伝えていた。
なのに。

私は気づけなかった。

∴別の道を進もうとしてしまった。

「全~~~~部つ、抜いちゃえ~~~~ッ!!!!!!」
園歌ちゃんの声が聞こえる。

∴走り続ける。たとえ、どちらの道に選ばれようともな……。

塚原くんは私に教えてくれた。

一本の道の先にある分かれ道。

希望の道と奈落の道。

それは、∴自分の気持ちで進むものだと。

「行つ~~~~け~~~~え!!!!!!」

∴塚原くんの声が聞こえる。

中途半端な決意。

曖昧な感情。

私は、すべてを捨てる。

大切なものは、揺るぎない気持ち。

その先にあるもの。

それは……………。

白い線。
ライン

そこは始まりの場所であり、終わりの場所。

… 鳴り響く雷管らいかんの音。

けれど、私は。

この線ラインを越えてもまだ。

走り足りない…。

父親のプレゼント。

それは、小さな紐靴。

運動会に少女はそれを履いていた。

「……………」

小さな自分の手。

何度も結ぼうとするが。

少女は紐を結べなかった。

「…、貸してみなさい。」

父親は、その紐をしっかりと結ぶ。

少女と手を重ね。

暖かな、手のひらで。

「…誰よりも速く、お父さんのところに、来るんだぞ。」
父親は、結び終わると少女から離れていく。
真面目で、無口なその人は。
にこやかに笑い、少女を見つめながら…。

「…、転ぶなよ…。」

少女は走った。

…また、その優しい笑顔を…見るために。

玄関の片隅に置かれたその靴は今日も、彼女を見守っている。

8：白い欠片

.....。

空から降^おちる白い欠片。

一粒、また一粒…。

窓越しから見える白銀の世界。

乾いた空、凍てついた風、白い大地。

映るのは、どれも冷たな景色。

透き通るその色は街全体を包んでいく。

校門の横にたたずむ大きな木。

春に桃色の花を咲かせたその木は今。

蕾^{つぼみ}をつけ呼吸している。

木^{からだ}を覆う葉はすべて散り身を守るものはない。

白い欠片が枝先を包み、冷たく染めていく。

それでも、その木は静かに立ち誇る…。

.....。

…授業の終わりを告げるチャイムの音が、聞こえてくる。

「バゴンッ!」

この用具入れには毎回、悩まされている。
ほうきやら、ちりとりやら、バケツやら…。
このままだと、埒はちがあかない。
…えっと、これをこうして…っと。

「バゴンッ!」

…っ、イライラする。

なんだ、この汚い雑巾は？チョークの粉が染み込んでいて鼻がむずむずする。

前の掃除当番は何をしていたのだろうか…。

教室よりもまず、こっちの掃除をしなくては。

埃ほこりやら髪の毛やら…。

…っ、なんだ？この虫は…。

「バゴンッ！」

ふう、やっと閉まった。

手を洗ってこよう。…、制服が汚れてしまった。

何はともあれ、俺はこれで終わり。あとは、残り3人が終われば帰れる…のだが。

「パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、パツ、パツ…」

「ちよっ…、ミレア！もうちよつとあつちでやんなさいよ！」

「いや〜、こつしてくっ付いてやないと、寒いんですもの〜。」

「雪が降ってるんだから当たり前でしょ！ガマンしなさいっ！」

「ガマンできないからくっ付いてるんデスヨお〜。」

「…って、変なところ触るな〜っ！！！」

ベランダで黒板消しをはたく貴殿院と藤林。

貴殿院は真面目に掃除しているのだが、藤林がちよっかいを出してなかなか進まない。

さつきから同じ言動の2人…。

俺はこの悪循環を解くために声をかける。

「俺はもう、帰れるんだが…。」

いかにも、迷惑そうな顔で言ってみた。

「ほらっ、時見くんが怒ったじゃない！」

…「ごめん、もう少しだから…。」

「…す、すみませーん。」

いつもなら騒いでごまかす2人だが、今日は素直だ。

まあ、掃除のほとんどは俺がやったのと同然。

主導権はこちらにあるため強く反抗できないのだろう。

「…っ、寒いから扉を閉めるわよ！ミレアはこれ、戻ってきて。」

「りょうかい。」

ブルブルと身震いし、扉を閉める貴天院。

ピカピカになった黒板消しを片付ける藤林。

閉ざされていく扉の隙間から、風が教室の中へと通り抜ける。

「スーーーーーッ」

…呼吸するだけで胸が痛む。

凍えた風は肺に入り、身体からだに浸透していく。

街を包む風の軌跡は、俺までも白色に染めていく…。

「…それにしても園歌、遅いわね。」

窓の外を心配そうに見つめる貴殿院。

「ふむ、もう帰ってきていい頃だけどね…。」

同情した顔つきで頷く藤林。

白鳥はゴミ捨て担当。

ゴミを校舎の横にある焼却炉まで運び、新しい袋を職員室まで取りに行かなければならない。

あの大きな袋を捨てるに行くのは一苦労。

両手が塞がるほど大量なので時間がかかってしまう。

なので、遅くなるのは仕方がないのだが…。

「…園歌、なんか最近、様子…変よね…。」

「私が絡んでも、上の空な反応しかないしね…。」

「…大丈夫かしら。様子、見てこようかしら…。」

「うーん、確かに気になるよね。なにも、なければいいけど…。」

「……………」

「……………」

やがて2人は無言になり、その視線は黒板の上へと向けられる。

「さすがに、遅すぎる…よな。」

俺も、2人の視線の先を見つめる。

「カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、カチツ…」

音が消えた教室に響く、時計の音。

聴こえてくるのは聴き慣れた飾り気のないもの。
でも、なぜかいつもと違って聴こえる…。

「カコンッ」

分針が動く。

時計をここまで見つめるのは初めて。

おそらく、こうして人を待たない限り体験しない。

気付かないうちに、時が過ぎていくことを改めて実感する…。

「……………。」

秒針は果てなく動き続け、分針を動かしていく。

止まることなく、休むことなく、確実に。

そんな無情に進んでいく黒い針先を、俺たちは放課後の教室で見つめていた。

時が、満ちていく…。

「キーン、コーン、カーン、コーン…」

…もう、下校の時間…か。

「ガラガラッ」

教室の扉が開かれる。

静寂を破るその音とともに、人が入ってくる。

… やつと、戻ってきた。

「ちょっと遅いわよ！ いったい、何分待ったことやら。」

「とか言っつて、本当は心配してたクセに…。」

「…っ、ミレアだって心配してたでしょ！」

「まあ、私はアサみんみたいに照れ隠してないし。」

「ちよっ、どっついう意味よ！」

「さーあね。」

再び、教室は騒がしくなっていく…。

「まったく！ いつも余計なこと言っつて！！」

「アサみんは人のこと言える立場かな？」

「あんたに対しては間違いなく、対等以上に言える立場よ!!」

「フーン、何を根拠に言ってるのデスカ？」

「なに？なんなの、その挑発的な目つきは!!いちいち、つかか
つてきて!!もう!!」

「ワカッタ、ワカッタ。私が悪かったね。すみませんでしたア。」

「

さつきは白鳥を心配して心を一致させていた2人。

仲が良いのか、悪いのか…。

…いつまで、騒ぐのだろうか？

もうすぐ、見回りの先生が来るというのに…。

……………。

終わる気配がないので、俺と白鳥は2人を残して帰宅する。

「こうなったら、ミレア！もう絶交よっ!!!!」

「あなた、小学生デスカ??？」

―数分後―

…電子辞書でコツコツ、頭を叩かれている。

校門を出た俺は教室を見てみた。

…予測通りというか…。

そこには長原先生の説教を受ける2人の姿があったのだった。

.....。

左右に立ち並ぶ商店の外装は、鮮やかな装飾で飾られている。

サンタクロースにトナカイ、雪だるま……。

歩く先に立ちはだかる巨大な着ぐるみたち。

……チラシを勧めてくる。

中に入っている人には悪いが、無視して突き進む。

そうか。もう……。

こんな季節……か……。

「……もうすぐ、クリスマスだね……。」

空を見上げたまま、ぼやけた声で話す白鳥。

……なぜだろうか……？

彼女の表情が悲しく、俺には見える……。

「……そういえば白鳥の誕生日は、クリスマス・イブだったよな？」

沈んだ雰囲気晴らすために、俺は明るい調子で言った。

「……うん。」

降り続ける粉雪を見つめたまま小さく答えた白鳥。

…どうしてだろうか…？

微かに笑うものの、その笑顔は嬉しさを表すものではなかった。

「……………」

「……………」

白い世界に訪れた沈黙。

…今日の授業中もそうだった。

声をかけても窓の外を見つめたまま。

隣の席だから、見えてしまう。

彼女の、…俺が望まない、その横顔が…。

…。

…結局、まともに会話をしないまま俺たちは別れる。

「…また明日な。」

俺は、いつもと同じ台詞を言う。

「…また、あした。」

偽りの、やさしい笑顔で答える彼女。

俺は、その小さな背中を見つめていた。

明日は、いつもの笑顔を見せてくれるだろうか…。
薄く積もる雪の道に、そう思う自分がある…。

白い欠片がまた一粒、額に淡く溶ける。

9：一番星を見つめて

…雪が激しくなってきた。
急いで楽器を片付けよう…。

「今日も良かったぜ塚原っ！」
「明日もこの調子で頼むぜっ！」

背中を勢いよく叩かれる…。
俺も負けずにソイツらの背中を叩く。

「ああ、本番はもう明日だからな…。
気合い、入れないとなっ！」

「バコンッ！」

鈍い音が白く、冷たな街に響いていく。

「…っ、痛あゝ。」
「お前、少しは手加減しろよ。」

この注文に対して俺は即答する。

「…やだね。」
「ほんと、お前は容赦ねえな。」
「…まっ、塚原…らしいな。」

この発言に俺は半分、笑いながら言い返す。

「…、いつも俺は、本気…なんだよ。」

吐き出した息は限りなく空へと近づき、雪の色と同調していく。

「…ふっ、言ってくれな。」

「俺たちも、見習わなきゃだな…。」

肩についた白い欠片を振り払う。

…指先が少し、かじかむ。

「明日は楽しい夜に…、しような。」

「もう、俺たちでやるの最後…だから…な…。」

足下あしもとに積りゆく雪が冷たく、靴を包む。

……………。

「…じゃあな、塚原。」

「また明日な…。」

正面に見える白い大きな木。

電飾で枝先を覆われたその木は今、この街をやさしく照らしている。

「……………ああ…。」

降り続ける雪の中、その誇らしく輝く姿を羨ましく見つめながら俺は強く、答える。

……………。

互いを見つめ確かめるように頷き、俺たちは静かに別れる。

「…。」

通り抜ける風。それは今日も、…冷たい。

「…、……………」

暗闇を照らす眩い光。

…店の照明か。

もう完全に陽は沈んでいる…。

普段のこの時間ならこんなには人はいない。

バンド仲間と別れた俺は、いつもと違う姿の街を歩いて行く。

「……、……。」

…寒い。

制服の上にコートを着ていても冷気が身体からだを突き抜けてくる。

…連日、降り続けている雪。

どうしてこの季節はこんなに冷たいのか？

なぜ、こんなに降るのだろうか…。

「……………」

周りの景色はもう、明日を待ちかまえている。

瞬またたきするたびに映り込むもの。

それは俺を無意識に引き寄せていく。

…今年も残りわずか…。

どれもこれも自分が考えていたより早く、過ぎていった…。

初めはそんな風に、感じなかったのに…。

「……………」

…不思議だ…な…。

ふと、空を見上げる。

頭上に遥かに広がる漆黒の空。

その向こう側で輝く、一つの光。

果てなく続く雪の中、俺は強く輝く一番星を見つめる。

……。

公園で歌い、海辺で歌い、商店街で歌い…。

学校以外で歌うようになったのは高校生になってから。

…。

バンドを始めたのもちょうどその時。

… 思えばキツカケは本当に些細だった。

あれは、高校の入学式の日…。

立ち止まるその少年に一つ輝く一番星は、記憶の欠片を語りかける。

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。」

歌い終えた後に込み上げてくるこの感覚。

その正体が知りたくて俺は歌い続けている。

誰も見てない場所で、誰にも気づかれず、誰にも知られないうちに、ただ、声を空いっぱいに出してみると自分に、勇気があるような気がして…。

…そう信じて今も、この場所にいる。

新品の制服が爽やかな風に揺らされる。

「……………」

…本当の勇気があれば、ここにはいないだろう。

今まで、友達と呼べる友達はできなかった。

どうして俺は気持ちを上手く伝えられないのだろうか？

ただ話すだけ。

そんな簡単なことが俺にはできない。

…歌うことなら、できるのに…。

春風が吹く屋上で、どこまでも広がる海を見つめる。

「……………っ。」

小さい時、砂浜で会った長い黒髪の人。

あの時、あの人は俺に勇気をくれた。

…決めたんだ…だろ。

俺は歌で気持ちを伝えていくことを。

…でも、どうすれば…。

どうすれば歌を人に聴いてもらえるのだろうか…？

桜の花びらがまた一枚、風に流される。

「今日からもう、高校生…か…。」

……………。

「…君の歌、私も知ってる……………！」
「……………！」

突然、俺の横に人が現れた。

…俺以外に誰もいなかったはず…。

俺の驚いた表情に、はにかみながら彼女は歌い始めた。

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。

あなたーのー笑顔が欲しいから、わたしーはー空を見る…。」

俺の記憶の深くに眠るあの人の輪郭が、蘇ってくる…。

「…。」

「あ、もう行かなきゃ…。

…私の名前は白鳥園歌。

クラス、一緒になれたらいいね！」

偽りのない笑顔でそう言うと彼女は走り去って行った。

「……………」

俺は名前すら伝えられないままその場に立ち尽くしていた。

「キーン、コーン、カーン、コーン……」

予鈴よすずが鳴り響く。

…もう、指定された教室に行かなければならない。

「……………っ…。」

掌てのひらを強く握りしめたまま俺は唇を噛みしめる。
足下あしもとに散れた桜の花びら。

それを無情に踏みつぶす乱雑な俺がいた。

高校生になったその日、俺は屋上で同じ歌を歌う彼女と出会った。

この出会いこそ、今の俺を導いたキツカケ…。

屋上で別れた俺はそのあと同じ教室の隣の席で再び、彼女と会う。

それが、今の俺に…繋つながったんだ…。

10：伝えられた言葉

「ちゃんと計画通りにやること。…ちょっと、あんた聞いてる!」「んー、耳もとでうるさいデスネ〜。ちゃんと聞いてますよ〜。」

「今日の主役は園歌なんだからね! わかってる!？」

「もちろん! …いまから考えただけでよだが……………」

「……………。はっ?」

「このあとご馳走をを食べに行くんですよね〜。…アサみんのおごりです。」

「パキパキッ」

「…、冗談に決まってるじゃないですか〜。……………」

拳^てをならす貴殿院。

…藤林は、…残念そうだ。

俺たちは今、商店街の真ん中で白鳥が来るのを待っている。

…すごい人の数だ。

家族連れやカップル、学生…。

世代を問わず大勢の人で賑わっている。

「そういえばこの名案は誰が提案したの〜?」

「……………時見くんと塚原くんってことになるわね。」

「へえ〜。」

毎年似たようなプレゼントしかあげなかったからね。

今年は画期的なプレゼントだ〜!」

「ふふっ、そうね……………」

園歌……………喜んでくれるといいわね……………」

「……………?」

始まる前からそんな顔は……………らしくないよ……………」

「……………。ごめん……………」

顔を曇らせる貴殿院に声をかける藤林。

……………。

この集まりは白鳥を元気づけるためのもの。

俺たちが、暗い顔をしてはいけけない。

白鳥が本当の笑顔になってくれることが、俺たちの望み……………。

「……………ふっ、そうよね。今日は園歌の誕生日っ! もっと明るくいかなきゃね……………」

「そうそう! それでこそいつものアサミンっ!」

「私としたことが慰められてしまったわ……………。これじゃ、あんたと、

同類ね…。」

「…、どういう意味デスカ？？」

「…ふふっ。さーあね。」

無邪気に笑い合う貴殿院と藤林。

…いつもの2人だ。

この2人に暗い顔なんて似合わない。

こうしてうるさい位にはしゃいでいるのが一番いい。

何気なく笑っている姿。

その笑顔は気付かないところで周りも暖かくしている。

今、俺が微笑んでいるように…。

「…そろそろ園歌が来るころね。」

じゃっ、時見くん！あとはよろしくね！

どうにか、うまくやってねっ！」

「私たちは先に行って場所とってるんで！」

速やかにどこかへ走り去っていく貴殿院と藤林。

俺は1人ここに残る。

今日も降り続ける雪。

その冷たな一粒を静かに数えながら。

俺は、白鳥を…待つ。

今日は、クリスマス…前夜…。

「…遅くなってごめんね。」

「…いや、全然。」

「…みんなはまだ来てないの…?」

「…ああ、なんか少し遅れるから先に行っててメールがきたな…。」

「…そうなんだ。」

「とりあえず、歩くか…。」

「そう…だね…。」

しばらくすると、白鳥がやってきた。

俺たちは空に出た一番星を見つめたまま歩き始める。

…ある場所に向かうために。そして…。

白鳥に、あるものをプレゼントするために…。

「………………。…2人で歩くの、…二回目だね…。」

「そうだな…。」

「前はごめんね。…なんか変なこと聞いちゃって…。」

「いいや。俺の方こそ、…何も答えられなくて…。」

「…ううん。」

「…高校卒業したあとの進路は決まったのか？」

「……………。」

「…そうか。」

「情けないよね…。進む先を決められないなんて…。」

「このままじゃ、留年確定…。」

「……………。」

…白鳥の身体の震えは、この街を包む寒さによるものではなかった。

…「こついつ時、なんて言ったらいいんだ？」

前もそうだった。

俺は何も言えないままただ震えるのを見つめることしかできなかった。

…どつして、こんなにつらいんだ…？

…自分の事じゃないのに……。

「みんなに優しくされている自分が、つらいんだ…。

私はみんなに何もしていないのに、優しく、大切に思われている

…。
大袈裟かもしれない。…でも、…。」

「何一つ、取り柄のなんてない。

何一つ、好きなことなんてない。

…だから、やりたいことが見つからない…。」

「友達に何もしてあげることができない、夢を持ってない人間。

そんな存在がこんなに、暖かい気持ちになっていいのかな…。」

…。
「……………」

……………。

「今日は自分の誕生日なのにね……。
勝手に感傷にひたって……ごめん……ね……。」

……このままじゃいけない。

今日は白鳥を笑顔にするために集まっているんだ……。

そうだ。

……あの話をしよう。

塚原が話してくれた……。

今の塚原に繋がったキツカケを、くれた人の話を……。

「…塚原がバンドを始めたキツカケって、白鳥は知ってるか…？」
「…。」
「あいつが言ってたんだけどな、キツカケは本当に些細だったんだ…。」
「…。」
「昔のあいつは今と違って全然、人と話せなかった…。」
「人と話すことが苦手だったんだってな…。」
「…。」
「高校に入学してかも、あいつは友達が1人もできなかった…。」
「…。」
「でもそんな時、1人だけ声をかけてくれた人がいたんだって…。」
「…。」
「その人は笑顔で塚原に話してくれた…。」
「偽りのない…笑顔で。」
「……………」

無言のまま下を見つめて歩いていった白鳥の足が止まる。
…？

…何かを思いだして…いるのか？

「塚原がその人と初めて会ったのは高校入学式の時の屋上…。」

あいつが1人歌を歌っていると…いつの間にかその人が横に居た。

「……………」
「そこには誰も居なかったはずなのに…。気づいたら、その人のやさしい笑顔があった。」

「でもその時、塚原はその人に何も言うことができなかつた…。」

その人は、声をかけてくれたのに…。」

「その時の塚原の中には悔しさと苦しさがしかなかった。

…悔しい、苦しい。

何でこんなに自分は情けないんだと…思ったんだって…。」

「……………」

白鳥の止まった身体。

その冷たい手に俺は自分の手を重ねる。

…ここで止まったらダメなんだ。
前に進まなきゃ…。

白鳥の腕をやさしく引き、目的地へ向かう。

「その悔しさ、苦しさをこえた先に待っていたもの…。
それは、その人との再会だった。」

塚原は再び同じ教室で、隣の席でその人と会ったんだ。」

「その時、その人は塚原に再び笑顔で話してくれた。」

…今の塚原があるのは、その出会いがあったから…。」

「塚原はその人と再会したとき、一つのことを決めた。」

…それは、あることをその人に伝えること…。」

「話すことが苦手な塚原は歌でそれを伝えるため、バンドを組んだ。」

「……………」

…そう。

それが、今のあいつに繋がったんだ……………」

「……………」

…やっと目的地についた。

…すごい数だな。

さすが…。

…塚原の…最後のライブだ。

「……………みんな？…なんで…ここに…??遅れて来るんじゃないよ…。」

それまで暗かった白鳥もこの状況では戸惑うしかないようだ…。

「あゝ、ゴメンごめん…。それは嘘っ！」
「私たちは先にここに来て場所取りをしてたんだ。さすがに、この人の多さだからね。」

嘘をついたことを笑いながらごまかす貴殿院と藤林。

俺たちの前方に広がる大きな屋外ステージ。
その上であいつが、…準備している。

「…これっ…て…。」
「…塚原の…最後のライブだよ…。」

まだ状況を把握できていない白鳥に俺は静かに伝えた。

「…今年の園歌へのプレゼントはね、みんなで塚原くんのライブを見ることなんだ…。」
「時見くんと塚原くんの提案なんだよ…。」
「俺がこの前、教室で塚原と話しててその時…、塚原が言ってたんだ…。」
「…え…？」

…今日、白鳥に伝えることが…あるって。

……。

観衆の声が大きくなってきた。

…もうすぐ、始まる…。

「あっ、塚原くんが出てきたわよっ！」

「アサみんっ、耳もとでうるさい！見ればわかるでしょ…。」

塚原がマイクをもって何かを言っている…。

なんて、言ってるんだ………？

「…いままで色々なことがありました。

途中で自分がどうして歌っているのかわからなくなったことも…
ありました。

でも、その時支えになってくれた人がいます。

その人は俺のかけがいのない…人です。」

…塚原の声が、震えている…。

「俺たちは高校三年生…。これから先、それぞれの道があります。このバンドも、今日で解散…。その人とも…別れてしまいます…。」

……………。

「今まで俺は人に自分の気持ちを伝えるために歌ってきました…。…でも、まだ…気持ちを伝えていない人がいます。」

…それは、支えてくれた…。
…そう。

今の俺を…、俺にキツカケを…くれた人です。」

……………。

「今日、この場所に、キツカケをくれたその人が来ています…。」

…塚原がこつちを……………見ている…。
隣にいる…白鳥のことを……………。

「…そして今日は、その人の誕生日です…。」

……塚……原……。

「俺はその人に伝えます。
今まで、言えなかった……。
感謝の……気持ちを…………。」

……。

「…ありがとう。」

その言葉が夜空に響いた瞬間、最後のライブが始まった。

よく見てみると空には。

数えきれない星が輝いていた。

輝く星、降り続ける雪、そして…。

…隣で涙を零す白鳥がいた。

光

…。

「……から望む景色」。

…俺は。

好きであり…。

嫌い……だ。

……。

「カチッ」

手探りでポケットの中のライターを取り出し、蓋ふたを開ける。

……。

無意識に胸ポケットから最後の一本を取り出す。

「チチチチチ…」

鼓膜を揺らす燃え盛る音。

白衣が大きく揺れる…。

風にあおられその赤色は、加速していく。

「スーーーーーッ」

指先に灯る小さな炎を見つめながら大きく、吸い込む。

いつ始めたのか…。

手繰たくり探しても記憶の中にはもう…、その断片は見つからない。

「……………」

渋い煙が体内を支配し、奥深くへ浸透する。
胸の中で言い聞かせる…。

過去の自分は不確かで、…曖昧な存在。

「…、フーーーーー」

吐き出した煙は身体からだを包み、やがて静かに消えていく。
不思議に思う…。

そんな自分が今もこうして、この場所せかいにいること…が。

.....。

…もつすぐ、夜が…明ける。

病院の屋上^{の上}から見える二つの空。
それは。
青空と暗闇。

頭上に広がるこの空^{けしき}。

なんで、夜の空は黒なんだ…？

どうして、青いままでいて…くれないんだ…。

俺のいるこの場所^{せかい}では青い空を「朝」と呼び、黒い空を「夜」と呼ぶ。

そう、それは…。

胸の鼓動を「生」と呼び、停止を「死」と呼ぶ…ように。

……。

「スーーーーーッ、ハアーーーー」

燃え盛る炎は灰を生みだし、足下に死骸を散らす。

「夜」が死んで「朝」が生まれる。
「朝」が死んで「夜」が生まれて……………。
そうしてこの場所^{せかい}は、…動いている。

どこまで続くのか…。
一つ、また一つ…。
時を重ねる度に長く、連結していく。

その鎖は円を描き、やがて…繋がる。
そして…。
無限に続くこの「日常」をつくりだす…。

.....。

「スーーーーーッ、ハアーーーー」

足下の死骸は風に出会い、大地へと運ばれる。

毎日.....、同じようなカタチをしている。

だから……。
何も気づけないまま過ぎて……しまう。

貪欲な膨らみは身体からだを溶かし、狂わせる。
数えきれない「日常」を過ぎて……。
それは消え……ない。

大切なものを探しているのに見つけれない。
……あたりまえ……なんだよ。
それは初めから……持っているもの……なのだから。

……。

「スーーーーーッ、ハアーーーー……」

大地についた死骸は、新たな生の種となる…。

……。

…夜が、明けて…いく。

今、見つめているこの朝日は繋げられた…もの。
暗闇が姿を変えて。
再び、こうして俺を迎える…。

笑っても、泣いても、悲しんでも…。
いつでもこの水平線は続いている。
…痛いほど、残酷に……。

…自分がこの場所せかいを嫌つても、憎せいかいんでも、拒んでも…。
何も変わらない。
いつまでも俺の瞳に…過去かけを、見せ続ける…。

.....。

一服を終えた白衣の男は仕事場に戻っていく。

「…………なあ。」

白衣の男は初日^{はつひ}を背に崩れた声で呟く。

「お前はいつまで俺に、その光^{えい}を……………、見せつけるんだ…？」

あの頃の^{おれたち}高校生が見つめていた一時の…幸せ…を。

11：時を刻む音

「浜^こ辺に来るのは…、娘が小さい時に遊びに来た以来…。」

「パシヤ」

この音が鳴り響く度に刻まれていく。
一枚、また一枚…。
見えるもの全てが真実なの…か。

「パシヤ」

今の自分は大切なものを見つめているのに。
未来の自分は瞳をそらしてしまう。
過去の自分は真剣に見つめていたはずなのに…。

「パシヤ」

アルバム 記憶をめくると残されている。

楽しいこと、辛いこと、悲しいこと。

そう、すべて…。

かけがえのない大切な、一枚。

.....。

あの大震災が起きた時、俺は撮らざるしかなかった。

…目を逸らしたい。

必然と映りこむ、変わり果てた世界。

娘の笑顔、高校生、そして街並み…。

それまで溢れていた全てが、切り裂かれた。

破壊された建物、燃え続ける火の海、押し潰されている人間…。

黒煙が空の色を制し、血の匂いが漂う。

鳴り響くサイレンの音。

海に映りこむ死影の残像。

奪われ、壊され、失った…。

自分はわからなくなった。
この目の前に映る、この目の前で倒れている、この目の前で崩れて
いる……。
これが、今、なのか……？
レンズ越しに映る。
見たことのない世界。

願い祈り続けても変わらない現実。
ちっぽけな自分の希望。
嘘……だよな？
きつと夢の途中……なんだ。
……瞳を閉じさせて……くれよ……。

突然すぎる。
誰が望んだんだ？
メチャクチャだよ。
……なんでこんなことするんだよ。
返して……くれよ。

.....。

荒廃した街の中で俺は1人撮っていた。

…現実。

大勢の子供が親を亡くし。

大勢の親が子供を亡くし。

大勢の人が希望を失くした。

シャツタを切る度に胸の底に傷跡が刻まれていく。

震える指先、震える身体、震える唇。

耐えきれない…。

流れ落ちる涙が乾いた地面に溶けるのを見て。

自分も、消えたいと思った。

本当は目を逸らしたい。
でも。

見つめ続けた。
俺が見つめなければ。
…伝えられない。

一枚、また一枚…。
数えきれない写真を撮った。
どれも残酷な映像…。
だけど。
それを撮るのが俺の、宿命だった。

街は歳月をかけ姿を戻していった。
…少しずつ。
しかし、それは塗り固められた偽り。
どれだけ描こうとしても。
もう、前には戻れない。

……。

足下あしもとに広がる砂の欠片を両手にとる。

…娘は覚えていない。

この浜辺で一緒に遊んでくれたあの子たち高校生のことを。

歌を覚えてくれた長い黒髪の彼女のことを。

そして。

1人の男の子のことを…。

あの時と変わらずこの水平線は続いている。
憎いほどに…。
同じカタチ。
俺たちは忘れられない。
この世界は見せつけてくる。

なら、受け止めればいい。
全てを受け止めて。
全部、変えてやる。
そう。
…幸せ…というやつに。

簡単なんだ。
何もかも手にするのは。
…でも。
気付かないうちに。
零れ落ちてしまう。

だから……。
握りしめるんだ。
両手で。
包み込む。
絶対に零さない……ように。

自分の掌の上で砂をやさしく包み込む。

「……………」
お父……………さん？」

振り向くとそこには、制服姿の不思議な顔をした娘が立っていた。

「お母さんが心配してるよ！どこまで買いに行ったんだって！」

「ゴメンごめん。」

「私、わざわざ商店街まで探しに行ったんだからね！」

「わるかったね。」

「お父さんにまかせるといつもこうなるんだからっ！」

「…あはは。」

こうして2人で歩くのは…久しぶり。

「…で、さっきは何してたの？」

「…別に。」

「ふーん。砂をじっくと見てたけどね。」

「…あはは。」

「ま、いいや。ほら、片方持ってあげる！」
「…ありがとう。」

両腕を塞いでいた買い物袋の片方を娘に渡す。

「…なにやってるの？」
「えっ、カメラいじってる。」
「見ればわかる！そうじゃなくて、…まさか撮るの！？」
「うん。」
「えー、いいよ！学校でたくさん撮ってるでしょ？」
「ま、記念にさ…。」

空いた片手で首にぶら下がるカメラを持つ。

「はーあ。一枚だけね。」
「…ああ。」
「早く撮ってね。恥ずかしいから。」
「わかった。」
「…あつ、ちよつと待って！前髪が…っ。」
「3、2、1…ハイ！」

慌てた様子のいい一枚が撮れた。

「今のナシっ！早すぎるわよ！」
「何回撮っても同じだよ。」
「……………」
「…あれ、いい意味で言っただけだな…。」
「…もついいよ。映らない…。」
「…あはは。」

拗すねたこの顔も…かわいいな。

「あつ、また撮ったでしょ！」

「じゃ、お詫びにもう一枚ほど…。」

「自分が撮りたいだけでしょっがっ！」

「バレたか。」

「本当にこれで最後ね…。」

「はいはい。」

…俺は撮り続けよう。

「はい、いいよ。」

「ほんとに？」

「早く！」

「ほんとに??？」

「しつこい…!!」

「…ふふっ。」

俺が見つめているのは…大切なもの…だから。

「パシヤ」

時を刻む音がまた一枚…。

「帰ろうか、園歌…。」
「…うん。」

12：大切なもの

.....。

デスクの上に広がる書類。

専門学校、大学進学、就職……。

どれも生徒の未来が書かれた……大切なもの。

.....。

……あつという間だ。

すこし前に入学してきたと思っていたのにもう……、別れの季節。こうして書類にサインをしていく度に胸の奥に穴が出来ていく。

一つ、また一つ……。

何年経っても、この気持には慣れない。

勝手に目尻が熱くなる……。

「ガタン」

……ダメだ。

気分転換しよう。

このまま筆を進め続けたら感情が破裂してしまう。

手首もだいぶ痛くなっていることだし…。

……。

えーと確か、この引き出しの中に…。

…、今度ここも掃除しておこう…。

…。よいしょっ…と。

「パラパラパラパラ…」

ふふっ。

笑ってしまっ。

こうして高校生わかしの自分を見つめると恥ずかしくて、息苦しくなる。
でも。

…同時に感じるこの気持ち。

懐かしくて、温かくて、柔らかい…。

そう。

まるで昔の自分に手が届くように。

……。

絶対にそんなことはありえない。

だけど。

なんだか、嬉しい…。

.....。

泪が、溢れてきちゃう...な。

「お前も、白川と同じ胸むねに栄養がいけば良かったのにな...。」

急いで零れそうになった雫を堪えとめる。

背後から聞こえる自分以外の声。

それは紛れもなく高校生むかしからの友達...。

「島田あ！いきなり入って来るな！」

「おうおう悪いな。…てか、島田先生って呼ぼうぜっ。校内なんだから。」

「お前はいつも私のこと呼び捨てだろうが！」

「ちゃんと白川、島田、君主にも呼び捨てだぜっ！」

「…、自慢して言うな！」

私の背中越しからアルバムを見つめる島田。

彼の瞳に映るもの。

それは必然と私たちの過去を思い出させる。

「…。」

「…、島田…？」

「…。」

「…、おい…？」

「…。」

「…。」

突然の沈黙。

…彼の掌が力なく震えている。

私は定まらない瞳で見つめる。

「なあ、長原……。」

「……。」
「むかし 高校生の自分から成長できたと思う……か？」

「……。」
「むかし 高校生の自分から変わったと思う……か？」

「……。」
「むかし 高校生の自分から強く、なれたと思う……か。」

私は全ての質問に頷くことができなかつた。
再び目尻が熱くなる自分、掌を震わす彼……。
二つの視線がアルバムの上で、……重なる。

「むかし 高校生の俺たちはどんな存在だったんだろう……な。」

俺にお前、白川に細田に君主。

そして…。」

「……………」

「あたりまえな日常を暮らしていただけなのに。

こうして…。」

再び見ると…、溢れてくるな…。」

「……………」

「あの日がくるまで俺たちは…気付づけなかった。」

「……………」

涙が零れる。

滲む映像。

しかし、それでも過去の現実は、…変わらない。

「アイツと約束した…。」

「……………」

「俺たちの夢は、アイツとの約束そのもの…。」

「……………」

「だから俺たちは今、この場所に…いる。」

「……………」

デスクの隅に置かれた一枚の写真を見つめる彼。
それは…。

私たちが初めて一緒に写った一枚。

「俺たちが夏祭りに行った時のやつ……だな。」

アルバムには刻まれていない一枚。

最初で最後……。

私たちが1人を囲んでいる写真。

「こんなに……笑いやがって……。」

中央に写る青い浴衣を着た彼女に、彼は崩れた声を投げつける。

抑えられない感情がまた一粒。

私たちの目尻から溢れてくる。

「……お前、なんでこれを飾ってるんだ……。」

「……………」

私たちの…大切なものを、
忘れないようにって…ね。

13：月明かりの下の旋律

「お先です。」

制服をロツカに片付け鞆を肩に下げ挨拶をする。

陳列した商品を整頓する同僚の背中がピクリと動く。

まだ仕事その人は俺の声を聞くと同じように挨拶をしてくれた。

「お疲れです。」

笑いながら答えてるものの、その表情は隠し切れていない。

深夜の営業は…眠い。

その言葉は俺ではなく、その人が自身に言い聞かせているように聞こえた。

「ウーーン」

俺は同情をこめた背中を後に店を出る。

透明なガラス越しに漏れる店内の照明。

その細い線先は淡く、暗い帰り道を示す。

「はーあ。」
進路が決まり次に学校に行くのは卒業式の前日。
それまでの間は長期の休み。

前の自分はこの休みの存在にすごく憧れていた。
きっと充実した日々を過ごせるのだと期待していた。
しかし、今は…。

「…はーあ。」
ため息しか出ない。

前と違うことはなんだろう…か？

…バイトの時間が増えたことぐらい…だ。

こうして家に帰って、また明日バイトに行つて、この道を歩いて…。

……………。

「…はーあ。」

みんなと最後に会つたのはいつだっただろうか？

学校が休みなため会える機会がなくなってしまった。

前はあたりまえに話をしていたのに。

今ごろ、どうしているだろうか…？

……………、会いたい。

…飛馬は、走っているだろうか？

…藤林は、笑っているだろうか？

…貴殿院は、頑張っているだろうか？

…塚原は、歌っているだろうか？

…そして、白鳥……………は…。

隣で静かに佇む海に視線で無意識に問いかける。

頬を揺らす冷たい潮風。

陽の落ちた世界で微かに光る月の明かり。

昼間の穏やかな景色は消え沈黙の影が延々と広がる。
見えない足下は引きずり込まれ確実に吸い寄せられていく。
立ち止まるうとしても…とまれない。

鼓膜を揺らす細波の音。

通い慣れている道なのに…どうしてだろう。

胸奥で鳴り響く寂しい余韻。

身体を塞いでも振動するこの不安。

なんで掌を強く、握りしめているん…だ？

瞳を揺らす広すぎる世界。

歩いて歩いても追いかけてくる黒い水面^{みなも}。

…いつも青色で向こう側を見せてくれるのに。

今は、もう一つの素顔を見せている。

どこまでも続く、果てしない闇…を。

隣で静かに佇む海は俺を虚しく見つめた…まま。

「……………、…？」

漆黒で埋め尽くされた砂浜から何か聴こえてくる。

こんな時間に誰かが…歌っている？

その正体を心の奥で探してみる。

…聴いたことのある旋律。

耳を澄ましてみるとそれは確信へと変わる。

この…歌…は。

気づくと冷たい地面に沈んだ足下は導かれるように、動いていた。

「…！き、君主先生…！？」
「久しぶりだね、時見くん。…バイト帰りかい？」

黒い空に映る月明かり。それは黒い水面へ溶け込み、海を揺らす。

「どうだい最近は？」

「バイトだけの毎日ですね…。」

「ふふっ、かなり疲れているね。」

「…はい。先生はどうしてここにいらっしゃるんですか…？」

「ちよつと散歩のついで…にね。」

先生は胸ポケットから何かを取り出すとそれを口にくわえ、ライターを取り出した。

「…元気ないね〜。園歌ちゃんに会えなくてつらいのかい？」

「…！！！そ、そんなわけないじゃないですかっ！」

「はははっ、冗談じようだん。」

闇に堕ちた水平線を見つめながら、何かを懐かしむように声を紡ぐ先生。

「時の流れは早いな……。ついこの前、夏祭りに会ったと思ったらもう卒業の季節……か。」

「そうですね……。俺自身、卒業する実感があまりわかりません。」

「……はははっ、誰でもそんなもんだと思うよ。」

先生の指先に灯る炎は静かに燃え続け、次第に煙草を短くさせていく。

「俺の高校生むかしの時も時見くんと同じだったな。」

気づいたら季節が通り過ぎて自分は何か変わったのかな？って思っていたな……。」

「……先生は長原先生、島田先生、白川先生、細田先生と親友なんですよね？」

「……、誰からその話を聞いたんだ？」

「長原先生が言ってたんです。文化祭の時に話す機会があってその時に……。」

「……なるほど……ね。」

「あつ、先生ちよつと教えて欲しいことがあるんですけど……。」

「ん？」

短い煙草を惜しみながら吸う先生の頬を見つめ俺はあの事を聞いてみる。

「先生が高校生の時、長原先生、島田先生、白川先生、細田先生以外に仲の良かった友達っていますか？」

「……、……。」

「長原先生のデスクに高校生の頃の先生たちが映った夏祭りの写真が置いてあったんです。」

「……。」

「写真には6人写っているんですけど残りの1人がわからないんです。女の人で青色の浴衣を着ていて……。」

「……。」

先生の顔から笑顔が消える。

吸い終えた煙草を黒い水面へと押しつけ炎を沈下させるその姿はなぜか…。

力弱く、見えた。

「…時見くん、見たくなくても見えてしまう…。」

そんな記憶は…あるかい？」

「見たくなくても見えてしまう…？」

「…そう。たとえ、瞳を閉じたとしても映り込んでくる…。」

そんな、記憶…。」

「……………」

空に浮かぶ月を見つめたまま先生は再び、歌い始めた。

「この歌って塚原がライブで歌っていた歌…ですよね？」

「…そう。実はこの歌、俺が高校生の時にも…聞いたことがあるんだ。」

「…え？」

「不思議だよ…。まさか再び聴くなんて…ね。」

この歌は俺の友達…、そう。

青色の浴衣を着た…、アイツが昔、海でよく歌っていたんだ。」

「…アイツ？」

歌い終わると先生は流木に腰を下ろし、再び胸ポケットから煙草を取り出した。

「スーーーーーッ、ハアー…」

…アイツはいつも海で空を見上げていた。

長い黒髪で、歌を口ずさんで、青色が大好きで…。

ただ、それだけの女の子だった…。」

「…、…。…？」

先ほどと違い先生の指先の炎は速く、煙草を灰に変えていく。

「俺とアイツと長原は仲が良くてよく高校に一緒に通っていた。」

その時のアイツの行動といったらもう予測不可能。ふと後ろを振り返るとアイツがいない…。

どこに行ったかと探してみると海で歌を歌っている…。

…ふふっ、まったくもう…な。」

足下に散れたその残骸を見つめたまま先生は寂しく笑う。

「その歌が聴こえると俺たちはため息をつきながらも海に向かうんだ。」

そのまま学校に行くと後で泣き始めるからな…。」

潮風が強く俺たちの身体に押し寄せる。

水面の月は揺らされ崩れたその衣は眩く黒い空に反射する。

「アイツが歌うとよく子供たちが集まってきた。
懐かしいな…。」

俺と長原もよく子供たちと遊んでいた…な…。」
煙草の炎が激しく燃え、消える…。」

俺は先生の弱い声を聞きながらそれを…見つめる。

「塚原くんがアイツと同じ歌を歌った時…、嬉しかった。
高校生まのしゅんに戻れたような…気がしてね。」

「…。」

その言葉を聞いた瞬間、急に頭の中で何かが映り始めた。
…なんだ？これ…は………………。

俺と手をつなぐ小さな女の子の姿。

…薄く霞かすんで、おぼろけな輪郭…。

それは、はっきりと蘇らない。

その子も歌を歌っている…。

この…歌…は……………。

空を見上げると夜明けが近づいていた。

月明かりは徐々に姿を消し、ゆっくりと青色に変わっていく。身体を包む厚着の服に触れてみると、指先が凍ったのだった。

「ハックシュンツ！」

「はははっ、ごめんね。」

「もう、帰ろうか。」

最後の一本を吸い終えた先生は明けていく空を見上げ、歌を口ずさむ。

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。」

あなたーのー笑顔が欲しいから、わたしーはー空を見る…。」

世界ーは交わり出会うだろう…。」

偶然という名の必然で…。」

「この歌、白鳥も歌っているんですよ…。」

いい歌…ですよね。」

なんだか懐かしい気持ちか…します。」

なぜかとても嬉しそうな顔をしながら先生は俺を見つめる。

「この最後の台詞、アイツの口癖だったんだ…。」

バイトの帰り道。そして太陽は空を照らし、海を包む。

14：偽りの日常

「ガラガラガラ……、ガタン」

ドアを開けると広がる無数の机と椅子。

温かさを失くしたそれらは誰もいないこの空間ですつと時が過ぎるのを待ち続けていたのだろう。

「スサー……」

机の表面に指を触れると薄く埃ほこがついた。

こすり合わせるとそれは奥深くへと染み込み、やがて指先を黒色に染めた。

掃除用具入れから顔を覗かせるほうき、剥がれかかっている掲示物、乱雑に束ねられたカーテン……。

天井を見ると電気がついていないことに気づいた。

「カチン」

小さな音が鳴ると同時に1人では明るすぎる蛍光灯の光が身体からだを照らしていく。

歩くたびにきしむ床に映るその淡い光を見つめたまま意味なく歩きまわる。

「カチツ、カチツ、カチツ……」

黒板の上から聴こえる時計の音。

誰もいない空間でも鳴り続けるそれは今もなお絶えず時を進め続ける。

「ギギギーツ」

そんな働き者を乾いた視線で見つめたまま自分の席に着席する。

……飽きないの？ だろうか……。

前かがみになり頬を両手で支えたまま、それを見つめる。

……。
窓ガラスに頬を黒く染めた自分の顔が映る……。

「……………」
黒板を見渡せてしまう…。

いつも麻美とミレアが前にいて顔を動かさないと見れない。
でも今は…。

「……………」
空^{から}つばの教室…。

いつも塚原くんが号令をかけ、みんな一斉に椅子から立ち上がる。
でも今は…。

「……………」
窓越しに潜む灰色の校庭…。

いつも速^{はや}さんが先頭でみんなと走った。
でも今は…。

「……………」
右隣にある誰もいない机と椅子…。

いつも…彼と一緒に…。
でも今は…。

あたりまえに学校^{こい}で話していた。

あたりまえに学校^{こい}で笑っていた。
あたりまえに学校^{こい}で過^こせていた。

繰り返す毎日あたりまえに…感じていた。
でも今は…。

何も…ない。
学校が長期の休みになり訪れたのは1人だけの日々。

昔の自分はこの存在^うを羨^{うらや}ましがっていた。
何も…知らずに。

今、ここにいてようやく気付いた。

…そう、私が掴んだものは。

.....。

偽りの日常だと。

「そんな辛気くさい顔をしてたらいつまで経っても卒業できないぞ
く、し・ら・と・りっ！」

ほら、始めるぞー！」

勢いよくドアが開くのと同時に教卓の前に大柄な教師が立つ。
その人は分厚い紙の国語辞書を持ち、私に近づく。

「…ふふっ、隙^{すき}ありっ！」

「ベゴンッ！」

鈍い音と共に頭に渋い痛みが走る。

…窓ガラスに映る二つの人影。

そこには優しく微笑む長原先生と沈んだ笑顔の自分が映る…。

「よし、今日はここまでにするぞ…白鳥。」
私は1人、休日の学校に補習を受けに来ている。
結局、私は進路を決めることができず留年が確定してしまった。
テストの成績が思わしくなく、課題も残している…。

「……………」
私が目標を持っていればこうにはならなかった…。
…いいや。

最初から自分には目標など何もなかった。
こうなることは…わかっていた。
みんなには目標がある。

私には…ない。
…そう。
ただ、それだけ…。

「……………」
何も無い人間が何かを掴むことなんてできない。
…わかつている。
私にも何かあれば踏み出すことができる。
そう…信じている。

強く自分を変えたいと思える何かが必要。そして、それを探すこと
が必要。つまり、自分を見つめることが必要…。
窓に映る自分の顔を見つめるのは訳が違っ…。

「……………」
…わからない。
自分はどうしたらいいのか、どうしたいのか、どうなりたいのか…。
答えは自分が持っているはずなのに見つからない。
…見つけられない。

……。

考えれば考えるほど底に沈んでいく。

手を伸ばしても誰も手を差し出してはくれない。

…あたりまえだ。

掴みとるのは自分のこの手なのだから…。

「ギギギーッ」

…帰ろう。

ここに座っていてもどうにもならない。

…。

いつになったらみんなのようになれる…のか？

いつも学校で一緒にいた存在。

自分もその輪の中に…いた。けれど…。

みんなみたいにはなれなかった。

みんな…すごいよ。

みんな…、会いたいよ…。

……。

隣の机にまで広げていた教科書とノートを鞆にしまい席を立つ。

………そう。

いつも隣に彼が…いた。

「バンッ！」

「っ！……！！！」

突然、両肩に衝撃が走る。あまりの強さに私はふらつき、バランスを崩した。

「…おっと、危ない。」

驚き縮まった身体はその声とともに優しく何かを受け止められた。

「…先生……………、やめてください…よ。」

「いや〜スマンな、まさかこんなふうまくいくとは…。」
窓ガラスに映る自分を見るとそこには虚ろな目で先生を見つめる自分
分がいた。

「白鳥…。このあとちょっと、いいか…。」

「……………」
先生は微笑み顔から真剣なまなざしになり、静かに私の隣の席へと
座る。

…そう。

彼の席に…。

「……………」
「……………」

私の瞳を一直線に見つめる先生。

その^{たんたん}耿耿とした鋭さに私の腕は再び椅子を引き出していた。

……………。

「…ふふつ……………」

ちらつく蛍光灯が胸の鼓動と同調していく…。

「白鳥は最近元気ないぞ。時見に会えなくてつらい……か？」

「……！！そ、そんなわけ……ないじゃないですか……。」「

「はははっ、冗談じょうだん。」

私はな、生徒が考えていることはなんでもわかってしまうのだよ。

「

……、。」「

「見るからに悩んでる……って顔だぞ、キミは。」

「……。」「

「まあ、1人だけ留年したことを気にしているか、これからの自分を恐れているかのどちらか……。」

白鳥の顔は……後者だ。」「

「……。」「

完璧な解答に私は沈黙するしかなかった。

「白鳥、ちょっと笑ってみな……。」

「……、……？」

「いいから。」

「……はははっ。」

「……。」「

「……？。」「

突然の注文に私は無理やり笑ったのだった。

……そう。

偽りの笑顔……で。

「…ダメだ、だめすぎる…。」

もつとこうな、とびつきりにいかないと。例えば…。」

こういうふうには…。」

「…！ふえっ、ふえんふえい、はへへふははひっ…！」

…っ！今、先生の指が口の中に入りましたよっ…！」

「ふははははっ！その調子だ…！」

「…！！っ、笑ってません！ふざけないで下さいっ…！」

「……………」

ふざけてなんていないよ…。白鳥…。」

ちらつく蛍光灯に先生の強い言葉が反射する…。」

……………」

「…白鳥、他の人間と自分の存在を照らし合わせているだろ…？」

「……………」

「みんなみたいになるにはどうしたら？」

みんなみたいにすごくなれるのか？」

みんなみたいに…。」

…その幻想は…捨てな。」

「……………」

「白鳥の周りには数えきれない可能性がある。

たぶん、今は見えていないだろう…。」

見えないときにその幻想は現れる。」

「……………」

「その幻想は逃げてかんがえいる証拠。

ずっと、つきまといてくる。

自らをみずか遮るかくように…ね。」

「…。」

「逃げて避けて拒んだ先にある場所。

そこに居るのは弱い自分。

…そう、何も変わっていない自分…。」

「…。」

「白鳥…、今の自分をどう思う？」

「…。」

「逃げていない、避けていない、拒んでいない…。」

…うん。わかってるよ…。」

痛いほどに…わかる。」

「…。」

「でも、今の自分は何かを失くしてしまった…とは思わない？」

「…。」

「それに気づけなければずっと…このままなんだ…。」

…気づける…かな？」

「…。」

「…、私がさっき言ったこと覚えてる…？」

それが答え…なんだ。」

「……………!」

「…そう、笑顔でいること…だ。」

先生は首元から首飾りをはずし、私にそれを手渡す。

「これは、お守りなんだ……。」

「……。」

「昔、私たちが親友に渡したものの。」

でも結局、……。」

「……。」

「これには私たちの高校生むかしの記憶が刻まれている。」

これの持ち主だった人はいつも……、私たちに笑顔をくれた。

……白鳥にも、いつまでもそうでいて欲しい……。」

私はそのお守りを受け取った瞬間、なぜか心から笑えた。

「…うん。いつものいい笑顔だ…。」
先生は何かを懐かしむように私を見つめていた。

…「じのお守り、どこかで見たことが……。」

15：奈落の道

「ガサガサガサ……」

両側に立ち並ぶ商店の数々。

両腕に握る買い物袋が鳴らすその音は私の身体からだを揺らし、足下あしもとの薄紅色の舗道へと消えていく。

今日もいい天気……だ。

「ガサガサガサ……」

仕事が休みでやることなく生活に必要な食料を買い出し、一日が終了する。

食事を作り、掃除をし、洗濯をして……。

このジャージもそろそろ洗わないとだ。

「ガサガサガサ……」

このまま進むと坂があり、坂を下ると海辺が見え、その近くに私の家がある。

この道は高校の通学路であり、普段は多くの学生で溢れている。

高校生むかしの自分もこの道を歩き、高校に通っていた。

ここを通ると、懐かしさと同時に別の感情が胸の奥に蘇る。

意識して思い出していないのに無理やり掘りおこされる記憶……。

「……………」

「ゴロンッ」

立ち止まった自分の背中に何かがぶつかる音。
振り返るとそこには何回もお辞儀をする人。
この丁寧な言葉使い……は……

「……！す、すみません。前をよく見ていなくて……。
……、……！」
「……！……！」

学生のいない通学路。
そこには、ぶつかったことを謝る細田先生と買い物袋の中の割れた
卵を見つめる自分がいた。

「白川先生もお買い物ですか……？」

「……ええ、まあ……。」

「……。」

「……本当にすみません。私の不注意で……。」

「……いいえ、私があんなところで立ち止まっていたのが悪いので……。」

「……白ちゃん……。」

「……。」

「……あつ、す、すみません。つい、昔のあだ名で……。」

「……ふふっ、久しぶりに聞きましたよ。私のあだ名……。」

「……細田先生は、いいんちよー。でしたね……。」

「……恥ずかしいですね。この歳でこのあだ名は……。」

「……結構、似合ってると思いますけどねその眼鏡が……。」

「……眼鏡？」

「……ええ、掛け方が……。」

「……。」

「……ふふっ……。」

慌てて逆さに掛けていた眼鏡を掛け直す細田先生。

「……ひどいです……、白ちゃん……。」

「……いいんちよー、そんなに落ち込まなくても……。」

「……。」

「……。」

「……ふふっ……。」

「…ふふふつ。」

「ふははははっ！…！」

じつとお互いを見つめた後、私たちの口元から笑いが零れた。

高校生の私たちはこうして笑っていた。^{むかし}

どんな話でも楽しくて、面白くて、夢中だった。

今の私たちが笑えていないということではない…。

…昔と変わってしまった。

今はもう、みんなあだ名で呼びあつことは無くなった…。

「白ちゃん、あの3人のあだ名…覚えてます…？」

「ええ、もちろん…。」

「なーちゃん…。」

「尋くん…。」

「そして…。」

「あの3人は本当に仲がよかったですね…」

「高校に行く時も、帰るときも…。」

「…ええ。」

「なーちゃんと尋くんとあの子。」

「あの3人と一緒に私たちもいた…」

「……………」

…そう、みんな一緒だった。

私と細田先生、長原先生と君主くん、島田先生。
そして……。

どこにいても同じだった。

何も考えずにただ…。

笑えていた。

「あの3人、…三角関係…だったんですね。

なーちゃんは尋くんのことを好きで、尋くんはあの子のことが好きで…。」

「……………」

「あの子が歌っていたあの歌も、尋くんへの恋歌だったのかな…って思います…」

「……………」

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。

あなたーのー笑顔が欲しいから、わたしーはー空を見る…。

世界ーは交わり出会うだろう…。

偶然という名の必然で…。」

「……………」

.....

.....

.....。

声が聴きたいから海を眺めても。
笑顔が欲しいから空を見ても。
何も起きない。

今、私がこの坂道から眺める海は。
何もしてくれない。
今、私がこの坂道から見つめる空は。
何もしようとしなない。
...そう。

あの頃にもどれない。
もうここは.....

「白ちゃん、あの子との約束……」

「……覚えてますか？」

海辺から冷たい風が吹き荒れる。

「白川先生、今日はすみませんでした。

色々のご迷惑をおかけして……」

「……いえいえ、こちらこそ。

私はこっちの道なので……。」

「…………久しぶりに、楽しかったです……」

「……ええ、……また…………」

細田先生の瞳に浮かぶその泪は、私と同じ……だった。

……。

うみねこが青空を舞い、影が水面へと刻まれていく。
鳴き声がいっまでも反響し、私に些細な希望…を与えてくる。
…。

あの翼があれば、私も…

あの子と私の記憶。

あの子と私たちの記憶。

あの子と世界の記憶。

残されたのはあの子ではなく…記憶。

私がいつも思い返すのはあの子ではなく…記憶。

心の中に住みついた偽物の…記憶。

本当は何なのか…

真実は何なのか…

正しいのはどれなのか…

誰か…教えて欲しい。私に…教えて欲しい。答えを…教えて欲しい

……

この永遠に続く道から抜け出す方法を。

あの日から今に至るこの道のり。

そう、私がいるのは…

奈落の道。

背中を突き刺すその青色は今日も…昔と変わらない

16：悠久の旋律

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。
あなたーのー笑顔が欲しいから、わたしーはー空を見る…。
世界ーは交わり出会うだろう…。
偶然という名の必然で。」

きらめく水面みなもに映る悠久の旋律が、彼女たちの眠りし過去の記憶を
呼び覚ます…

「話、聞いてくれる…。私が園歌と出会う前の話…」

「小さい時の私は外に出れなかった。部屋の窓から外の景色を見つめる毎日…」

「……。」「
「いつも海辺を眺めていた。…このどこまでも続く…水平線…を。」

「昔の私は外の世界も家の中も同じものだと思っていた。…海と空を見つめても何も感じなかった。」

「……。」「
「でも、ある日を境にしてこの青色が…きれいだと思えるようになった…」

「……。」「
「その時、歌が聞こえてきた

「そう、海辺から…」

「……。」「
「あの時の歌とこの歌…同じなんだ。

「不思議よね…」

「……………」

「…聞いている……………」

「…ねえ……………」

「ザーーーー、ザーーーー、ザーーーー……」

この海を越えた先に私が住んでいた場所がある。

この街に来たのは高校一年生の時……。

……いいや、小さい時にも来た。

「ザーーーー、ザーーーー、ザーーーー……」

あの時も父親の仕事の都合で訪れていた。

……たった一日だけ。

あの日の出来事は……忘れない。

「ザーーーー、ザーーーー、ザーーーー……」

……蘇る。

あの日も同じようにここに来ていた……。

そう、ここで……。

「ザーーーー……」

あの人に会った……。

あの日、私はこの街に翻弄ほんろうされていた。

…言葉が通じない。

右も左もわからない、どこに何があるのかわからない、全てが初めて…。

親の言うことを聞かなかった自分が悪い。

勝手についてきた私が悪い。

どこまでも進んでしまう気持ちが悪い。

そんな後悔だけが私を包んでいた。

悲しみに溺れた心を励ますものは何もない。

大きすぎた世界に小さすぎた自分の足先が虚むなしく映る。

立ち止まった私はもう歩けなくなっていた。

…その時だった。

海辺こしからこの歌が聞こえてきた。

傷ついた身体を、心を、私を包む旋律。

…子守歌のようにやさしく教えてくれた。

私はあなた1人ではないと、語りかけるかのように…。

.....。

ひとがいっぱいいる。

わたしよりせのたかいひとがたくさん。

どうしてみんな、おなじふくをきてるのかな…？

「.....。」

おおきいおにいちゃんとおねえちゃんがいっぱい。

わたしもおおきくなったらこんなふうになれるのかな？

おともだちたくさんつくって、はなせるかな…？

「.....。」

いろんなこえがきこえる。
みんなわらってる。

わたしはわらえてるかな……

おでこが、あついよ。

からだが、ふるえるよ。

めから、なにながれるよ。

これがわらう……ことだよね……？

「……………」

どうしてみんな、わたしのことをみるの？

わたしどこかへん……かな……。

なんでそんなかおをするの？

ちよつとせがひくいけど、おなじだよ。

わたしもみんなと……おなじだよ。

……………。

ねえ……。

……なんで？

「この迷子、どうする？」

「外国の子……みたいね。瞳めが碧あおいし……。」

「誰か交番に連れて行けよ。」

「先生に言ったほうがいいんじゃない？」

「お前、どうにかしろよ。」

「……やだよ、関わりたくないし……。」

「さっきからずっと泣いてるわよ……。」

「どうすんだよ？このまま放っておくのか……？」

「てか、もう授業始まるぞ……。」
「やべっ、俺たちもう先いくぞ〜！」

「……………」

おはなししてる。

なんておはなししてるのかな…？

…わからないよ。

おみせがいっぱいある。

たべもののいいにおい、きれいなおはながさいてる、かわいいおにんぎょうがある…。

「……………」

わたしとおなじくらいのがいる。

…？なにか、かっでもらってる。

いいな…。

…わたしもおきなクマさん…ほしいな。

「……………」

あのこはパパとママといつしょ。

わたしはパパとママといつしょ…じゃない。

パパはおしごと。ママはパパといつしょ。

わたしだけ…なかまはずれ。

「……………」

パパとママはわたしにいいこにしててっっていった。
でも、わたしいいこしてない。

いうこときかないでついてきた。

…だって、つまんないもん。

ひとり…なんて。

……………」

ねえ…。

…なんで？

「1人であの子、どうしたのかしらね？」

「父親も母親もない…な。」

あんな小さな子を1人にさせるなんて考えられない…。」

「…ねえ、あのこにもおおきなクマさんかってあげて…」

「あの子は、うちの子じゃないからダメ。」

「…お、あの店でちよっと食べていこう。」

ほぐら、おなか空いただろ……………」

「……………」

おはなししてる。

なんておはなししてるのかな…？

…わからないよ。

すごいさかみち。

ここはさっきのぼった。

こんどはおりののか…。

「……………」

だれもない。

さっきもいなかった。

…いいもん。

わたしさみしくないもん…。

「……………」

きれいなうみがみえる。

きれいなそらがみえる。

でも、おうちはみえない。

わたしのおうちって、ちいさい…な…。

「……………」

とりさんたちがいっぱいとんでる。

どこに…いくのかな？

ねえ、わたしもいっしょにいっていい…？

……………、どうしていっちゃう…の。

……………。

ねえ…。

…なんで？

「クウア——————」

「……………」

おはなししてる。

なんておはなししてるのかな…？

…わからないよ。

……………。

おはなが、むずむずする。

おくちのなかが、しょっぱい。

めが、ほっぺたが、くちびるが…。

ぬれてる。

ここはどこ…なの？
わたし、わからない。
もう、あるけない…よ…。

……。

「きーみーの声が聴きたいから、ぼくはうーみーを眺め…。
あなたーのー笑顔が欲しいから、わたしーはー空を見る…。
世界ーは交わり出会うだろう…。
偶然という名の必然で。」

「……………」

おねえちゃんは……だれ？

「こんなところで泣いてどうしたの？」

……お友達は？」

「……。」

「おうちはどこかな？」

「……。」

「お名前は、なんていうのかな？」

「……。」

「うーん、とりあえず交番に電話してっ……と。」

「……。」

「あ、はい……、はい……、はい……、そうですか！

わかりました失礼します。」

「瞳めが碧いから間違いない…よね。」

お名前は…藤林 ミレアちゃんっていうのかな？」

「…ミレアちゃんのパパとママが心配して探してるって。」

「いつまでもそんな顔をしてたら帰れなくなっちゃうぞ。」

「よし、おねえちゃんが幸せになるおまじない…かけてあげる。」

「…ふふっ。」

……。

「やっと笑ってくれたね…」

「…さあ、行こうっ！」

おねえちゃん、わたしと、て、つないでくれるんだね……

.....。

「ミレア.....。」

「ミレア.....？」

「ミレア.....！」

「？」

「あんた私の話、聞いてた？」

「.....話？」

「.....、あきれたわ.....。私の不思議体験談をことごとく無視するとは.....」

「アサみんはもともと不思議な生き物だから別に.....」

「ベシッ！」

「…っ、痛いデスよ、冗談に決まってるじゃないですか……………」
「お金使わずに遊びたいって言ったのはあんたでしょうがっ……!!」
何なのその態度は！
もういいわ……!!遊ばないっ……!!……!!」
「わ、私もちよつと昔の事を思い出していたのですよ……」
「ピ。ピ。ピッ」
「あ、あれ…アサみん？」
「…あ、もしも塚原くん？ちよつと今空いてるかしら……………」
話があるんだけど……」
「目には目を、歯には歯を、無視には無視を…デスカ……………」
「悪いけど頼んだわ…。」
…またね」
「ア・サ・み・ん……………」
「……………もー…うっ……!!…うっとおしいわね……………」
何なのそのわざとらしい笑顔は……」
「何を話してたんですか……………」
「ヒ・ミ・ツ……!!」
「そんなこと言わないで教えてくださいよ。」
あ、ジューズおごりますよ！ささっ、行きましよう……!!」
「ちよ、そんなに引つ張らないでもいいでしょうが……」
「ミ、ミレアツ……!!」
「ふふっ、キコエナイ……………」

……………。

あの人が何を言っていたのかはわからない。
…でも。
あの笑顔は私に教えてくれた。

そう、幸せになるおまじない…を。

17：海風と彼女と紐靴と

「ザーーーーー……」

汗が流れ、体をきれいな水滴が包んでいく。

手で脚あしをやさしく揉もみ、疲労が残らないようにする。

今日も全力で走った。

…明日に備えて今日は少し早めに寝よう。

「ザーーーーー……」

…塚原くんは歌に関わる仕事。

…時見くんは漫画家。

…麻美ちゃんは美容師。

…ミレアちゃんは通訳。

…園歌ちゃんは……

………。

「ザーーーーー……」

みんなと別れてもう数カ月。

その間に私はたくさん走った。

もうすぐ、みんなも走りだす……

…たか高みに、行くために………。

「キュイツ、キュイツ、キュイツ……」

…そろそろ、出ようか…な。

「ボワンッ」

このベッドは硬い…。

指で押すと弾力の強さが確認できる。

やさしく包んではくれず、起きたら体の節節ふしふしを痛めている…。

爽快な朝を約束されたのはもう過去の話…。

「…。」

言葉話してもなかなか言いたいことが通じない。

あらかじめ勉強した努力が水の泡。

結局は習うより慣れ…。

「…。」

…食事も困った。

味や材料の違い、どのお店に何が売られているのかなど…。

…料理を作り食べてみると何かが違う。

残さず食べるのが私の鉄則…。

「…。」

自分のことは自分です…というあたりまえのこと。
私1人だけの生活…。

全て、自分の足で進まなければならない…。

「ポタツ」

…髪、もう少し乾かさないと……………

「シュツ、シュルルルル…」

この鞆もボロボロになってしまった。

…仕方がない。それが時が経つということ…。

…？……………、タオルがない。洗濯してこの中に入れたはず…。

……………、……………。

手のひら程の小さな紐靴

その傷ついた衣に彼女の髪先の一粒の雫が

やさしく、溶け込む…

…なんでこれ…が……………？

私、この靴シューズ入れた記憶おぼえない…

「ヒュー……………」

…玄関の片隅にあった幼児用の靴。

最後に見たのは体育祭に行く時…。

体育祭が終わった後、そのまま空港に向かった。

…どうして……………？

お母さんが入れた…のだろうか…。

「ヒューーーーーー…」

私が自分で入れたのを忘れていただけ？

仮にそうだとしてみてもなぜ、入れたのか…。

大きさが小さすぎて足が入らない…。

持つていく理由がない。

…使い物にならない靴。

「ヒューー、ヒューー、ヒューー…」

この靴を履いたのはたった一度だけ。

あれは確か幼稚園の運動会の時…。

それ以来、履いた記憶がない。

なぜ、履かなくなった…のか…。

……………。

思い出せない。

気づいたら玄関の片隅で埃をかぶっていた。

小さくて、傷ついて、ボロボロで…。

…昔見た形をとどめたまま。

何も変わって…いない。

…とりあえず、ここに飾っておこう…かな。

「ヒューーーーーー…ヒューーーーーー…ヒューーーーーー…」

「っ！！！！」

海風が彼女の身体からだを包みこむ
部屋の中、開かれた窓から見える海と空
そして、一粒の微かな記憶…

…？何か頭の中…で…
…なんだろう…、海辺を歩いている…？
…大きい男の人が、この靴を持っている…。
…私がその人と手を…繋いでる…

…？何か聴こえる…。
…黒髪の長い女の人が…歌ってる…
…この歌、どこかで…
…っ！！！！！

「ヒューーーーーー……」

暗闇に堕ちた群青の世界

行方を知らせないその海風はやがて
どこかへと消える……

「うまく走れてる……か？」

「うまく走れることなんて……ない……」

……でも、楽しいよ。

もう、何も考えずにただ全力で走れるから……」

「以前のお前と今のお前、違うな……」

「……？」

「姿は見れなくても伝わってくる。

……その声……で。」

「…声？」

「…俺がお前と一緒に帰った日の事、覚えてるか…」

「…、もちろん。」

あの黄金色こがねいろが見えた夜の日…」

「そう…、あの時のお前の声は…迷っていた。」

でも、今は突き抜けた、…真つすくな…いい声だ。」

「…あの日を越えることができたから今の私がいる。」

迷っていた私を導いてくれたのは、…塚原くん…だよ。」

「俺が飛馬を導いた…か…。」

…俺はただお前の隣にいただけ。何もしていない…。」

「…ううん。あの日、一緒にいることができなかったら私…。」

違う道を進んでしまっていたと思うんだ…。」

もう一つの…道を…。」

「本当にありがとう…ね。」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………で…でっ、塚原くんどうして電話を…」

「……………」

「……………あ…ああ、ちょっと頼みごとを受けてな…」

「……………頼みごと？」

「…飛馬、突然で悪いが今週末に日本こに来れる…か？」

「……………」

「俺たちの卒業式がちょうど今週末にある。」

その前日に貴殿院がみんなが集まりたいと言ってな…。」

「……………」

「貴殿院が飛馬の携帯番号を知ってる俺に、お前が来るようにどう

にか説得してくれ…と頼んできてな…。」

「……………もう今週末…か。」

「……………」

「…？」

「…う、うん。」

ひとり言…」

「時間も費用もかかりすぎる…。」

「説得してくれと頼まれたが俺はこれ以上…何も言わない。」

「飛馬の意思で決めることだからな…。」

「…。」

「また今週末の前に電話する。その時に答えを教えて欲しい…。」

「……………、飛馬…？」

「…え、あ…うん。」

「急な話で悪い。」

「お前が来ない場合は俺が適当に話をつけておくから心配しなくて

いい……………」

「…ふふっ、ありがとうね。」

「でも大丈夫だよ…。もう答えは、決まっているから…。」

「……………、え？」

「…私……………」

……………。

…行くよ。

窓辺から向こう側を望む小さな紐靴
それを静かに見つめる彼女
そして、海風が…また

「…塚原くん、あの歌聴かせてくれない……………」
「……………」
「…どうした…？突然…」

…。

ちよつと…ね。

暗闇

フェンス越しに見える世界

漆黒の海

暗闇の空

俺はこの景色が

…嫌いだ。

「カチッ」

ここに来るのはあの日以来。

あの日を境に…来ていない。

…いいや……………。

来るのを避けていた…

「チチチチチ…」

あの日、ここから見えた世界が今の世界…。

…違う。

あの日、世界は終わりを迎えた。

今、見つめているこの水平線は…
偽物。

「スーーーーッ」

あの余韻がまだ反響する。

…聴きたくない…のに。

全てが奪われていく光景。

いつまで俺は世界を見つめなければならぬのか。

「……………」

弱すぎる自分が存在する…意味…。

あの日、何も出来なかった。

…、何もかも…

失った……………。

「…、フーーーーー」

あの日、俺はそのまま消えたかった。

自分が存在する…意味…は……………ない。

大切なものがわからないまま消えていく。

それを…

望んでいた。

「……………」

全てを捨てる。

姿も、命も、世界…も

自分を否定して…

そのまま…

……………。

世界に弄ばれ沈んでいく
それが人間
誰も逆らうことはできない

自分が消えればすべて終わる
もう、何も見なくていい
…そうだ
消えてしまえ………

でも、俺は消えれなかった
…ここで交わした約束が…
………… アイツの側にいたことが…………
…俺を消せなくした

どうしてだ
なぜなんだ
お前は俺を…
なあ、教えてくれ……………

俺が今、世界にいるのも

偶然という名の必然………なのか…

「…君主、吸いすぎだぞ…」
「……………」。

暗闇に堕^おちた高校の屋上
沈黙に熟れた白衣が
残酷な夜風に揺らぐ…

「夏祭り以来だな…

…長原。」

「煙草を吸う医師とはずいぶんと…不良になった…な。」
「…違う…な。」

「…暗いわね。」

「夜だからな…」

「冗談のつもりか…君主」

「……。」
「私にそれは通用しないぞ……」
「……、隠すの下手だな……」
俺は……。」
「……隠せないんだよ、私の前ではな……」
「……。」
「私たちは昔からの……親友……だから……な。」

「……みんな、元気……か？」
島田……先生、細田先生、白川先生……
みんな元気よ……」
今は高校が休みで会えるのは少ないけど……ね。」
「……お前の話の中でしか、みんなに会えない……」
「……俺は高校に来ないから……な……」
「……君主、もうその顔で話すのは……やめてくれ……」
「……。」
「私も高校で話すのは……つらいんだ……」
「この……屋上……で話すのは……」
「……なんで俺をここに、……呼んだ……」
「……。」

「この前、……園歌……」
「……、白鳥にお守りを渡したの……」
「……。」
「……。」
「その時、嬉しそうに笑ってくれた……」
「……。」

「昔の記憶はないのに…」

「海辺で私たちと遊んだ記憶は、もう…」

「…消えたのに」

……………。

「俺もこの前、時見くんに会った…」

「俺はアイツの歌を、歌った…」

「その時、懐かしい気持がするって言うてくれた…」

「…園歌ちゃんも、歌ってるって…」

「俺たちとあの子たちの思い出はもう、存在しない…」

「…でも、俺たちとあの子たちは世界こゝろにいる…」

「それだけで十分…なんだよ……」

……………。

「…白鳥に時見、貴殿院に藤林、飛馬に塚原…」

「あの子たちと高校生むかしの私たちは、…似ている…」

「私はあの子たちと一緒に過ごしていて感じる…」

「私たちも、この子たちみたいだったんだな…ってな…」

「あの子たちと高校生むかしの私たちは、…似ている」

「…でも、私たちと同じ未来けっまつにはならないで欲しい…」

「……………」

「…君主……………」

お前も…そうだろ……………」

……………」。

「屋上^{（11）}で交わした約束…」

長原…、覚えてるよな…」

「忘れたことなんて一度も…ない」

「…誰も、思わなかったよな…」

俺もお前も、島田も細田も白川も…」

そして、アイツも……………」

「…あの約束が、最後になるなんて…ね…」

「約束したあと、アイツはどこかに行ってしまった…」

……………」もつ、会えない……………」

「……………」

「……なんでだよ……」
……なんで約束したあとに……あんなことが起きる……んだ……よ……
……なんで全部……もっていく……んだ……よ……
……なんで……だよ……
……なん……で……」
「……、……君主……」。
「……、……」
「……」

「……、……まじやめな……」。

白衣に映る黒い世界
隣でそれを見つめる彼女の頬に
途方のない水平線が差し込む

私たちが泣いても、何も、起きない……よ……

18・雨上がりにその腕を伸ばして

じっと見つめるとわかること

ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり…

数えきれない白い塊が動いている

あのカタチは昨日と同じ…カタチ？

胸の中で問いかける

でも

答えは…

いつもこの空は俺を見つめている

でも、俺はいつもこの空を見つめていない

そう

だから、あのカタチがわからない…

ふと見上げるとあるあたりまえな景色

それを当然のように見つめる…自分

腕を伸ばしてもあのカタチは、もう…

青い空と白い雲

その狭間から差し込む柔らかな日差しが
何も掴めないその腕を寂しく照らす

今日の予報は晴れのち雨。

でも、この空を見る限りとても雨が降りそうな天気には見えない。
…。

どうせまた、はずれ…だろう。

これなら折りたたみ傘を持ってくるのだった…。

この透明のビニール傘というのは見分けにくくて困る。

学校に着いたらこの傘のそっくりさんが勢揃い。

帰り際、傘立てに立ち寄ると自分の傘が見当たらない…。

誘拐？神隠し？いや…。

傘隠し…ってね。

気のせいかさつきより空が暗くなったように感じる……。
見ればわかる状況。

これは、ちよつと危ない気配……。

久しぶりだ、正確に予報が当たるのは。

「午前中に通り雨が……」

とりあえず、この言葉だけでも聞いておいてよかった……。

段々と雨足が強くなってきている。

こういう時は大きさを勝るビニール傘の方が有利。

折りたたみだと骨組みが脆もろく、走りには適していない。

走る際に雨が傘をかわし、体に襲いかかることは……まあ……。

とりあえず、……急ごう。

……。

……、……？

……あの傘は、もしかして……。

陰鬱な時雨しぐれが微細な音を紡ぐ中
走りだそうと濡れた路地に脚あしを踏み込んだその時
瞳に鮮やかな傘が映り込んだ…

「…白鳥…？」

「…あつ、時見くん…」

「本当に、急だよな…」

「雨の日に走るのには…慣れないな…」

「こう降られると学校に着く時間が変わるんだよな…」

傘を差した人で溢れかえる商店街を抜けないとだから…

…はあ、このペースだと間に合わないな…」

「こういう時に、白川先生の授業が役に立つんだよな…」

「…？」

「ダイエットだと思えば、頑張れる気がする…」

「…、皮肉…だよな…」

周りを見渡すと大量発生したビニール傘。

正確に言うと俺たちと同様、学校へ急ぐ生徒が傘を握り必死に走っている。

だれか1人でも止まったら大渋滞…

…商店街で起こるおじさん方の通勤ラッシュさえ緩和できれば解決するのだが。

当然そんなことは不可能であり、裾を濡らしながら走らなければならない…。

「明日は筋肉痛で卒業するようだな…」

「……、……。」

「そういえば、貴殿院が今日の放課後に屋上に集合とか言ってたな」

「電話で…連絡きたね」

「まあ、これじゃ中止だな…」

「『お菓子と飲み物は必須だからねっ！！』って、言ってたけど

……」

「いったい何をする気でいたのか…」

「……、……。」

「明日は、晴れると…いいね」

傘越しに見える雨粒。

口元から漏れる吐息が、この透明な衣に霞みを描いていく…

水たまりを避けまた一歩、進んでいく

俺の隣にいるのは白鳥…

そして、白鳥の隣にあるのは静止した海。

見えるもの全てが悲しく…見える
なぜだろう

雨のせい…か？

……。

「今日はこっちの傘…なんだな」

「…ビニール傘だと、どれが自分のだかわかんなくなっちゃいそう
…だからね」

「その傘、随分と大切に使っているよな…」

「高校に入学した時から使ってるから、もう三年経つかな…」

「めずらしいよな…」

女子で青色の傘、差すなんて…」

「変…だよな。」

「…いいや、そういう意味で言ったんじゃ…」

「……。」

私ね…、どうしてこの色が好きなのか…わからないんだ」

「…、？」

「…どうしてだろうね、特別に好きだった記憶は…ないのに」

「……。」

「理由がないのに、……好き…」

「……。」

「…おかしいよ…ね」

通り雨じゃないのか？

なんでこんなに寒いんだ

やっぱり、嘘はまねだったのか…

何を根拠に天気がわかるのか

…何も、知らない

結局、訪れるその時までどうなるかはわからない
気まぐれな確立

そんなものに、この空は支配されている…

…そして、この腕はあの厚い雲を取り払うことができない

…どうすればいい

いつまでも俺はここで見つめることしかできないのか…

…いや、…違う…。

「理由なんて…なくていい」

「…、え？」

「確かに特別な思いがあることは大切…

でも、それ以上に大切なことがある…」

「…、…。」

「いつも見ている景色があたりまえに感じることに。それは、当然なこと…。」

「…でも、こうして雨が降ると見えなくなってしまう…」

「…、…。」

「あの空はいつも俺を見つめていた。でも、俺は見つめていなかった…。」

「この空が身体を包んだ時、俺はようやく見つめた…。」

「…、…。」

「俺は気づいた…。」

あの空が好きで、この空が嫌いなことを…

いつも見つめていなかったからずっと…、気づけずにいたんだ。」

いくら伸ばしても、この腕は届かない
どれだけ背伸びをしても、近づけない
決して…掴むことのできない存在
どれだけ待ち続けられいいのか…
立ちつくしたまま見つめるというだけの行為
時間だけが過ぎていく
でも、いいんだ…
だって、こうしていることの方が俺は
……好き…、だから
理由なんてない
だけど、なんだか…

…温かい…んだ

交差する雲と太陽

差し込む日差しが織りなすその光はやがて濡れた路を照らした
す
穏やかな風はきらめく海面を揺らし、そして彼等を優しく包む…

「…さあ、行こうか白鳥…」

「…うんっ」

「…あ、ちょっと待って…」

「…？」

「…あと、もう少し…」

「…何、してるの？」

「…ふふっ、見ての通り…」

「…、！私もやってみようかな…」

「…2人なら、いける…かもな……。」

澄み渡る青空の下、
そこには綿雲を掴む……二人がいた

19：薄紅色の願い

薄紅色

校門の隣で佇むそれは、ただ、綺麗で
見とれていて…

命の限界^{おわり}

奥深くに潜む影が、身体を包み
そして…、全てを否定する

………
途方のない海^{せかい}

そう、このまま沈んでいくだけ…

離れていく…

いつも見えていた空にはもう…

届かな…い…

「.....、くん
.....？」

屋上^{こじ}に来て、だいぶ時間が過ぎた。

約束の時間より早く着いてしまった...。

あと数分もすれば全員、集まる。

...、さすがに立ち続けたままで待つのは...きつい。

座りたいのだが、今朝の雨のせいで水たまりが足下^{あしもと}を制圧している
状況。

腰を下ろした瞬間、推測される冷たい浸食...。

改めて、シートを用意するべきだったことを…反省する。
俺以外の誰かが持つてくることを祈るしかない。

すでに誰か居ると思って来たのだが、…予想外の結果。
まさかの俺、だけ……

こうして、一人で待つのは……苦手。
話をする相手がない、何をしたらいいかわからない、時間の流れ
が遅く感じる……

……。
……。
……、……。

「……、時見……くん？」

「っ……！」

「……やっと気づいてくれた……」

「……本当に……飛馬……？」

「……ふ、ふふふっ！」

「……？ど、どうした急に笑いだして……」

「…う、うづん…、なんでもない…
ちよつと、かわいいな…ってね。」

「…????」

「…ふふつ。」

隣り…いい…?」

「…、…。」

「…ああ」

会うのは体育祭以来…

今でも、覚えている。

飛馬かのじょがリレーのアンカーで走り抜ける姿…
そして、一番速く白線ゴールを…越えた…

みんなが笑顔で彼女を囲んでいた。

でも、その中には…涙があった

…嬉し涙…

本当に、温かった…。

いつまでも、あのままでいたい

そう思っても、…叶わない

明日はもう…

…ふふつ、何を黄昏たそがれている……んだ…

…出会いと、別れ…

…知ってるよ

俺が今から何を受け入れなければならぬかことが……ぐらい……
……。

「…時見……くん？」

「………？」

「どうしたの……」

「さっきから、ずっと海を見つめて……」

「…、え？」

「何を…考えてるの？」

「特に……」

「…うそ」

「…！…！」

「そんな元気のない顔で言っても、説得力ないよ……」

「…ははは」

「…時見くん。私にはわかるよ……」

「………」

「卒業式のこと………、……だよな。」

意識していないぞ……俺は。
なのにどうして……なんだ。
どういうこと……だ。
無理やり……隠している？

おかしい……ぞ。
こんなはずじゃなかった……のに。
急に胸が……熱い
抑えられ……ない

そうか……
飛馬の言葉が俺を正直にさせたんだ……
いまこの瞬間まで、見て見ぬフリをしていた自分……
バカ………だな……

この季節は嘘をついちゃいけない……
だから……いいんだ。
……俺が自分を認めるということ
すべてを……出していいんだ。

「校門の横にある桜を見ていたんだ…

一枚の花びらが風に流されて…

…海に、舞い降りた」

「…。」

「初めは、たった一枚だけ…

そして、次第に海は薄紅色で染まっっていった…

…数えきれない綺麗な、花びらで」

「…。」

「でも、しばらくすると沈み始めた…

何も見えない海の底へと…

落ちていく…」

「…。」

「もう、今見えるのは消えていく姿だけなんだ…

あの桜にはもう…

…花びらが、……ないんだ…。」

「……。」

戻れない。

拒めない。

逃げられない。

避けられない。

認めなければならぬ。

従わなければならぬ。

受け入れなければならぬ。

進むしかない。
越えるしかない。
立ち向かうしかない。
勇気を出すしかない。

でも……
怖いんだ……
痛いんだ……
苦しいんだ……。

「……時見くんは、気づいていないんだね……」
「……、……え」
「さつきも、そうだった……
声をかけたのに、……」
「気づいてくれなかった……」
「……、……」
「すべて見えなくなる……って思っているかもしれない
でも、それは間違いない……」
そして、その証は近くに隠れている……」

「……、……。」
「……意外と、自分じゃ気づけないもの……だよな」

……！！？

飛馬の身体が近づいてくる……

……？

…………え

これはどういう……展開……だ……

さすがに無い……よな……

……っ……！！……！！

顔を近づけ…………て……くる……

いや、急すぎる……

まさかこんな事が……

心の準備がまだ……

……ま…………だ……、……

っふ……！！……！！……！！

………

……、………。

……、あれ………？

「この薄紅色に、…また会える…、よね……………」

春風が吹く高校の屋上

そこには悪戯いたずらな笑顔で少年の頭についた桜の花びらをとる少女がいた
やがて、それは掌てのひらから空の彼方へと離れていく…

20：六翼の辿りつく場所

ためらうことなく

真つすぐに

風を追い越し

飛んでいく

海を越え

雲を越え

空を越え

そして

指先に込めた思い

その淡い願いを見送る

気がつくともう空には

……

夕空の屋上

制服の袖を小さく下ろし

震える頬を無理やり

ごまかした……

―――。

屋上こに集まっても…変わらない。
いつもの時間…。

特にそれらしいことは何もやらなかった
ただ話して、ただ笑って、ただ過ごして…。

…貴殿院に藤林

…塚原に飛馬

そして…

俺と、白鳥…。

勝手に過ぎていってしまふ。

俺たちができること…

それは、ただ…

こうしている…こと。

いつまでもなんて…ありえない。

そう

だから…

終わらせなければ…ならない。

「もう、終わりにするわよ…、みんな…」

「…ミレア、この紙をみんなに一枚ずつ、配って…」

「…、フフッ。」

「はいはい……………」

「本当は、これをやるのは卒業式あしたなんだけどね…」

「……………」

「…これって、いつから始まったんですかね…」

「…昔、この街に地震が起きた時……………」

「……………」

「『ある生徒たちが、ある人との約束を守るために飛ばしたことから始まった…』」

「…そう、長原先生が言ってた……………」

俺とみんなが出会う前に起きた出来事…

傷跡は今もなお、続いている…

胸奥きおくに潜む、忘れ去りたい…過去…

…。

渡されたノートの断片で、歪な飛行機を折っていく…
左右の翼の大きさが…、違う。
何度も折り直して、キレイな翼を作ろうとする
…でも

やっと完成したこの翼…
最初に折った時の方が…

…
良かった…。

白いその身体には、無数の折り目の跡…

…キタナイ

こんな翼では、あの空を…

飛べるはずが…ない。

「ミレア…」

「…は、こっつ折らないと…」

「…、…。」

「…自分で折らないと、ダメなんですよ…」

「……………」

「…どんなに折れ曲がろうとも、…この翼は、…。」

「…フフツ、いいんですよ…」

「…これくらいの折り目の方が案外…、飛ぶんですよ……………」

「……………」

「……………」

「…最後に、こっつやって……………」

「……………ミレア…」
「……………」

それぞれの掌てに握られた、それぞれの翼…
形、大きさ、全てが…

…
違う…。

…
だけど…
その翼たちが望む世界は…

…
同じ…。

この広すぎる空せかいをどこまで飛んでいけるだろう…か
指を離れた瞬間、飛び立ってしまう…
もう

戻ることはいできない…

…どんなに恐くても
…どんなに痛んでも

…どんなに苦しんでも
もう、空そらは……

「……。」

みんな出来た…みたいね」

「……、……。」

「ミレア……」

どうしたの…よ……、……」

「……。」

「アンタがそんなんじゃないよ……なの……よ……」

「みんな…だって……」

「……っ」

「……、……」

わたし…だって……」

「……。」

「ガマンしてんだからね……」

みんな隠していた
隠さないと…保てなかった
でも…
隠せなかった

そのままでは笑って終わると思っていた
今のままで…終わる
でも…
笑えなかった

零れてくる
溢れてくる
止められない
気持ち

…そう
だから…俺たちは
この翼を
…あの空に…

「
」
「
」
「
」
「
」
「
」

「飛ばすんだ。」

「.....」

その翼たちは離れていく
供に過ぎた場所を飛び立ち
再び出会うことを誓い
明日を迎えるために

その明日あすに待ち受ける世界
やがて夕空を黒い霧が覆い始め
消失させる

翼たちは黒く染まりゆく

六翼の辿りつく場所
迫りくるその黒雲はやがて
その白い身体からだを

.....

暗すぎる空
何も見えないそこは
…痛み
そして

壊れていく空

21：再びの雨、秘められた想い

それは髪を濡らし
それは頬を濡らし
それは体をぬらし
それは心を濡らす

どうしたいのだろうか
どうしようとするのか
どうなりたいのか
どうなるのか

この雨に恐れながら
この雨に痛みながら
この雨に苦しみながら
この雨に問いかける

なんなんだ
胸の奥が詰まる
この感じは

…

………。

みんなと別れた後、俺たちは海辺に立ち寄っていた
何も話さず、何も話せずに…
降り続ける雨の中を沈黙したまま
ただ、立ちすくむ…

声をかけてくれることを期待する自分
自ら踏み出せずにいる
助けを…求めている。
情けない…

この想い…を身体の底に溜めたまま今まで過ごしてきた
その結果が、今日の…
今の…
…自分。

伝えられない気持ち

その行き場のない想いが
この……、気持ちを生み出して……
全てを、締めつけていく……

「時見

……いつまでそうしているんだ……」

「『傘を教室に忘れてきたから、一緒に帰ってほしい……』
……ふふっ、……
笑えるな……」

「俺に、そんな嘘が通じるとでも思ったか……?」

「……、お前……」

「下手なんだよ……」

「……、……。……」

「下手……」。

俺は何をやっても上手くいかない…

…そう

だから、嘘をつく…。

持っているものとは違うものを出して

それを本当のように見せて

本当に伝えたいことを伝えられないまま

…終っていく。

いつまでも、いつまでも…

嘘をついていく

嘘それを隠す嘘をついて

また、…嘘…を。

自分を表せない自分に対する自己満足…

現実には変わっていない自分…

外側も内側も…

…嘘。

「…、文化祭の時、俺は嬉しかったな…」

「…、…、…」
「ステージ…、…、…」
「舞台の上から見えたんだよ…」

暗闇の幕が上がるのと同時に、お前たち2人の…すがた笑顔が…」

「…お前は、あの時の自分おまえ自身の気持ちを覚えているか…？」

「……………」
「俺は、今でも覚えている…」
あの数えきれない人の中でも、光り続けていた…
「お前と、……………」
白鳥……………」
をな。」

……………」
……………」
……………」
……………」

蘇る…
あの時の景色が…
あの時の自分が…
あの時の気持ち…が…

楽しかった…
嬉しかった…
温かかった…
一緒にいれて…。

…込み上げてくるこの気持ち。

この…想い。

……、……。

……。

「…時見

その涙^{なみだ}までをも、…雨でぐまかすつもりか………?」

「…違うよな

お前は、その想いを伝えたい…

だからこそ、ここにいる…」

「だから、伝えないとなんだよ…

そう、たとえ…

「………」

「……この雨が俺たちを、拒んでもな……。」

どうしてだ…

なんで溢れてくるんだ…

勝手に…

……っ、……。

ずっと前から抱いてた…

ずっと前から言えずにいた…

ずっと、ずっと…

……、ずっと…

そうだ…。

今まで…ごまかしてた。

…だからだよ

抑えていたものが今…、溢れてる…

この想いを伝えたい…

だからこそ…

そう、俺は…

.....。

「俺はもう帰るぞ」

「.....」

「.....ふふっ、」

「もう、泣くなよ.....」

「.....」

「.....明日は晴れるといいな」

「.....」

「.....また明日な」

-----。

「
…ありがとう。
塚原……………」

ソノ音八波紋ヲ紡グ
ソノ音八亀裂ヲ紡グ
ソノ音八崩壊ヲ紡グ
……激シク、強ク……

雨八続ク

雨八……続ク

……雨^シ八ヤガテ

本当ノ闇ヲ見セルダロウ

君ニ八聞コエテイナイ

コノ世界ノモウ一ツノ声ガ

ソノ声ヲ聴イタ時……

ハタシテ耐エラレルカ……

マダ君八知ラナイ……

君八、隠サレタモウ一ツヲ知ツタ時

...

.....

コノ世界ヲ...

22：思い描いた世界

今まで君と…

みんなと一緒に過ごしてきた

この教室はくしほ

…。

なんでだろう

いつも俺は遅いんだ

気づくのも、思うのも、感じるのも…

…、…。

扉

この向こう側に

…

君がいる

素直になれないかもしれない

でも

俺は…

…伝えたい。

教室の扉を開くとそこには…

電気を点けず、窓側の自分の席に座っている

…、？

ずっと、窓越しを見つめ続けている

教壇に立って自己紹介をした時…

…俺がこの高校に転校した、あの日

あの時も、今と同じように窓の外を見ていた
…。

最初、見たときは全然わからなかった。

なぜ、真っ直ぐで綺麗な瞳めをしていたのか

何をそんなに見つめるのか

でも、彼女の隣の席に座って…俺にもわかった

校門の隣で佇む一本の桜。

俺が、あの日、この場所にいたときも

今と同じで…

………。

「あの桜にはね、不思議な力があるんだ…」

「…、俺がさつき見たときは花びらが全部、散れていたのにな」
「きれい…だよな」

「…ああ」

「いつも私は見てたんだ…」

「誰も気づいていないかもしれない…って思いながら」

「…。」

「でも、私の席の隣の君は…、気づいてくれた。」

「いいや、俺が…」

「…気づかせられたんだ」

偉い学者に笑われてしまうだろう

説明ができない

論より証拠。

常識という世界では、非常識と言われてしまう…

童話の世界。

魔法の世界。

仮想の世界。
所詮は作られた世界フィクション

疑ってしまっ…

眼前に映る桜けしき

でも、本当なんだ。

俺…たち、2人が今、見ているものは

満開の桜。

去年見た景色と同じで

その薄紅色が

世界にある…

「わたしね、最初はあの桜だけ見てたんだ…」

…でも、高校3年生から窓越しの景色は変わった…

「…ふふっ。」

「…窓ガラスに反射するんだよね」

「俺達目を合わせると、よく笑ってごまかしていたな…」

「…もし、あの桜がなかったら、どうなっていたんだろっね…」

「…そうだな」

「みんなと一緒にいられなかったかも…」

「…。」

「俺は、あの桜から勇気をもらった。」

「自分も頑張らないといけないな…」

「そしてわたしは、そんな転校生きみを見て…、……………」

彼女が何か言おうとした瞬間、小さな音がした
静かな教室に、雨の音が響きわたる
先ほどまで降っていた雨が、再び訪れた
次第に激しく窓を叩き始める

俺たちは雨にうたれる桜を見つめる
線のようなその雨足は、容赦なく花びらを散らしていく
辺り一面に水たまりができていく
数え切れない雨粒が絶え間なく降り注ぐ

窓側に座る彼女は心配そうに桜を見つめる
その憂いの表情が窓に反射し、俺の視線と重なる
ぎこちない笑顔で俺を見つめ返す彼女
空の色は灰色、その顔は必然と悲しく見えた

しばらく俺たちは桜を見つめ続けた
しかし、薄紅の身体は無残に冷めていく
窓越しの桜は
残酷な空を、虚しく見つめ続けていた

「…ご、ごめんね。傘を取りに戻ってきたのに、私の話につき合わせちゃって…」

「……………、…い、いや大丈夫。」

「ずぶ濡れ制服姿でいきなり登場したからビックリだったよ

最初、人影を見た時、長原先生が来て、また国語辞書で攻撃されるのかと……………」

「…、あはは……………」

「傘立てに見覚えのある傘があつたから…

…あれ、時見くんのだよね…？」

「…あ、うん。……………まあ……………」

「いい加減に帰らないと、そろそろ本当に先生がきそつだから帰らないとだよね…」

はいっ！これ時見くんの傘！！！！」

「…あ、ありがとう。……………。……………」

どこまで弱いんだ……………

…わかっているだろ？

ここで何も言わなかったら伝えられない
本当の気持ちを伝えるために教室こくしつに来たんだよ、俺は…

…、……………。

あの桜がくれたんだよ。

あの桜を見つめる彼女がいて、俺はあの桜と出会った
そして、勇気をもらった

…そっだ。

今度は俺が勇気をだすんだ。

この気持ちを伝えて
雨に負けないことを…。

…卒業式あした、また満開の桜と

…笑顔の君と

…本当の自分を、…迎えるために。

……………。

「……………あ、あれ？」

傘が開か…ない……………」

「……………、……………」

「…あ、あははは…」

時見くんの傘は、ちゃんと開くよね？」

「……………。」

「…な、なんで急に壊れるんだろっね？」

「こ、これじゃ帰れない…なあ……………」

「……。」

「……え、えーと、私……。」

「お母さんに迎えに来てもらおうか……なあ」

「……白鳥しらとり……。」

「お互いまま、……嘘はねえし……」。

俺の両腕は彼女の背中を包んでいた
これでいい
これが
本当の気持ち…。

彼女の顔を見つめてみると
そこには薄紅色の頬をした
本当の彼女がいた
胸の鼓動が伝わってくる

窓越しを見つめてみる
そこには降り続ける雨
その向こう側には
花を散らす桜

俺は信じる
明日のことを
必ず…、思い描いた世界は来るんだ
だって…

白鳥かのじよの笑顔が、
∴ かわいいから。

雨

卒業式が終わり、みんなとある約束し別れた後、俺たちは一緒に歩いていた

昨日と変わらない空

振り返ると校門には花を散らしたままの桜
濡れ続ける地面…。

……。

複雑な気持ち。

新しい次の扉を開くその腕に対して、脚は踏み出すのをためらっている。

この先にある、まだ見たことのない世界に対しての不安。

…そして。

いままで近くにあつたかけがえのない存在と離れてしまつという現実に対する不満。

贅沢者だ…。

かのじょ白鳥と永遠に会えなくなる…わけでもないのに。

……………。

「今日も雨…、だね」

「…うん」

「時見くんは雨って好き？」

「嫌い」

「即答…だね。」

「白鳥はどつ…?」

「同じく…。」

「だいたい、雨を好きなんて言う人なんているのか?」

「いや、時見くんいつも傘を持ってて、雨をこよなく愛してるイメ

ージだから。

「今日も時見くんが傘を持ってきた結果、こうして無事に帰れているわけだし……」

「俺はどんな印象なんだっ！」

「……てか、何で傘忘れたんだ？たしか、傘二本持っていたような……」

「……時見くん、冗談だよね……」

「……いや、さっぱり……」

「……、……」

「ど、どうした？急にそんなミーアキャットみたいな目をして……」

「『お互いもう……、嘘はよそう……』って昨日……」

時見くん言ったよね……」

私を無理やり抱きしめて……」

「最後の発言は語弊だっ！てか、余計なお世話だっ！……」

思い描いた世界。

それが現実となった今。

一つ、……わかったことがある。

得るべきものはすごく多い。

楽しさ、嬉しさ、温かさ……

すぐ隣にある幸せ。

でも、それをどこまで守ることが出来るのか…？
自分に絶対に幸せを一生守れる保障はないと考えると起こる代償。
…そう、弱い自分だと幸せは守れないの…だと。

「た、確かに…、昨日私も嘘ついたことは認めるけどさ……………」

「わかったよ……………」

いまから白鳥おまえが思っていることをズバリ当てるから、見事成功したらさっきの俺の発言は 流すということで、…いいだろ？」

「…うっ？うん……………」

「ズバリ、相合あいあい傘をしたかった！だろ。」

「……………」

「…あれ？な、なんだその妙な目つきは？残念そうな顔は！？」

「赤点回答だね……………」

「赤点ばっかりの誰かさんに、言われてもなあ……………」

「……………」

「…ご、ごめん。俺が全部悪かった……………」

「……………」

「ど、どうしたら許してくれる…………？」

「…これから、追試験を…開始します。」

「…ふふっ、了解です。」

彼女の隣は楽しく、嬉しく、温かい。

それは、もう本当の姿だから。

今まで嘘でごまかしてきた部分もすべて、消えたから。

…でも。

傷つくときは、どのくらい…痛いのだろうか？

仮面を外し、素顔のままその瞳に映る世界は、どこまで自分を責め立てるのだろうか？

すべて現実を見続けなければならない。

…そう、本当の姿を。

「昨日、白鳥の傘は壊れていなかった…。

わざと白鳥は傘が壊れたフリをしていた」

「……………そう…だよ。」

「あの時があったからこそ、今、俺たちは本当に一緒になれた」

「私も、時見くんに本当のことを伝えたいと思ってたんだ。

でも、正直に言つと、恐かった…。」

「…遅すぎたよな。」

「…そう、遅すぎた。」

もっと前に、本当の気持ちを伝えてたらもっとたくさんの幸せな

時間を刻めたのに……。」

「もつと前に伝えていれば、昨日まで嘘の自分を抱え込まずにすんだのに……」

それなのに、ずっとお互いごまかし続けていた……。」

「……でもね、昨日私は嬉しかった。」

「……、……。」

「このまま、何も伝えられないまま終わってしまうかもしれないって思ったときに、君が

来てくれたんだ……。」

身体かいたを濡らして、迎えに来てきてくれたんだ…………。」

「……。」

「だから今度はわたしの番……。」

自分はこれからどうするんだ？

隣にあった幸せを守るために強くなるのか。

幸せの本当の姿を見続けるために先に進むのか……。

これからの未来あしたはどうなんだ？

彼女の隣を離れ、自分を磨きあげるのか……？

何のために？

彼女への気持ちは一生変わらない。

それだけで、十分なんだよ……な……

「……好きです。」

「……、ああ、知ってる。」

「もうちょっと、……。」

「……うん？」

「もうちょっと、……嬉しそうな顔でも……いいんじゃないの……」

「……」

「泣きながらそんなこと言っても説得力ないぞ……」

「泣いてない……よ」

「嬉しいんだよ……」

「……。」

「やっと、はっきり伝えることができたから……」

「白鳥おまえは今日もわざと傘を忘れた……。」

俺に好きと……伝えるために。

そして……」

「…………。」

俺は片手で傘を差したまま、もう片手で彼女を抱き寄せ、その唇を
交わした。

.....。

俺は約束した。

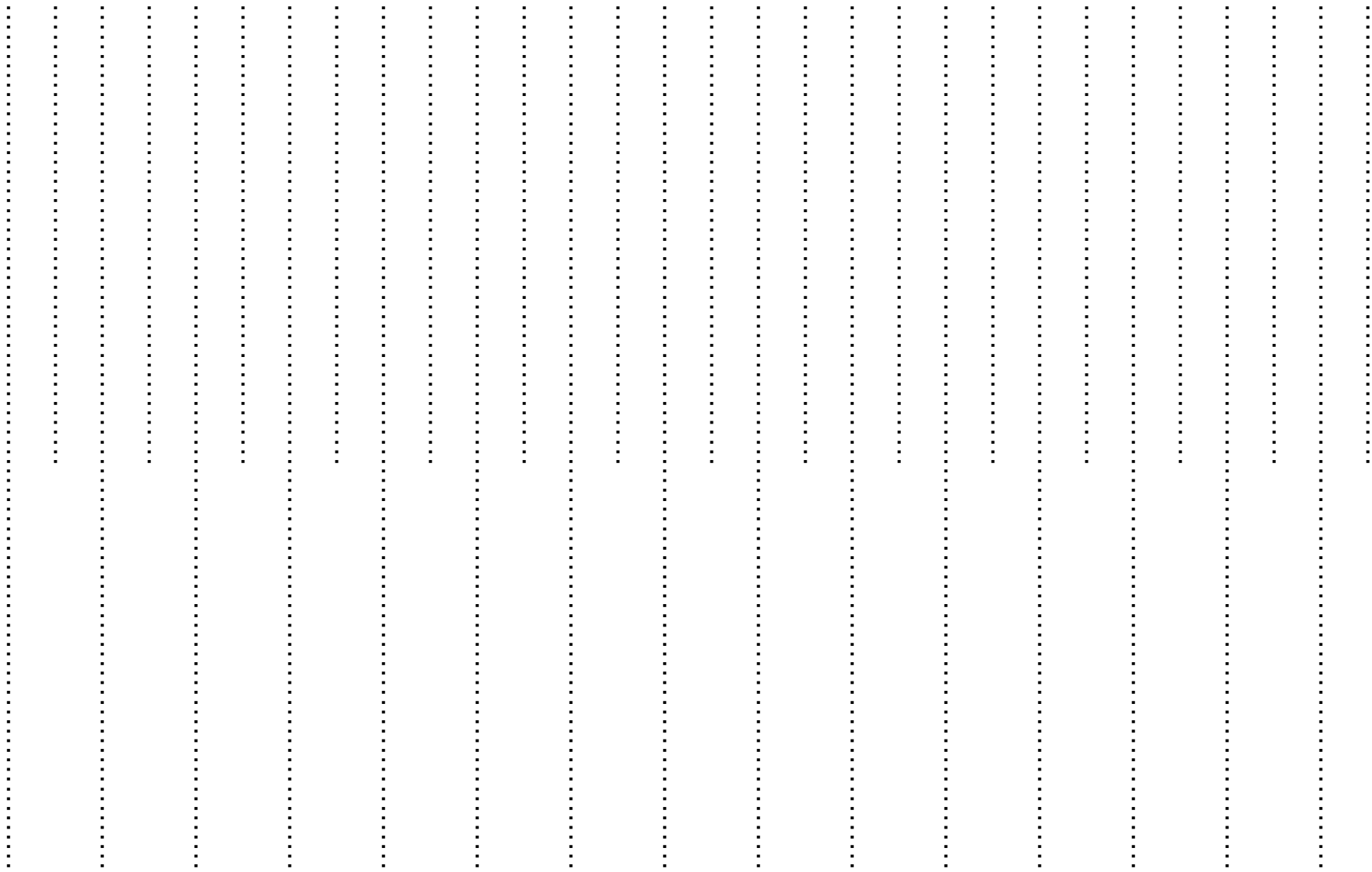
再び高校でみんなに会うことを。

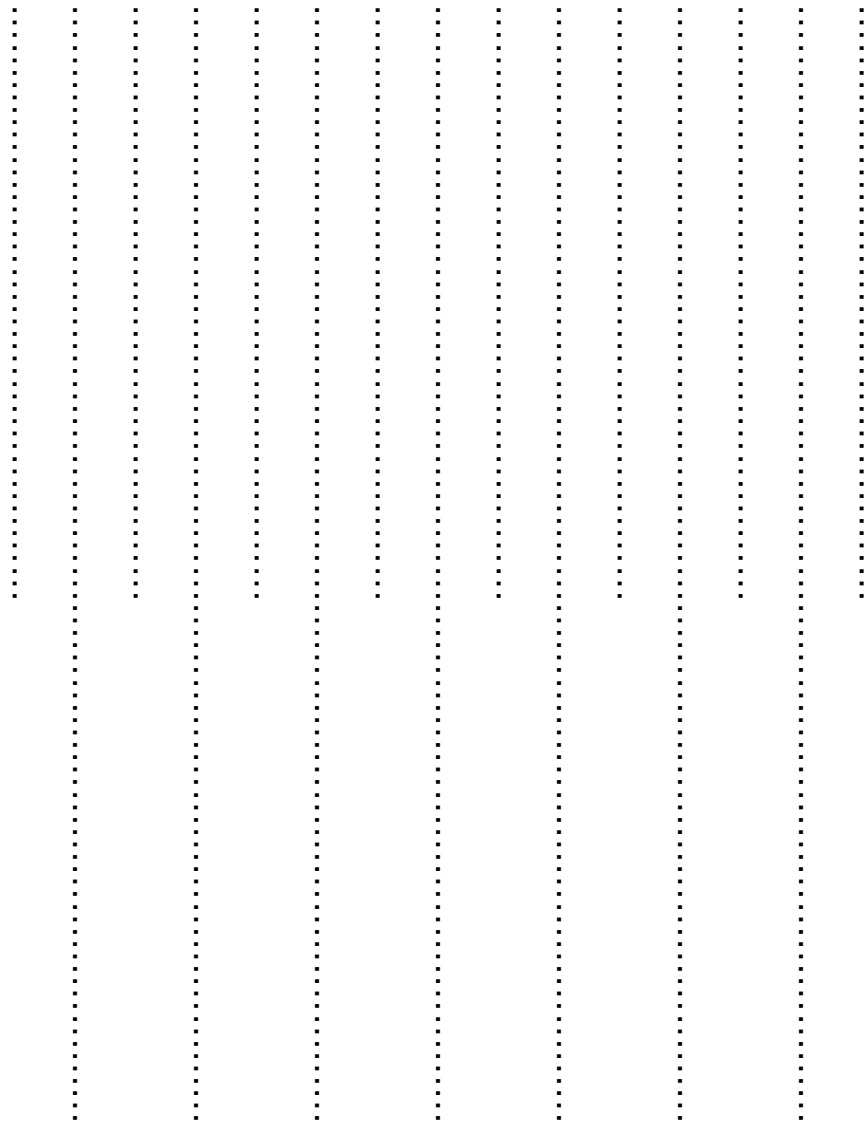
そのときに俺は彼女にあるものを渡すことを決めた。

それを彼女の指にはめるまで。

俺はもっと彼女を…好きになる。

そう、いつまでも…





ソノ音八波紋ヲ紡グ
ソノ音八亀裂ヲ紡グ
ソノ音八崩壊ヲ紡グ
……激シク、強ク……

雨八続ク

雨八……続ク

……雨八ヤガテ

本当ノ闇ヲ見セルダロウ

君ニ八聞コエテイナイ

コノ世界ノモウ一ツノ声ガ

ソノ声ヲ聴イタ時……

ハタシテ耐エラレルカ……

マダ君八知ラナイ……

君八、隠サレタモウ一ツヲ知ツタ時

コノ世界ヲ……

……

…。

俺がそれを知ったのは、卒業式の翌朝のことだった。

病院内には、すでに連絡を受けたみんなが集まっていた。

交通事故による全身打撲。

回復は絶望的。

意味がわからなかった。

目の前には。

変わり果てた白鳥^{かのじよ}が…眠っていた。

雨（後書き）

ご拝読ありがとうございました。

続編「Students？」に続きますのでよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3374h/>

Students

2011年10月9日16時40分発行